# 中央公論

第二十年第六號

## 要目

○女子教育問題（社論）○アンチセミチズムとジオニズム（烟山文學士）○雜誌の編輯と新聞の編輯（松井柏軒）
○在韓同胞の家庭（伊藤千助）○家庭と儀式（烏有氏）

▲政治文學社會宗教と其論評▼

東京市の補缺選擧を見て……社論
西洋の武士道……理學博士 箕作元八
御製の英譯……文學博士 末松謙澄
元祿風俗の復興と色彩の發達……久保田米僊
明治閥黑史（林有造政府顛覆陰謀下）……有磯逸郎
露佛同盟と歐洲權衡の變動……法學博士 中村進午
都人士の驕泰……松井柏軒
高等文官試驗及第秘訣……喜多瀫南

▲趣味を博く内外思想の最健なる者を蒐む▼

○五月文壇（孤村）○日比谷公園（二葉）○新聞活版職工
○ボン〳〵錄（白也）○我迷信觀（西山筑濱）○從軍餘談
○歌（尾上柴舟）○俳句（大谷繞石）○モツアルト（口繪）

▲小説 女客……泉鏡花

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行明治卅八年六月一日

反省社編輯

# 空文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金五十錢　郵稅八錢

本書は世人の常に必要を感じて未だ出版せられざりしものなり、その世に行はるゝる點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なくとして存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照搜索に便利なり本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用とを主眼としなるべく普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け其配列には我社は特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は此書の出版に由りて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし年表は攻學者に限らず世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尙各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番）　反省社

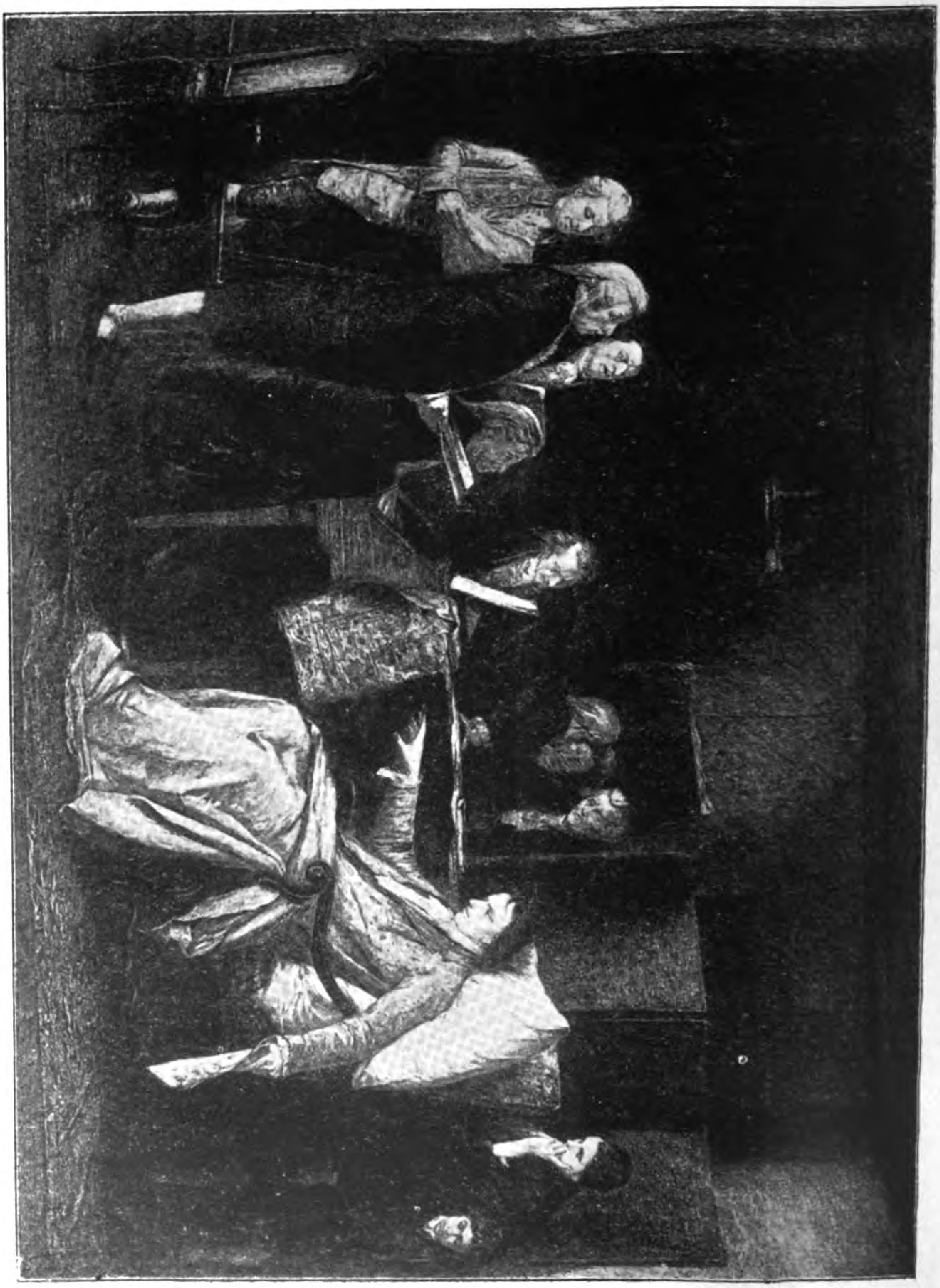
賣捌所　東京堂　上田屋　文明堂　有明館　盛春堂　岡崎屋

# 中央公論

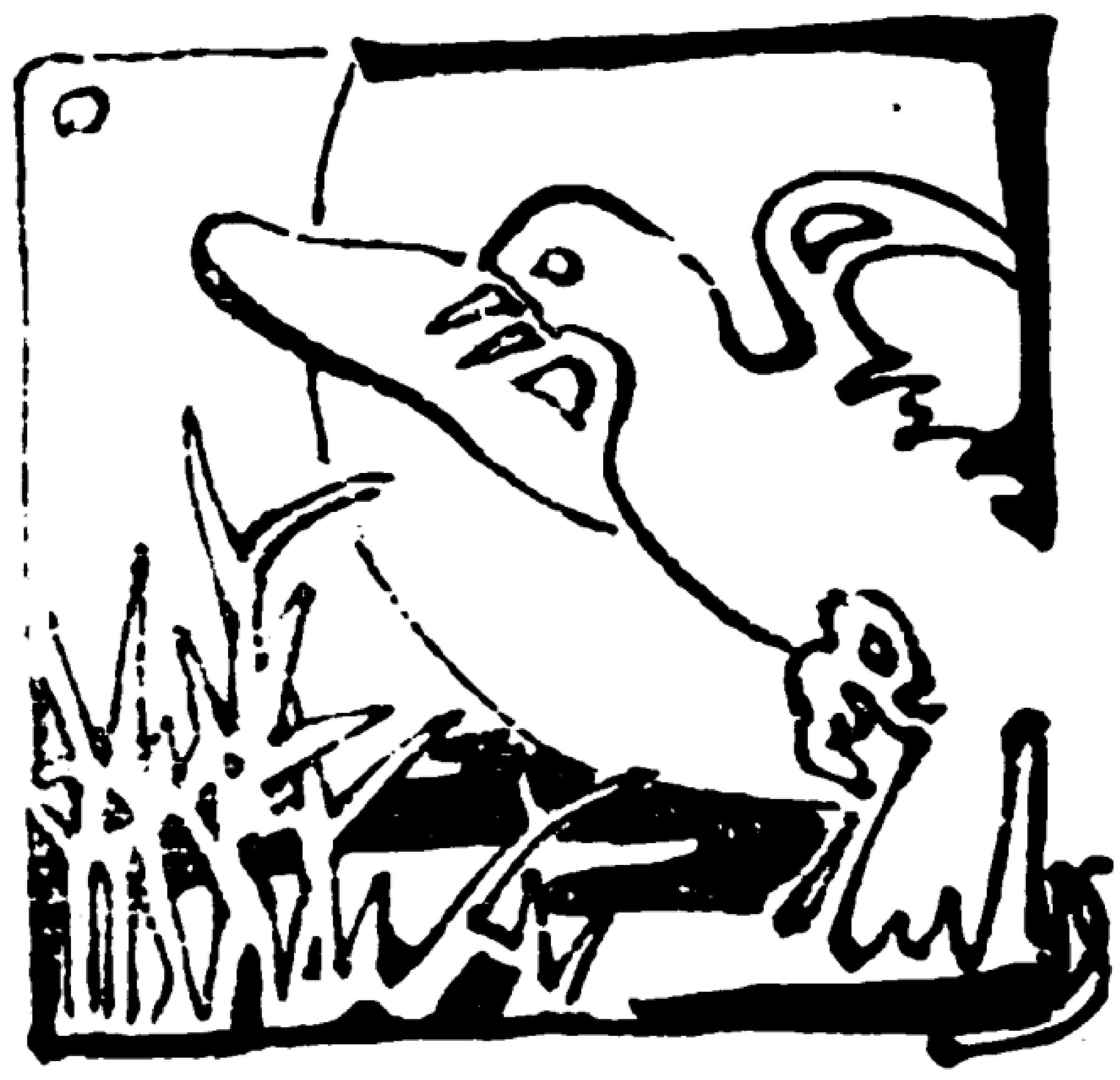
## 本號目次

## ゑとき（口繪）

此畫は彼の有名なる音樂家モッアルトが最後の病床にありて輓歌曲（レクイエム）を其門下に指導する處を描いたものでミハエル、ムンカアチイが傑作の一です。此輓歌曲は甚だ有名なもので、之に關しては中々神秘的の話說がある。モッアルトが病を得て最早起つべからざるに至つたとき、或日無名氏が來て一の輓歌曲を作らんことを囑した、モッアルトは之を以て神が自分の爲に葬儀の曲を作らしむるのであると感じ、病をつとめてこれに從事した。或日妻と共に公園に散策して、ベンチに凭れてうと〳〵と眠つた、夢に天國の歌曲を聞いたと思つて、目覺めると直に忘れない爲めに其ベンチに夢に聞いた曲譜を書いた、モッアルトは之は神の授けたまへる曲譜であると信じた。これが即ち此輓歌曲で、遂にモッアルトの絶筆であつたといふ事である。



# 中央公論



第二十年　第六號


## 東京市の補缺選擧を視て

五月十六日を以て擧行せられたる東京市の補缺選擧を視て。吾人の先づ感じたるは我が選擧の尚ほ大に政治的公明を缺くと也。次に感じたるは政黨が公共機關を以て單に自家勢力の消長の具と爲し。國家若くば都市の利福を眼外に措くと也。試みに之を述べん

（第一）政友會と進歩黨とは。其主義政見の大體に於て相同じきの故を以て。此の議會に於ては提携して同一行動を執れり。故に道理よりいへば兩派合議して候補者を定むるを至當とす。假令然らざるも。斷じて相抗爭するの理あるとなし。然に兩派は初めより共に交涉熟議を斥け。政友會の候補者江間某に對し。進歩黨は林某を候補者として極力之と抗爭したり。是れ彼等の離合が斷じて政見主義の異同に由らざる一證ならずや

（第二）候補者たる林某も江間某も。共に堂々として政見を發表し。之に由て競爭し對抗したるには非ず。江間某は或は政友會員なるが故に。政友會の主義乃ち我が政見也。別に之を發表するの要なしと曰ふを得るも。林某に至ては。遂に政見の如何を知る可らず。彼れ進歩黨の援助を得たるも。必らずしも進歩黨と政見を同じくせざりしとは。其の名義を中立としたるにて明白也。現に島田三郎氏等が中立派の議員たりし故田口卯吉氏の補缺なれば。また中立派たる林某を推薦するを當然とすと唱へて。高梨。福地等の中立派議員と共に極力之を援助したるにても明白也。

或は林某が當選後進歩黨に入るを約して而して之を

實行したるを以て。其の政見進步黨に同じと做さん乎。然らば則ち島田。高梨。福地等の中立派は。全く無意義なる援助を爲したるものと言はざる可らず。然れども林某が進步黨に入るを約し且つ實行したるは。進步黨の援助を借るに非ざれば到底當選の望みなかりしが故のみ。素より政見の進步黨と同じきが故には非ず。若し彼れ政見進步黨に同じと曰はゞ。江間某とは何故の競爭したる乎。進步黨と政友會とは其の主義政見大體に於て相同じといふに徵すれば。理に於て林と江間と競爭する必要無ければ也。語を換ていへば選擧者たる市民も亦二人者の政見如何に由て之を取捨したるに非ずして。全く金力。情實のためのみ。與に共に非立憲的にして。政治的公明を缺くも亦甚だしからずや

（第三）其の勢力の微々たりしが爲め遂に世の視聽外に逸せしと雖も。彼の社會黨の候補者たりし木下某に投ぜられし票數三十二點は、果して悉く社會主義者若くば社會主義贊成者の投票なりし乎。彼が得たる日本橋區の九票京橋區の九票とは。（一）果して此の兩區に九個宛の社會主義者若くば社會主義贊成者あるの確證と爲すべき乎。（二）抑も又木下夫人其の他の懇願に由りて情實上餘儀なく投票したるもの乎。若くば林江間に投ずるを好まず。木下の落選を必して物數奇に之を投じたるものなるや否や。若し（二）ならば亦選擧の眞面目ならざる一證にして。且つ同じく非立憲的なりとも謂つべし。

（第四）進步黨は必らずしも林某の人物政見を贊せしには非ず。政友會亦甚だしく江間某を悅べるには非ず。而して共に極力之を助けし所以は他なし。其の市會議員區會議員の選擧形勢に關係あり。隨つて市に於ける兩派の勢力に消長あるがためのみ。若し江間勝たん乎。市及び區に於ける政友派の勢力振ひ。其の市會區會の議員選擧に少からざる便宜を得べく。林勝たば進步派亦然るべし。彼等は唯だ區及び市に於ける地盤を維持し。兼て其の勢力圏を擴張するがため。各々候補者を助けて相爭へるのみ。素より主義政見のためには非ず。乃ち知る。彼等の目的は。單に區及び市に於

ける自己の勢力維持及び擴張に外ならざるとを

（第五）市長尾崎氏は政友派の擁立する所のものなり。故に補缺選擧に於て。市役所は頗ぶる政友派の候補者江間のために盡し。一時市役所を目して江間某の選擧事務所と爲す程なりき。理を判ずるに聰明にして。居常立憲政事家を以て自から許す尾崎氏にして尙ほ然り。紛々たる政友派進歩派が市役所區役所に對する現行知るべきのみ。彼等が區及び市に於て勢力を爭ふは必らずしも自派の所信を執て區及び市の經營を圖るには非ずして。單に區及び市に勢力を恣にして自家の私利私福を計らんとするが故のみ。彼等が選擧を爭ふの目的は。單に其の勢力を爭ふにあり。其の議員の頭數の多寡を爭ふにあり。而して其の爾かするは。國家又は市のために經倫し經營せんとするに非ずして單に自から權勢の置位に立て私利私福を恣にせんとするのみ陋なる哉。今の政事家、代議士。選擧權所有者なるもの丶心事と所行とは斯の如きのみ。全國の首都にして。選擧の模範たるべき東京市の狀態は實に斯の如きのみ。他は則ち知るべきに非ずや

# 女子敎育問題

近時の新聞紙頻々として女學生の墮落を傳ふ。女學生が女子の貞節を尊重せずして動もすれば淫縱に流れ。甚だしきは則ち花柳病に罹り。更らに甚だしきは賣淫の醜事をすら爲すものあるとは確實也。假令斯の如く甚だしからざるも。一種の虛榮心（ヴァニティ）に驅られて服飾の華美異裝を衒ひ。輕浮なる熱情に趨りて戀愛の自由神聖を唱ふるが如き。往々言語に絕するものあるも事實也

勿論是れは女學生の一少部分に過ぎざるべし。然れども一般の傾向は果して玆にあらざるや否や。吾人は恐る。女學生の多數は少くも其の善良なる方途に嚮ふよりも。寧ろ邪路に陷り易きの虞あるとを

玆に於てか當然起るべきは女子敎育問題なり、世或は一利一害の免かる可らざるを論じて。女子敎育の旺

なる往々斯の如き弊あるも。其の利や極めて大なるを以て之を不問に措く可しと做すものあり。然れども教育は百利あつて一害無き筈のもの也。女子教育に一害あるも亦之を除かざる可らず。女子教育の遂に問題たる所以也

吾人をして遠慮無く言はしむれば。今の女子教育の弊は。滔々たる流俗と共に女子の地位と實力とを尊重せざるに在り。之を尊重せざるがために。女子の人格を高く且つ淸くするとを度外に措くにあり

罪惡の底には必らず婦人あり。歴史上の大事件には多く婦人の潜むあり。此の事實は能く婦人の地位實力の度外に措く可らざるとを明證す。然るに古來多く婦人を輕視し。婦人を以て單に男子の欲を承け樂に供するに過ぎざるものとし。或は食膳を鹽梅し。衣服を補綴し。嬰兒を哺育すべき一種の婢姆に過ぎずとして。妻妾並べ稱して以て人間以下と做すは何ぞや

夫れ婦人をして單に錦衣繡帶を購ふを悦ばずして、之を購ふ所の金錢の正不正を糺し。若し一點不良の處ある金錢ならば。色を正して男子の不義を諫めしめよ。又婦人をして單に何爵夫人たり大臣夫人たるを隨喜せずして。茲に至りし徑路を點檢し。苟くも義に外れ道に叛きて榮達せしものならば。顏を犯して男子の不正を諫めしめよ。然らば則ち不義の富と不正の權勢に執着する男子は。多く跡を世に絕つべし。其の夫が外に在て妾を蓄ひ妓に戯むれ。甚だしきは則ち其の妾と庶子とを家に入るゝも妻たるもの曾て其の非倫敗德を責めざるが故に。男子の放縱至らざる無く。其の家庭また紊亂を極むるのみ。

此の理を知るものは。能く婦人の地位の尊くして而して其の實力の大なるを悟るべし。之を悟るに至つて女子教育の問題始めて正當に解釋せらる

女子に教ふるに外國語を以てし。之をして禮容に嫻ひ辭令に巧みならしむるは可也。女子に學ばしむるの色素の配合を以てし。繪畫。音樂。茶の湯。活花を以てする亦可也。女子に訓ふるに理化算數より歷史文學地理天文を以てする亦可也。女子に授くるに料理。裁

縫。編物。育兒。看護の諸術を以てする亦可也。其の一若くは二三乃至五六七八を敎ゆる實に必要ならずとせず。然れども是れ女子をして利發ならしむるのみ。器用ならしむるのみ。妖艶優美ならしむるのみ。換言すれば一種の器財たらしむるのみ。娼婦妓女婢妾としては則ち妙ならんも。女子としての人格は遂に埋却せらるゝを奈何せん

女子敎育の要は。女子の人格を高く且つ淸くするに在り。自から其地位の重んず可くして而して實力の甚だ大なるを自覺せしむるに在り。適切にいへば。明瞭に其の職分と責任とを自覺して。之を濟す所以を確認せしむるにあり。磨すれども磷せざる底の意氣を有せしむるにあり、大節に臨んて奪ふ可らざる操守を有せしむるに在り。格物致知は則ち女子の職分と責任とを盡すに於て、幾分か理否を判斷するの常識を供へしむる資たるに止まるべし。此の大本を忘却して。單に女子の智才情緒のみを發達せしめんとし。偏に智育美育にのみ趨るは。則ち現今女子敎育の缺點ならずや。彼の虛榮。術奇。淫縱。輕浮の女學生の出づる。正さしく此の缺點の産物なるのみ。

# 西洋武士道

理學博士　箕作元八

## (一)その理想

西洋武士道の理想を申しますれば、第一に勇悍にして死を恐れざること。第二に義烈にして忠誠を守る事。第三には敬神の志の篤い事。此三つが武士道の精神となつて居ります。此點を少し御話をしなければならぬ。

第一、勇悍にして死を恐れざること、是は日本も西洋も變りはございませぬ。

第二の義勇にして忠誠を守るといふことに就ては、大體の所は日本と似て居りますが、中に少し違ふ所があります、先づ任俠であつて弱を扶けて强を挫くといふことは東西共にあります、それから君に誓つた所——臣下の誓を爲した所の君主に對しては死ぬまで忠義を盡す、是も東西異りませぬが。此に所謂弱を助けて强を挫くといふことに聯關して婦人を崇拜するといふことがございます、此點は日本と西洋と餘程違つた所

があります、成程日本でも弱い者は助けてやらなければならぬといふことは、極つて居りますけれども、それは弱いから扶けるのであつて、婦人でも子供でも老人でも……寧ろ婦人より老人を尊む譯である、然るに此婦人を非常に尊むといふことが不思議に西洋武士の方には發達して居ります、それはどうして起つたらうかといふに、一體ドイツ人といふ人種は婦人を尊ぶ習慣が昔からあつたと見える、是はローマ人が始めてドイツ人に接觸しました時に氣が附いたことでドイツ人は非常に女を尊敬して居つた、女に色々のことを相談する、軍議なども相談する、女の方でもさういふ風に尊みますから、矢張戰などに男子と一緒に行つて、さうして戰に負けると非常に聲を揚げて自分の方の男を奬勵して戰はせる、斯様なるドイツ人は婦人尊敬の念が深く染み込んで居ります、是はどういふ原因から起つたか分りません、或は昔婦人が男子より少なかつたのかも知れません、何んでもさういふ風なことから永い歴史で習慣を爲して居つたと見えます、斯ういふ習慣が永い間行はれ居たとすれば、夫は容易に破ることが出來ない、それで耶蘇教が這入りまして、ドイツ人が耶蘇教に化せられてからどうかといふに、婦人崇拜が更に盛になつて居る、何故なれば此婦人崇拜の考と聯關して耶蘇の母マリヤを尊敬する風が起つた、而して非常にマリヤを尊むに付いて又其結果として婦人を尊むことが一層盛になつて來て武士道の上に其影響を及しまして、婦人といふものは何處までも尊まなければならぬといふことになつてまゐりました。婦人に對する武士の擧動は是から追々御話を致しますが、此婦人崇拜といふことは斯ういふ風に永い歴史から起つて居るものでありますからしてどうも無暗に此風を柔弱だ杯と排斥することは出來ない、丁度西洋人が日本人は婦人を尊敬しないから、日本人は下等だといふのと同じことでございます、彼等は日本の歴史を知らぬてそんな言葉を出すので、婦人に對して殆んど馬鹿々々しき崇拜を爲す西洋武士とて決して柔弱といふ譯ではない、永く歴史があつてそれから起つて來た習慣であらうと思ふ、

第三の神を敬する事之は西洋武士の間には非常に盛んであつた、成程日本でも武士といふものは神佛を尊まなければならぬといふ訓戒は隨分有ます、能く人が言つて居るとてありますけれども、併ながら日本の武士といふものは實際に於て西洋の武士のやうに一般に

敬神主義を頭に戴きはしない、さうかと云つて全く神佛を信じない譯はないが、西洋の武士程熱心ではない、殊に徳川時代には儒教が發達して居りまして、佛教などを却つて馬鹿にする氣味があつて、宗教上の觀念が甚しく薄いのであります、之に反してヨーロッパでは當時非常に宗教の精神が發達して、中世の時代といふものは殆ど宗教で精神を固めて居るやうであります、之が爲めに社會の人心が非常に萎縮して、其發達を抑へられて居つた程であります、

どうしてこんなに宗教が勢力を得たかといふと、無暗に唯ヒヨツクリヒヨツとさういふ勢力を得られるものでございませぬ、ローマが瓦解するに當りましてドイツの野蠻人が其領土に侵入した時に非常な亂雜を極めた、さうして文學美術などゝいふ者を一掃してローマの文化が殆ど皆無とならんとした、此時微かながらも此文化の命脈を保つたのは誰であるといふと、僧侶である、當時僧侶は總ての物が破壞される時に方つて獨り此ローマの文化の幾分かを守ることを勤めました勿論迚も充分に破壞を免かれることは出來ないが、幾分か防ぎ止めました、さうして野蠻人を段々敎化して猛烈なる精神を柔げ、漸次秩序を得る方に向ふやうにしたのは宗教の功勞である、僧侶は斯く人民を段々自分の方へ感化するに就て、人民の精神を支配する樣になつた、從つて僧侶の勢力が非常に盛になりました、それでございますから、色々其時分の例を引いて見ますると其勢力に驚くことがあります、例へば非常に人が爭鬪を好んで居る時代に於て宗教の勢力で以て爭鬪を幾分か減ずることが出來ました、此ことは如何に宗教の力があつたかといふことを表はす好い實例と思ふ、又破門（エキスコンムニケーション）をやられると王公貴人といへども、社會に立つて居ることは出來ないことになつて居る、それで此破門といふ事は坊さん方の鋭利なる武器でございます、從つて隨分之を振廻して世の中の事を支配することが出來たのであります、それで一つ斯ういふことがございます、即ちトレウガデイ（神の休戰）と申す事でございます、此トレウガデイといふのは或時を限つて其間に於て爭鬪を總て禁ずる、戰は勿論斬合といふものは、個人の間に於ても一切禁ずる、それは通常水曜日の晩から月曜日の朝まで爭鬪し總て戰に限らず爭鬪を禁ずる、若しそれを犯すときには罰金に處する、三度まで敎會の忠告を受けて矢張爭鬪をやつた者は破門する、破門をされると社會に

這入ることは出來ない、マルで社會以外に放逐される譯である、斯樣に非常なる殺伐の時代に於て唯僧侶の命令に依つて爭鬪を遏めることが出來るといふのは、如何に宗敎の勢力があつたかといふとが知れます、今申しました水曜日の晩から月曜日の朝までといふのは是は僧侶の方から時々言出すので、其他大祭日の時などは特別に禁じまして、爭鬪をすることはならぬことになつて居ります尤も是は隨分ムヅかしいことであります、此殺伐の時代に全く爭鬪を抑へて仕舞たとは出來ないことであつて、水曜日の晩から月曜日の朝までの間は成程謹愼して鬪はずに居りますが、それが濟むと尚ほ一層激しく鬪ふことがありまして充分に爭鬪を止める樣には行はれませぬ、此事は一體フランスで千四十一年に起つたのが始めで、千四十一年に或僧が天から御告があつたと言出した處が、是が其時分必要に當つたからして、僧侶社會に歡迎されまして、さうしてそれが一般にフランスに行はるゝのみならず段々イタリアイスパニアに弘り斯ういふ風に漸々諸方へ弘まつて來ました、何しろ宗敎の勢力の盛んな時代であつたといふ事は是て御分りになりましよう、さういふ風に宗敎の盛な時代でございましたからして、武士といふものは非常に宗敎心が厚いのでございました、此點は日本の武士と異つて居る所でございます、

それからモウ一つ序に是は武士の理想でございませぬが變つて居ることは、ヨーロッパの武士といふものは多くは非常に無學で何にも知りませぬ。自分の名の書ける奴は餘り無いくらゐであつた、そんな振合でありますが、德川時代の日本の武士は兎に角にも學問があつた、即ち武士といふ者は文武々々と云つて戰ふばかりではない、文武共にやらなければならぬといふ考が十分ありましたからして、大體に就いて申しますと日本の武士の方が西洋の武士より確かに學問があつたのでございます、隨分日本では非常な戰國の際であつても眞の武士の中には中々學問があつた、武田信玄上杉謙信といふやうな人でも中々文學に長けて居つたやうであります、秀吉のやうな人でも始めは學問をする暇が無かつたが、後には和歌を作つたり色々なことをやるやうになつた、エライ文學者ではないが一通りりの事は出來るやうになつたので、さういふ風に日本の武士と西洋の武士と違ふ所は是等の點でございますが、其他忠勇なること、任俠なること、或は約束を重んじて一度約束したることは決して破らぬ、是等は東

西一致であります、唯今申す通り武士といふものは時勢の必要から社會に歡迎されました、それで武士は大變尊まれるやうになり、武士は自ら特權を得て來ました爲めに、武士といふものに對しては人が尊稱を必ず用ゐる、例へば今用ゐてる、ヨーロッパの尊稱といふものは總て此武士などに用ゐたものから來て居ります、例へば英語でサー、佛語のモッシユーとか或はドイツのヘル、又イスパニアで謂ふドンといふことは元來皆此武士にのみ使つた尊稱であります、デ面白いことには日本の事に關する耶蘇敎僧侶の書類などに依ると、日本の侍に必ずドンといふ字を附けて居ります、例へば小西行長はドン、アゴスチノとなります、丁度ドンが武士といふに當つて居る、今では彼國でもドンといふ字を矢鱈に使ひますが、是は封建の遺習でありまして武士より外には用ゐなかつたのでございます、武士といふものはさういふ風に尊まれる樣になりました、左樣な有樣で武士が尊まれる處から封建時代に於て人が武士となることを大變名譽と致し、王公貴人といへども武士にならなければ巾が利かないやうになつて居つた、それ故に武士の敎育などが自然淘汰に依り段々固つて來まして、一種嚴格の敎育法が定つて參りましたのであります。

## （二）その敎育

武士道の最も盛なる時に於きまして、武士の敎育はどういふものであつたかといふと、先づ子供が七歲になると父母の手から離れます、それまでは父母の手元で成るべく勇壯のことを敎へて武士の氣風を子供の心に自然に入れるやうに頻りに吹込みまして、それで七歲になると通常家から放して他の武士に托します、通常王の朝廷とか或は其の他貴族の朝廷などへ遣りましてさうして小性といふものにします、小性が即ち武士道の稽古の一時期であります、小性になつて居る間に其處の貴婦人からして頻りに信神を勸められ又禮儀作法の心得を敎はり、それから始終主人の脇に居りまして、主人の食事の時などはチャンと脇に侍して居つて色々の世話をしてやる、マルで家來の通りに――主從では無いけれども、其時分の格言であつて人に從ふといふことは人を支配する始めである、即ち人に服從して、柔順を重んじなければ後に人を支配するとは出來ないといふ格言であります、其筆法で以て人に仕へる、又主人は武士でございますから一の城を構へて其處に居る、小さくても一城である…其頃は方々に小さな

武士がチョッとして城を持つて居る、其城へ他の武士などが訪ねて來る、或は他の高貴な人が訪ねて來る、其送迎には小姓か一々出て往つて之に關係し斯くして知らず識らず段々禮節を覺えて來ます、それのみならす又體育も勿論怠らない、それで或は遠足をして大變に遠くへ行つたり、或は種々の武藝を學び色々の體操などを致し、其他身體を鍛錬することを頻りに習ひます、それから又主人が食事の時には主人と一緒に食事をすることは出來ないが、主人の傍に居つて或は酒を注いだり皿を運んだりして其給仕をやる、さうして其間主人と客の話をするのを聽いて居りますが其談話は小姓の爲めには武士道の心得となるのでございます。

斯く敎育をされて、十四歲になると今度は主人のスクアイヤといふものになる其處の主人が非常な貴族であれば、其下にある武士に賴つて其スクアイヤになるスクアイヤとは從士と譯して宜い、一寸家來のやうであるが特別の性質を有して居て家來とは違ひます、謂はゝ今の從卒、今の從卒は昔のスクアイヤの風を採つたので、封建時代の良い、所を保存する考で出來たのである、其從卒のやうになりまして、今度は武士に始終附いて居る、武士が鎧を着たり脫いだりする時は必ず之を手傳ひ又其鎧刀等を始終磨く、又其馬を世話して之を洗つたりして、スッカリ其仰く所の武士の用を達します、どんな下賤な仕事でもやらなければならぬやうになつて居る、それから無論武士の傍に始終附いて居りますから、心得になる話を常に聽きます、又其武士に從つて、戰場或は演武場に行き、武士が馬から落ちると直ぐに助ける、或は鎗が折れるといふことがあれば代りの鎗を出すといふ風に、始終武士の脇に附いて居つて色々武士道の極意を覺える、それから從士は益身體を鍛錬することを勸め、鎗の重いやつを擔いだり鎧を着て宙返りを爲たりすることを始めは習ふ、それから驅足にて馬に飛乘つたり、或は馬に乘つて走つて行く人の後から行つて片手を鞍に掛け、片手で其人の背を推へ、夫丈で其後鞍に飛乘る、さういふむづかしい難儀な事を澤山やり、其困難に堪へるやうに鍛錬いたします、又それのみならず、體操や武技を餘程鍛錬した後に旅行を致します、それは自分の附いて居る武士の使として行くか、或は一時暇を貰つて出掛けて行く、諸方へ行つて諸國の武士の樣子を見たり、何處にはどういふ武士がある、其氣風は何て其武藝は如何である抔といふことを一々實見し來る、それから演

武會（トーナメント）と申して、武技を演ずる大會があります、是は武士と大勢出會つて其處で試合をする、斯る會がある時は、右の旅行從士は其處に行き其勝負を見物して後學の爲めにする、其上自分は未だ武士立合丈の資格はないが他の從士とは試合を致すことがあります、

かくて從士が二十一歳になりまして、始めて武士になる資格を得る二十一歳になつても自分が好き勝手に武士にはなれない、特別の禮式を經て武士といふことを許されなければ、まだ一人前の武士にはなれませぬ、それで此ナイト即武士を造りますには、合戰の時に戰場での働きが善かつたからして其場で取立るといふ場合もあります、尤も其働きも主人を措いて働くのではございませぬ、丁度家來がやるやうに武士が戰ふ脇に居りまして、さうして武士の鎗が折れた時に新らしい鎗をやるとか、馬が倒れゝば直に副馬を與へる、若し武士が傷を受けて倒れゝば死力を出して敵を防ぎ、武士を助けて敵に殺されないやうに本陣の方へ持つて來るとかいふ風にやるのであります、其間には自然にモウ實際に戰ふ機會があるのでありますが、始から自分の勝手に戰ふのではありませぬ、間接に戰ふのであります、それてさういふ時に身命を惜まず勇戰して忠義を顯はしたと云と其賞として其場で武士にするとかあります、併し之は例外の場合であつて通常は大祭日などの折に彼を武士に仕立る、武士にするにも色々に儀式がありまして、必ず一定はして居らぬ樣でございます、中には餘程面白い儀式がありますが、其の中先づ最普通なるやつを話して見れば、通常愈々此從士を武士にすると極る時は、其市で一番重立つた寺で以て盛な儀式を行います、其處へ土地の重もなる僧侶又武士などが參會しまして、新武士に與ふべき刀を神前の机の上に置いて、宗教上の儀式を經まして、愈々此刀が神聖になつた所でそれを下して、それから武士に成らうといふ候補者に誓はせます、愈々忠義を盡し義務を守り決して敵を恐るまじと云やうなことを充分に誓はしめ、それから通常彼を仕上た武士或は特別の場合なれば他の武士の前へ跪かせまして、さうして其脇に控へて居る者が世話をして、彼に鎧を着せ刀を帶せしめ拍車を付けなどしてやる、併し是は婦人が世話をすることもあります、貴婦人などに此世話をしてもらうのは非常な名譽になつて居ります、さうじて拍車を附けるのが一番重いのです、其間始終跪いて居りまして愈々すつかり武裝が出來まして、夫から彼を仕立る彼の

武士が前述の神聖にしたる刃を以て候補者の首を三度叩きまして「汝を武士にするからして、以後忠誠勇悍にあれ」といふやうなことを言つて、そこで候補者が始めて眞正に武士の列に入ることが出來たのである、モー何處へ出掛けても宜い、モウ自ら臣下の誓を爲さざる限りは主も何んにもないから獨立の一人前の武士であります、けれども是は武士になつて其儘他に使を求むるのは少ない、武士になつて復武者修業のやうなことを致しまして、到る所の武士と話をしたり或はそれと試合をしたり、それから演武會へ出掛るそれから一通りやつて歸りまして、之をヘラルドに報告します、

此ヘラルドといふは貴族武士の紋章を精く知つて居り、貴族の使節となり、禮式の差圖を爲したり、特に演武會抔には凡て其指揮に從ふことになつて居る、其地方の行狀を悉く承知して居る者で、之は武士と相對して中世社會の必要なる分子と爲つて居ります、夫故武士は修業旅行から皈ると、ヘラルドに凡て旅中の出來事を有の儘に告げなければならぬ事になつて居りました、即誰と試合を爲て自分が怪我をしたとか、又何處へ行つて誰とやつて負けたとか勝つたとか、少しも噓を言ふことは出來ない、噓を言つても後ですつかり顯はれますから負けたことまでちやんと報告する、是は勿論武士が彼方此方行通つて居りますから、噓を吐いても直ぐに後から顯はれまする故に無暗に噓は吐けない、自ら本統のことを言はなければならぬ、况んや武士に二言なきは武士道の第一の規則であります、そういふ風にして先づ本統の立派なる武士になるのでございます、

## （三）武士道の花（演武會）

先程から頻りに申しました演武會(トールナメント)といふことに付いてチョッと一言御話を致しますのでございますが、演武會は武士道の花と謂つて可いことであります、此演武會は通常楕圓形の馬場のやうな所で其周圍に棧敷などを拵へまして、さうして此處に貴族の婦人などが見て居る或は年を取つて既に自ら試合をすることが出來ない老武士なども見物して居ります、其處へ双方より出て一々戰を致します、戰を致すには兩方とも鎧を着け馬に乘ります、鎗の先は丸くして輕いのもあり、隨分重ひのも使ひます、ドイツの或演武會では一時に六十人も死人が出來たとがありますから、隨分唯の擊劍會より危ぶないものでございます、通常目的は馬から突落しますので、まア互に鎗を持つて片ッ方に楯を持

つて、さうして兩方から會圖に從つてドッと馬を走らせ、出遇ふ所で一方に楯を以て敵を防ぎ、一方に我鎗を以て敵を突落します、それからメレーと申しまして甚だ危險な事をやります、兩方に大將が出來て源平に別れてさうして混戰をします、此時には中々怪我が出來ます、貴婦人といふ者が非常に勢力がありまして大抵武士といふものは自分の崇拜する所の婦人があるべきもの――少なくとも理論上あるべきものとなつて居ります、自分の崇拜する婦人を一人極めて其人の手袋とか或はハンケチの樣な物、或は何か他に印を銘々に楯或は鎗或は兜に着けまして戰ふのであります、其時には婦人も一生懸命になります、丁度好角家が自分の贔負する力士の爲に狂氣の樣に騷ぐと同じ譯で、自分の與へた印が戰最中落ちでもすると後から直ぐ他の物を贈つて遣る、遣る物が無くなると自分の袖を引ッ裂いて贈つて遣るとがあります、それで演武會の後に婦人を見ると帽子も無ければ袖も無い、死ど半裸體になるやうな亂雜の有樣であつたと申す事でございます、夫程まで一生懸命になつて居ります、自分を崇拜する武士の勝利を婦人等は大變名譽にして居ります、それで何時でも最後の勝利を得た人が、其婦人の内一番の美人、即其日の女王と定てある婦人からして直に褒美を貰ひます、さうして其時其婦人と接吻することを許される、武士の爲之が非常の名譽である、さういふ風で婦人の勢力は中々盛なものでありまして、婦人自己の贔負の武士が、演武會で手柄を現はすことを殆ど戰に於て功名を顯はすと同じくらゐに思つて居る、

それから此武士といふものが若し恥づ可き行を致して、武士の列を引放されるといふ時には、是も平生武士を尊む割合に又非常に侮辱を加へます、不埒をした武士を公衆の面前にて高き棧敷に登らせて、先づ一々鎧其外を剝取つて叩き壞して、さうして武士の一番大切なる拍車を取つて糞溜の中へ抛り込んで、さうして馬の尻尾を切つて仕舞ふ、斯くひどい辱めを與へて之を武士の仲間から外して仕舞ふ、此くらゐ武士といふものは尊まれる代りに義務を盡さなければ卑められるものであります。

箕作博士の西洋武士道に關する研究は甚だ精細を極め、此他其起源の歷史、衰滅の原因等趣味ある所說ありと雖も玆には割愛しつ。尙圈點は一に記者の附する所なり。

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に貢献するところあらんことを期す

# 都人士の驕泰

松井柏軒

靖國神社を參拜する爲め上京したる地方の人。吾人に語て曰く『我が地方に在て、人の相會し相見るや。必らず出征者の慰問。出征者の家族遺族の扶助。國庫債劵に應ずるの計畫若くば軍資供給のために農桑を勵む事等を相語らざる無く。皆出征者の軍事に勤勉精苦するが如く。內地に在るもの亦各々生業に勤勉し。儉素以て富を作りて。軍隊をして後顧の憂無からしめんとを相誓ひ相約し造次にも之を口にせざると莫し。然るに驚ろくべきは東京の光景也。盛粧華服の士女翩々として花下に戯むれ。街衢を來往し、白木屋、三越の店は絢爛我等の目を眩し。淺草の繁華熱閙、源氏節、都踊の繁昌。我等をして魂を駭かしむ。又聞く。料理屋待合の繁昌また意外にして。元祿時代とかの服裝して。元祿踊なるものをも踊るといふ。我等不幸（或は幸にして未だ之を覽るに及ばざるも。亦實に驚かざるを得ず）と。

都人士が日夕忡々として軍事のみを思ひ。語り。計らずして。其の生業を執るよ多く平生と異らず。相遊樂するも亦平生の如くなるは。所謂大國民の態度なるものなるべし。都人士の濶達なる面目は自から地方人士と異彩なきを得ず。然れども近時の風潮は必らずしも好傾向のみにはあらじ。否。往々にして輕浮華奢に流るゝ弊あるを視る也。

彼の地方の人また憮然として吾人に告げて曰く『我等は始め某伯の勤儉論を聽きて。國民の軍國に處するの道當さに然るべきを思ひ。伯が之を躬行實踐すと聞きて轉た感激に堪えず。我が鄕の村長以下公共に盡す人々と相謀り。妻子をして儉素自から守り。三日にし

て浴するものは一週に一浴せしめ。必しも疾患なきものは。老幼婦女と雖も皆農桑を手傳はしめ。斯くして壯丁の召募。馬匹車輛の徵發の由て來る勞力の缺乏を補ひ。更らに餘力を以て肥料の不足に替へ。百方して米麥蠶糸等の產額を增加するに努め。相競ふて國庫債券の應募にも盡したりき。後に一二の新聞紙上に。某伯が京都に遊びて密かに妓と戯むれ。或は妓を携へて比叡山に登り。佛敎の靈場を汚したりとの記事を見たるも。我等は素より之を信ぜざりき。然れども今東京に來りて彼の元祿時代とかの服裝を爲す妓輩が。恭く某伯の恩顧を蒙むる三井の某。某。某々等の狎昵する所のものなりと聞くに及んで。我等は頗ぶる疑ひ惑へり。更らに。其の女婿某の奉天役に陣沒したるに拘らず。新橋の妓某を購ひしは某伯なりといふを聞くに至ては。我等實に言ふ所を知らず。請ひて問ふ。此等果して事實なるべき乎。我等は之を銀座。向島。淺草に視。白木屋。越後屋に視て。都人士の心事に驚ろくと共に。或は聞く所の遂に事實なるを思はざる能はず。是れ抑も我等の最も意想外に感ぜし所なり』と。

吾人は實に赧然たらざるを得ざりき。地方の人の曰ふ所は確かに事實なり。我が都人士が今や一種の驕泰の氣を生じて。輕浮華奢の弊に陷らんとするとは。必らずしも多くの擧證を用ゐず。單に新聞紙に視ても明白也。

視よ。藝妓の寫眞を公々然と掲載するもの丶如きは。曾て見識無き一二の小說雜誌に限り。卑陋自から。悅ぶ所謂三面記者が。僅かに妓界の消息を傳へ。若くば妓輩の情事を摘抉して。卑むべき俗に媚ぶるに過ぎずして。流石に妓輩の肖像を掲ぐるが如き。堂々たる新聞紙の得て能くせざる所なりしに。今や多くの新聞紙は爭ふて賤妓の寫眞を掲げ。或は其の艷を稱し。或は其の盛粧驕態を稱して醜として耻ぢず。元祿裝。元祿踊若くは桃山粧。桃山踊と稱して。其の歌曲を傳へ。妓の姓名年齒服裝の微より所作に至るまで。審かに描き細かに記して或は相讓らんとを怖る丶色あり。之を覽。之を讀むもの亦喜色あるが如く。如何なる家庭に之を拔くも。其の兒女團欒の間に之を覽るも。曾て怪み且つ耻づるものすら無きに似たり。

更に視よ。某々男女學生は。單に脂粉を塗りて彼の活人畫なるものを演ずるに止まらず。俳優然として演劇を爲すものすらあり。少しく才ある學生は競ふて人後に墜つるを耻づるの風あり。又文人芝居なるものも

興行せられたり。兎にも角にも新聞記者の籍に列するものが。歌舞伎座の舞臺に於て演劇し。各新聞また耻かし氣もなく辭を甘くして文字を好くして之を評せり。彼等が男子の眞骨頭無く。丈夫兒の見識無きの陋は必らずしも言ふに足らず。世を擧げて之を卑み且つ嗤ふもの無きが如きに至ては。寧ろ咄々怪事に非ずや。

然れども怪む莫きのみ。是れ皆都人士が輕浮華奢に流るゝ結果のみ。抑も今は如何の時ぞや。去年開戰以來。海陸共に連戰連勝して幸ひに多く憂慮すべきもの無きが如しと雖も。而かも未だ開戰の目的を達せしにはあらず。即ち完全なる勝利を收めたるには非ず。敵のバルチック艦隊は艨艟海を蔽ふて近く臺灣の南方。安南の沖に迫りつゝあり。其の第二第三艦隊既に合同せしに。敵は更らに第四艦隊を續發せんとしつゝあり。我が海上權の迫害せらるゝや現に尠少には非ず。陸に在ては大に奉天に勝てるも。尚ほ吉林あり。哈爾賓あり。浦鹽斯徳あり。我が大軍を遠く哈爾賓に進めんとせば。其の兵員軍需物資の輸送機關のみも巨億の資を要すべし。即ち戰局の艱難は將さに今日以後に在らんとす。國民が大なる決心を以て。精苦勤勉。軍隊の後援と爲り。必らず開戰の目的を達せずんば止まらざるの意氣を振ふは。實に今日以後にあり。過去一年有餘間の勝利に慣れて。早くも驕泰の心を生じ。或は華麗の俗を煽し。元祿桃山の古を追ふて其の淫靡の風を模するが如きは思はざるの甚だしき也。記せずや。桃山の春風は豐公をして終に征韓の事業を中途に挫折せしめ。元祿の華服は漸く三河武士の豪氣銷磨して。徳川の流を涸れしめたるとを。都人士は宜しく靖國神社に祀らるゝ神靈に對しても、大に眞面目に。大に自重し反省する所あるを要す。長期の戰爭に忍耐するもの必らずしも常度を逸するを須ひずと雖も。輕浮華奢に流るゝは如何なる場合に於ても非也。驕泰は如何なる時代に於ても亡國の徴也然り少くも失敗の因也。

# 露佛同盟と歐洲權衡の變動

法學博士　中村進午

日露戰爭が露佛同盟に影響を及ぼして該同盟を危くしたるの結果、延いて歐洲權力の平均上に一大變更を來たしたるは爭ふべからざる事實なるが如し。予は今

茲に些か此間の消息を論究して、識者の參考に供せんと欲す。

今先づ露佛同盟の大體に關する成行を述べん。露佛互に嫉視反目したる事實も全くなきにあらずと雖も兩國が親和接近したるの歷史は頗る多きを占む。而して兩國が親和接近したる最初の事實は一千七百十七年ピーター大帝が巴里に至りたる時に起れり。此時ピーターは露國の瑞典、土耳古及び波蘭に對する勢力を固め、此三國に對して事を爲さんとするの素地を作らんとして佛國に接近したるなり。次に千七百四十年エリザベートの時非常の親密を來たし、駐露佛國公使シエタルヂーは露國に金を貸し、種々の助言を與へ、且つ軍隊の革命を救ひたり。次で千七百六十二年女帝カタリナの時も非常に親密となりしも金錢上のことより少しく面白からざる結果を來たせり、即ち露國は六万ループルを借らんことを佛に申込しも佛の爲めに刎附けらる、然れども之が爲めに敵意を挾むが如きことなかりき、其後千八百年パウルの時那翁一世と共に露佛同盟して英に當り、印度を攻擊するの相談ありしが如きもパウルの弑せられたる爲め實行せられずして終れり、又千八百七年亞歷山第一世と那翁第一世との間にチルジツトの秘密條約成れり、これ佛は露の土耳古に對する勢力を助け、露は佛の英國に對する事業を助くるといふ條約にして兩國共同してコンスタンチノープル及びルーマニアを土耳古より奪はんとするにありしもこれ亦實行せられずして終りたり。然れども著しき露佛接近の條約として見るべし。後千八百二十九年ニコラス一世の時墺太利に對する露佛普の三國同盟を結べり、而してこは佛のシヤール第十世の時にして墺が露を征むるときは佛はロンバルヂーに入りて攻むるといふにあり、彼のクリミヤ戰爭は何人も知る如く土、英、佛、撒四國の露に對する衝突にして、一時露佛兩國の同盟破れたるが如きも千八百五十六年九月三十日、即ち四月條約終りて僅かに四五ヶ月にしてニコラス一世と那翁三世と佛國スツットガルトに會合し一種の秘密同盟を結びたり、尤も該同盟は軍事上のものにあらずして兩國政府若し事を外國と構ふるときは互に相通知すべし、双方何か困難の事情に遭遇するときは外交上に於て之を助くるといふにありき。

其後果して露佛同盟ありしや否やは確知するに由なしと雖も現在の露佛同盟に對しては世上種々の議論あり、ゲフケンが千八百九十三年に著せる『露佛同盟

及び三國同盟」には全く露佛同盟などいふものなしと斷ぜり、又無名を以て出版せられし獨文の書「ビスマルク及びオリエント・ポリチック」には露佛同盟ありと記せり、又其他の獨乙書には露佛同盟の存在を否定せるもの頗る多し。其中には隨分愚論も少からずして、露國は專制政體にして佛國は共和政體なるに何ぞ同盟の起るべき理あらんなど論じたるものもあり、獨乙が此同盟の存在を否定せんとするは畢竟嫉妬――燒餅を燒きたるなり。故に予は先づ露佛同盟は存在するものと見るの正當なるを信ずるものなり、而して此露佛同盟は千八百九十一年八月二十二日佛國艦隊がクローンスタットを訪ひたる以後に成立したるものなることは確かなる事實なるが如し。而して此同盟のありし後露國は佛國より五億ルーブルを借らんことを求めたるも佛國は三億ルーブルより貸さゞりき、これ頗る面白き事實にして今回の戰爭に當り、佛國が露國の公債を拒みしとて直ちに露國を見くびりしものと速斷する能はざる歷史的事實なりといふべし、而して殊に注目すべきは露佛同盟は畢竟金の同盟なることは是れなり、然れども露佛同盟の内容如何に至りては之を確知するに由なし。「亞歷山及び其周圍」には此同盟の條文と稱するものを載す、其れによつて見るに露國が他國の攻擊を受くるときは六十万の陸兵を貸し、佛國が他國の攻擊を受くれば又同數の陸兵を貸すとあり、其他種々の條文あるも就中此事が最も確實なるが如し、されど此同盟の期限向ふ何年間效力ありやに至つては終に知ること難く、又此陸兵を貸すといふ範圍も知ること能はず、歐洲内に於てか、土耳古に於てか、又は極東にも及ぶか終に知るべからず、日英同盟の締結せられたる當時露佛同盟は極東にも及ぶと宣言したるも日露戰爭の開くるや佛國は直ちに中立せり、されば露佛同盟は日英同盟と同じく一種の中立同盟なるが如し、露國が極東に於て戰爭するも佛國は中立すとの規定あるやも知るべからざるなり。されど兎に角露佛同盟の存することは事實にして而して佛國が之によりて利益を受けたる歷史は決して少からざるなり、啻に中原に於て獨乙を抑ふることを得るのみならず、マダカスカル、安南チユニス等を得しも露國の後援あり、又は少くとも惡意のあらざりし爲にして、露國は佛によつて地中海に於ける勢力を借らんとしたるによるものなり。

然るに一旦日露戰爭の開かるゝや、露國の敗北すること實に豫想の外にあり、露國自身の損失はいふを俟

たゞとするも間接に損害を蒙ることの大なる佛國に及ぶものなし、若し獨乙が佛國に對して如何なる行動をなすも露國は戰爭中何の援助をも佛國に與ふること能はざるべし、又戰爭後と雖も露國の勢力は開戰前信ぜられしよりも遙かに弱く、久しく買ひ被られたる化の皮は剝ぎ取られたるを以て、獨は三國同盟の力によらざるも獨力佛に當ることを得べしとの見當を附けたり、而して佛國も亦自ら無勢力にして孤立の地位に立つことを知り、其地位を固うせんと苦心したることは昨年四月即ち日露戰爭の初まりて間もなく起りたる一事實によりて證明せられたり、そは即ち英佛協商の成りたる事實是れなり、埃及及びニユーフアウンドランドに於ける英國の地位を保證し、佛國のモロッコに於ける地位を確實にせんとしたるは明かに此間の消息を示すものにあらずや、從來ならば露國の勢力の扣ふるあるを以てかゝる事をする必要なし、然るに露國は日本と交戰したるを以て其勝敗に拘らず暫らく歐洲に於ける勢力を空にして極東に集中せざるべからざることを悟り、佛は英國と協商を結びて獨乙に對するの政略を固めたるなり、其後間もなく又西佛協商成り西班牙のモロッコに有する力を以て佛國のモロッコに於ける勢を確實にせんとするにあるなり、然るに最近に至りて獨帝はモロッコのタンジールまで行きモロッコと獨乙との交渉に第三國の干渉を許さゞることを宣言せり、而して獨帝が此事を敢てしたるは佛國の孤立なるを知り、假令英佛協商の如きものあるも、英國は兵力を以てまでも佛を助けざることを察したるによるものなり、而して一方に於て獨帝の苦心する所は實に地中海に於ける根據地を得んと欲するにあり、英國にはヂブラルタル、マルター、サイプラス、埃及等あり、佛國には自國の南岸、チユニス、アルゼリア等を有す、獨乙はモロッコを有しても其他の根據地なし、故にモロッコより直ちに伊太利に向ひてエンマニエル二世と會見したり、是れ即ち獨帝が南部に伊太利が有する地中海の勢力を借らんとするものゝ如し、將來に於て英國は英佛協商を主張すべきか、又は反對に獨乙のモロッコに於ける勢力を認むべきか容易に判斷すべからず、若し英國の爲に計れば獨乙がヂブラルタルの對岸に勢力を得ば佛國と協商するよりも利益なるが如し、モロッコに關して英佛協商をなしたるも英は全くヂブラルタルのあるが爲めなり、若しモロッコに於ける獨の勢力増加せんか、英は獨と開戰する氣にあらざれば

獨と協商する外なかるべきなり。

以上論ずるが如く日露戰爭が歐洲の均衡上に一大變更を來さんとし、少くとも英佛、佛獨、獨以の間に種々の事件を起しつゝあるは瞭然たる事實なりといはざるべからず、從來は亞弗利加の北部沿岸、又は歐洲内部には多くの悶着を見ず、南亞、極東の方面に於て多くの爭亂を見たりしなり、然るに日本の極東に於ける勢力擴大したるの結果、佛國は無遠慮に安南に手をつけられず、獨乙は專横に膠州灣を軍港とする能はず、極東に於ける一切の施設は暫らく日露戰爭の終結を待たざるべからざるが故に歐洲に於けるかゝる變動を來たしつゝあるに外ならざるなり。而して將來日本の勢力强くなるとすれば其同盟國たる英國及び、今日まで好意を持せし米國は利益を受くることあるべきも佛獨は專横なる振舞出來ざるべきを悟りたり、而して將來益々然るべきを悟りたり、若し日本が支那の方面に於ても勢力を得れば支那に於て日本と衝突して勝利を得べき見込あるものあらざるなり、支那の陸に於て日本と拮抗するに足るもの僅かに露國一國のみなり、而して露國も最早や滿洲の方面に於ては其見込なく、伊犁又は疆新又は蒙古の方面に於て日本に當るの外なかるべし、海に於ては日本が海上の權力を得れば、先づ當分の間佛、獨は日、英と拮抗すること能はず、而して日本は將來に於て海上の權力を西の方に擴張せざるべからず其方法は種々あらんが、如何なる方法たるを問はず、兎に角西の方に擴張せざるべからず、日本海を守るにも日本海の口を遙か西部に設くべし、マラッカ海峽、マレー半島、又はサンダ海峽を以て眞の日本海の口となし、其他に於て防禦の法を講ぜざるべからざるなり。而して其防禦の方法は戰後に於て講ぜんとする一大問題なり。

略言すれば歐洲列强をして力を極東に伸すことを弱からしめ、其反動として歐洲の方面、亞弗利加の方面に於て互に權力の均衡を爭はしむ、是れ日露戰爭の功績なり、而して其功績を全うせんとせば將來に於て日本海の口を守るの計畫を立つべしといふにあり。

(文責記者にあり)

▲豫告 武士道とストア學派の比較研究……文學士藤井健治郎
右次號の誌上に揭載すべし



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず。

## 清國人の日本化

「桑港クロニクル」

牛莊に住居する清國人は日本軍が奉天を占領せりとの報に接し、衷心より歡喜せりとの話なり、彼等は大に煙火を揚げ、提灯を掲げ各種團體の旗幟を押し立てゝ之を祝賀せり、祝捷者は街衢に溢れ、日清兩國人は恰かも兄弟の如く相親み、相携へて大道を練り行けり。

奉天は清國祖宗の墳墓地にして曩に露軍が之に據りたるを目して清國人は靈域を汚されたりとなして非常に憤激せり、清國人が露軍の敗退を喜ぶは此等の理由によることも疑なしと雖も、此事たる日本人の已に清國人の上に勢力を有するに至りたることを證するものにして輕く之を看過すべからざるなり、清國人の容易に日本軍人と昵近し、公然其勇敢なる行爲を賞揚するに至りたるは取りも直さず、彼の伯林に於て唱へらるゝが如く、日露戰爭の結果として清國人は日本化せらるゝに至るべきことを證するに餘りあり。

日清戰爭に關し、日本人の爲したる所、清國人をして深く心に感ずる所あらしめたるは戰後之を徵するに足るもの決して少からざりき、若し日本にして露佛獨の干渉に迫られて遼東を還附し、旅順口を拋棄することあらざりせば、清國人は甘じて日本人の指導を仰ぐに至りたるべきこと歷々として徵すべし、現下の日露戰爭は日清戰爭の際清國人の感じたる所をして一層深からしめ、日本人の誘掖に待たんと欲する念をして益々切ならしめたり、蓋し清國を以て日本の保護國となさんとするが如きは日本人の敢て企てざるべき所ならんも今後清國人の上に及ぼす日本の勢力は實に非常の強大を加ふべし、清國人は摸範を日本にとりて、日本人と同じく改革の實を擧げんことに着手すべし、而して日本人も亦之を助けて力を致し、心を竭すべきこと毫も疑を容れざるなり。

## 浦鹽艦隊の出動

「紐育デーリー、トリビユン」

ロジエストウエンスキーの率ゆる艦隊が支那海に入り込むと仝時に久しく浦鹽斯德にありて戰備をなしつゝありしグロムボイ、ロシヤ及びボカチールの三艦に向つて出動の命ありしことは充分之を信ずるに足る理由あり、唯だ此三艦が直に南方に航行するか、將又浦鹽の近傍を遊弋するに止るかは明かに知ることを得ざるなり、それは兎に角浦鹽斯德の碇泊所を離れて彼等の出動するは確かに東鄕大將の後方に對する威嚇となり、

遂に同大將をして堅艦若干隻を割きて之を派するの止むを得ざるに立ち至らしむべしと信ぜらる。

露廷に於ける平和論者は交戰態度の露に取り甚だ好都合なる此機會を利用して、宜しく速かに日本に向て平和を提議すべしと主張せり、蓋し日本政府如何に東郷大將の勝利を確信せりとはいへ、尙其万一の失敗を危愼せざるにあらざるべく、且つ一歩を誤るときは海上主權を露國に移すが如き災害を蒙るべきことを諒知せざるにあらざるべければ、此提議に對しては喜んで應ずべしと論ぜり、而して論者は一層之を敷衍して曰く、此際決戰を避くることは兩交戰國相互の利益にして思ふに全世界が來るべき近世の最大海戰を待ち設けつゝある如く、此平和締結の新行動に向て多大の趣味を感ずることならんと、然るに一方に於て主戰論者はロジエストウエンスキーの支那海突入の成功によつて頓に其生氣を揚げ、海戰の好結果を期望しつゝあり。

## 佛國の排露熱

「デーリー、テレグラフ」



IVAN—"Why do you wear your orders and decorations on your back?"
THE COSSACK—"Because otherwise the Japs would not see what a distinguished man they have before them!"
—*Wahre Jacob* (Stuttgart).

露佛同盟が佛國に於て漸次人氣を失ひつゝある徴候尠からず、此同盟は其起源業に巳に不自然に屬せり、而して露國獨裁政治が極東に於て侵略主義を用ひ、內に於ては殘忍なる壓制主義を採りたる事實は世人をしてジヨーレー氏の如く多年露佛同盟に潜伏せる危機を看破したる人をして尙一層の注意を惹起せしむるに至りたり、夫れ佛國は初め露國と同盟したる當時歐洲に於て孤立援なきの地位にありき、然るに今や則ち然らず、英佛兩國間に存する厚誼的關係は有力に平和を保障す、然るに露國同盟は却て危殆を包藏し、佛國に對する侵略を防止せずして、寧ろ之を重大なる紛紜中に引致するに至るべきは之れを想像するに難からざるなり、佛國の愛國家は露都に於ける虐殺事件を聞き、且つ露國の先進者及び先覺者は其國を自由ならしめんとの願望を有する故を以て絏紲の困しみを受くるを見るに及び、其久しき間、事實を綜合し、論理を推究したる結果を發表するに至りたり、然るに玆に佛國の對露關係を錯綜ならしむるは其投資家が露國財政の鞏固ならんことに顧慮するの極めて甚だしきこと之れなり、即ち佛國全般に亘り、數十万の小資本家は孰れも露國債券を所有し、其若干の大銀行は露

國の信用維持に關し、最も掛念焦思するものなり、夫れ露國の信用は既に毀損せられ、今後若し全く雲を拂ふに至るときは之より生ずべき結果の悲慘なる更にいふに忍びざるものあらん、而してルーヴイエ氏の如き最もよく此間の關係を了察したるものなり、氏は最もよく財政に精通する人なり、ジョーレー氏は議院に於て聲言して曰く、露國との同盟は佛國の恥辱にして又罪惡となるに至れりと、又他の一代議士は述べて曰く代議士中彼の虐殺政府との同盟を擁護せんと思惟する者あらば余は之に對して憤怒の意を表せざるを得ずと而して此語は極端左翼黨の大喝采を博せり、かゝる形勢の直接結果如何は未だ豫言すべからずと雖も露佛國の不自然なる同盟は其末路に近きたること殆んど疑を容れざるなり。

## 露帝軍事會議を開く

「倫敦スタンダート」

近來露廷に於て重要なる軍事會議を開き、アレキシーフ提督を始めヴオロンフオースダンコフ、スコムリノフの兩將軍及びアレキシス大公等列席し、新たに四十万の軍隊を派遣することを議決したり、キエフ第四軍團、ワルソー第五軍團、聖彼得堡近衛第二師團、莫斯科拋彈師團は直ちに動員の命を受け、其人員凡そ十二万に達すべく、他部隊續々動員せらるべし。



ROASTING THE DOVE OF PEACE, WITH OLIVE BRANCH TRIMMINGS.
*Fischietto* (Turin).

露國宮廷の事情に精通せる者の說に依れば金曜日の內閣會議に於て議場に激烈なる波瀾を生じたりと傳ふ、即ち此會議に先ち皇帝はクロパトキン將軍より奉天退却の止むを得ざるに出でたること、〔並びに九日間糧食、彈藥、兵卒を搭載したる列車が一も到着せざりしことを陳述せる報告に接し、之に加ふるにヴイテブスク及クルスクの二縣下に於ける農民の擾亂に關する報道に接したり、皇帝は會議室に入らせらるゝや、各大臣の事實を隱蔽し、國內の形勢を有りの儘に奏上せざることを痛く非難し給ひければウヰツテ氏は大臣たるものは皆之が責を引て其職を辭せざるべからずといひたり、皇帝は之に向て卿等は朕の辭表を受領するを俟て致仕して可なり、といひたり、皇帝は次にブリキン氏を攻擊し、氏が國會議長と內務大臣と兼任すべからざることを述べ、トレホフ將軍に向てに忠實に朕に事ふるもの獨り卿のみといひて稍々御氣色も和ぎたり、これ現內務大臣は國會の開設を主

張し、議長を以て自ら任ずるものにして皇帝が内務大臣と國會議長との兼任を許さゞることをいひたるは蓋し之が爲めならんか。

## 林駐英公使の海戰觀

「サンフランシスコ、クロニクル」

駐英公使林男爵は來るべき海戰に關して其意見を述べて曰く、東郷大將は其全艦隊を率ゐてロジエストウエンスキー提督と會戰するの擧に出てずして旅順艦隊の攻撃に於て特長をあらはしたるが如き方法を以て其細心の戰略を斷行すべし。是れ敢て敗戰を恐るゝが爲めにあらず、只だ彼の艦隊をして其損害を最少ならしめ、敵の艦隊をして最大の損害を受けしめんとの希望を有するによる。若し露國艦隊をして殲滅せしむるが如き大海戰を開かんとせば東郷大將は其率ゆる巨艦の二三を犠牲に供するの止むを得ざる至るべきを以て、大將は成るべく敵よりも優勢の水雷艇隊を用ひ、其數百隻の水雷艇及び驅逐艦に命じて敵を懊惱せしめ、徐々其艦隊を殲滅するの擧に出づべし。然れども日本、朝鮮及び台灣の沿岸に水雷艇を活動せしむるは、其海峽狹隘なるを以て大艦の運動困難にして且つ危險なりといはざるべからず。

## デルカッセ氏に與ふ

代議士　フランシス、ド、プレッサンセ、

マダカスカル領海内に若くは其附近に於て、ロジエストウエンスキー將軍の艦隊が久しき間滯留をなし、且つ今後尚停止する所を知らざるが如き風説の依然として傳へらるゝは、我佛國に於ける平和を愛するもの余輩の深く遺憾とする所に候、佛國は斷として局外中立を尊重せざるべからず候、獨り表面上のみならず、内容に於ても中立義務を尊重するものなるを示すの緊要なるは貴下に於ても予と同感なるべしと信じ申候。佛國は苟も表面上正當なる要求を受け、又は將來増大すべき怨恨を沽び、我領海内に海戰の開かるゝを見るも、之に對し我より正當の抗議を提出するに由なき危險なる地位に陷ることなき樣戒心するを要するのみならず、誤解を招くべき所爲すらも之を愼まざるべからずと存じ候、之に就て予は貴下に世上一般の惡感を消散せしむるの機會を供せんがため、予は成るべく至急に議院に於て貴下に對し、本件に關する質問を試みんと思考致し候へば議會開會を俟て右の質問に應ぜらるべき時日御一報相成度候先づは右貴意を得申度斯の如くに候早々

## ウヰッテ氏の言明

「ハンブルグ、ナハリヒテン」

余は始めより日本と戰ふを不可とするものなりき、余は極東に於ける我國の領土擴張策の反對者なりき、余は支那問題をば加動的に處分せんとする措置を否認したるものなりき、余は一千八百九十八年旅順を得たるとき、これ大不幸の兆なりと爲せり、旅順の占得はこれ全露國の紛雜の基なりと爲せり、是故に戰を避けんが爲めに余の能ふ限りの一切を盡せり、而して如何するも余の盡力奏効せずと認むるや余は直ちに職を辭したり、余の辭職の理由に付ては當時色々に揣摩したるものありしも實は如上の事唯一の理由なり、

人余に問ふに戰爭の繼續、戰爭の終るべきやドラゴミロフ將軍の發議に基き三十萬の大兵を派するやと問ふありしが余は左の如く答へたり

今日は余は如何共云ひ難し、また何人も云ひ難き事なり、皇帝の思召は余は知らず、また我軍に關し其の實相を知り正確なる判斷を爲し得るに足るの資料乏し、從つて問題の解決に苦しむなり。然れども余は余丈けの勢力を有す、此勢力は余の位職に依るにあらずして、余の個人として得るの勢力なり此勢力に依り、余が始めより重き不幸と認めたる此戰爭を止めしむべき爲めには一切の努力を辭せず、國內の紛擾は未だ以て甚しき危險と云ふにあらざれどもこれより今日の紛擾にして繼續する處あらんか大危險は生じ容易ならざる災害至らん、國制改革に付ては余の思ふ處に依れば、是れ決して學理的にのみ意味するものにあらずして必ず實際的に結果を生む事あるべし、但此の結果の生まるゝは五年十年の後ちたるべし、今日此改革を實行せんとするは恰も重病者に先づ小量の鹽酸曹達を與ふると同一の効あるのみ、開戰當時には余は皇帝をして如何にしても余の說に傾かしむる能はざりしなり、今日も皇帝と會する事頗ぶる稀なり、そは余が皇帝に謁せんとする每に皇帝は余と會するを好ませられずと聞くが故なり、余は今日は何時なりとも現職を辭せんと望みつゝあり、されど困りたる事には皇帝余の辭職を許し給はざるなり、皇帝は余が何等の職にもあらざるを喜び給はざるなり、實に皇帝は余が辭職の意を知るなり、爲めになほ更ら辭職願に反對せられ一言の下に拒まるゝなり、余は何時たりとも辭職するなり




WHY HE STILL HOLDS ON.
The Bear—"Yes, now is the psychological moment for letting go—*but I can't*"
—Barclay in the Baltimore *News*.

## 長生法

「グランド、マガジン誌」

▲ジウヰドル卿曰く、長生の法は、喫煙を禁じ戶外運動を盛んにし、節酒することに在りと。

▲クリムソルプ卿曰はく、長生の法は、喫煙を禁じ、飲食を節することに在りと。

▲ネルソン卿曰はく、長生の法は、喫煙を禁じ、早く起き、節酒し、平生藥を飲まざることに在りと。

▲ハッジンス氏曰はく、長生の法は、喫煙を禁じ、少量の肉とミルクとを用ゆることに在りと。

▲ドリンクウォーター氏曰はく、長生の法は、喫煙を禁じ、戶外運動を行ひ、七時間睡眠することに在りと。

▲メーヨル教授曰はく、長生の法は、喫煙を禁じ、菜食を厲行し、每朝四時に起き、眼鏡を用ゐざることに在りと。

▲ドクトル●ジョルジ●エス●キース氏曰はく、長生の法は、時々煙草を吹かし、時々酒を飲み、少量の獣肉若くは魚肉と多量のミルクとを用ゆるとに在りと。

▲フリッツ氏曰はく、長生の法は、一日二飯となし、三本のシガーと、少量のウヰスキーとを用ゐ、規則正しく運動することに在りと。

▲ダヴヰス氏曰はく、長生の法は、喫煙を禁じ、一日三飯となし、規則正しき運動をなすことに在りと。

▲ハーデン氏曰はく、長生の法は、毎日七時間づゝ睡眠し、少量の獣肉と少量の酒とを用ゆることに在りと。此長生法は、現に自から之を行ひつゝある人々が語りたる所のもの也。

## 人工になれる人

人工になれる人とは、父母の間に出來たる尋常普通の人にあらずして實に人の頭より生れたる人なり！木材と護謨と金屬とより成れる人なり、而も言語し、歩行し、疾走し、飛躍し、或は眼を瞬く等、一擧一動殆んど眞の人と異る所なし、唯々眞の人に有りて此の人に無きは精神のみなり、此の驚くべき機械人を發明したるは合衆國トナワンダ市の住人ルイス●フィリップ●ペリュー氏にして、氏は今や資本家の贊助を得て既に自働人形會社なるものを組織し、其の本部をバッファロー市に置きて盛んに之が製造に從事せんとす、此の機械の骨格は、鋼鐵にして其の皮膚にはアルミニュームを用ひたり、胸裏には言語機械の裝置ありて一たび教へたる事は如何に複雜にても之を語らずといふことなし、其の音聲は恰も蓄音機の其れに似たり、腹内には一種の電氣機械ありて其の作用に依り一時間二十哩の速力を以て歩行す、又た頭の内部には時計仕掛の巧妙なる機械ありて絶えず眼を動かせり、若し其の前途に或る障碍物を置くときは彼れはジロリと之を一瞥し徐ろに足を擧げて之を踰ゆるなど其の精妙實に驚嘆するに餘りあり、此の機械人の用は血と肉とある尋常人の到底堪ふる能はざるすべての勞役に從はしむるに在り、發明者は行々之れを戰爭にも使用せしむるの意氣込なりといふ、果して之を實行するを得ば將來の戰場に於ては、復た流血の慘を見ざるに至るべく、其の戰爭は全く交戰者の技工の競爭となりて技工に劣り金力に竭きたる者が結局の敗俘を蒙ることゝなるべし（商業界）

今回は郵船の都合により、締切の日までに新刊新聞雜誌の着するもの極めて少かりしと、擔當社員の病氣とによてり海外新潮の材料はいつもの半ばにも充たざるは深く讀者に謝する所なり、

來月よりは盛んに卓說明論を紹介すべし

（記者）

## 雜錄

# 元祿風俗の復興と色彩の發達

久保田米僊

△摸樣色彩の歴史△時代精神と色彩△流行色の説明△今後流行すべき色彩△海老茶袴の色彩上の説明と其改良

○此頃東京の新橋邊に、元祿風俗、即ち伊達衣裳の藝者が現はれ元祿踊をするやうになつた、尤もこれは或る人の考案で、初手は廣告的であつたのであるが、之が恐ろしく時好に投じたと見え、葭町が之を模し、次て柳橋でも之に倣ふといふ事で、兎に角元祿風のものが流行し出した、而も之が東京に限らず、地方にも推し擴まつて、横濱の如きは元祿風では面白くないと云ふので天正風俗桃山踊をするやうになり、京大阪にも此元祿風俗の流行が推及んで、大阪北新地でも昨今元祿踊を仕やうといつて、或る人が已に其作歌をしたと云ふ事である

○今でこそ此風俗は單に花柳社會少し廣くて或一部の婦人の間に流行するに止まつて居るが、決して此まゝに終るものでない、引いて全國の婦人の嗜好に投じ、やがて又男子の方にも及んで來るに相違ない、即ち日本人の嗜好がそれに向いて來て居るので、云はゞ天下の趨勢である

○元祿の伊達風俗は花やかである、此花やかなものが何故今日流行して來たか、尙何故今後ます〳〵流行の兆があるかと云ふ事を論ずる前に、歴史的に元龜天正以後の流行ものに就いて研究して見やう

○應仁以後、天下麻の如く亂れ弱肉强食の生存競爭に依り所謂戰國時代を形造り、諸英雄突起して天下に其勢を競つた頃、當時如何やうな者が諸人、特に武士に最も喜ばれたかと云ふに其殺伐の精神を慰せんが爲に應仁以前には、舞樂があつて、其舞樂から田樂が出て、田樂から延年舞を出し、又其延年舞から工夫して一種の諸物で且舞である處の幸若の舞といふ者が出來た、

幸若の舞は叡山の若衆桃井幸若丸といふ美童が初めて皷に合はして謠ひ且つ舞つたので始まつた、そして此幸若舞より、一轉して能樂が起つたと云のは是等非常に殺伐に向ひたる人心を戒めんが爲に宗敎家が筆を取り因果の道理を說き修羅場ばかり、或は戰勝の祝言より稗史小說等に到るまで內外二百番の謠物となつた

○これで見ると、當時一方非常に武張つた時代でありながら、一方に於ては又非常に優しいものを好んだといふ事が知れる、而して

○其衣裳の模樣等は如何なるものであつたかと云ふに、能樂(幸若舞は空想の謠物である)の衣裳などは甚だしく華麗であつた、それは此觀者たる武士の精神といへば誠に單純なるて者あつたから、見るものといへば淡彩的のものでは一向喜ばれぬ、否其武士自らも華麗華美ならざれば己れの威嚴なきやうに思爲し、鎧の緘毛色、直垂の模樣等まて、極めて華美ならん事を力めた、かゝる有樣であつたから、其舞の衣裝も一通りては喝采されぬので此武士以上に出て、其歡心に投じたのである。で幸若の謠物の烏帽子折に、義經が奧州下りの砌、靑墓の關で熊阪長範の夜襲を防ぐときの衣裳として下の如く書いてある、(序に曰ふが、幸若にしろ、能樂にしろ、それに書いてある衣裳は歷史に依つて其歷史上の人物が在つた當時のもの計りでなくて、此謠物を作つた當時の風俗が重に書いてある、故に謠物に現はれて居る處の衣裳を見れば從つて此時代の風俗を知る事が出來る)

このわつぱ(義經の事)が衣裳の躰をあら〳〵語つて聞かせ申さん、先づそつと見たる所は、色白く尋常なるが、肌には鈍金をひつ違へて着て候、着たる直垂は、唐絹をもつて、地をば山鳩色に空色一はけはいて、十八五色の糸をもつて、物の上手が縫物を縫ひて候、先づ弓手の紐付に、齋垣鳥居社壇を縫ひ、馬手の紐付には、たけくらべに杉を三本縫うて、源氏の氏神白鳩が、十二の飼子を飼ひつれ、羽節と羽節をくひ違ひ、さつと立つてはさつと下り舞ひ遊んだるいはひの樣をあり〳〵と縫うて候、後の菊綴には、北山殿のさんざう、住吉のすゐびん、御室の御所のけいきをあり〳〵と縫うて候、扨て又袴を下りに、しぐせいぐわんを學んて、唐土の猿も千疋、日本の猿も千疋、唐土の猿は大國なればせいを大きう、面を白く縫うて候、日本の猿は小國なれば、せいを小さく面を赤く縫うて候、日本と唐と潮境のちくら沖といふ所にて、唐土の猿は日本へ越さんとする、日本の猿は唐土へ越さんとする、越さう越さじの　がまのさうの所をば、あうあり〳〵と縫うてさう、扨て又袴の蹴廻に、岩に松鶴に鶺鴒にかゝる川柳、沖の浪がどうと打つてさつと引いて行く、潮境を縫うてさう、着たる腹卷は、これは萠黃緘なり、世の常の腹卷は草摺を八枚下ぐるが、この草摺は十二枚、十二枚の草摺に、白金黃金をもつて、藥師の十二神をいが〳〵とあらはす、さいたる刀は皆

黄金造なりとつつけ鍔口に、倶梨迦羅不動明王あう瀧壺へ飛んで下り、鍔をのうだろ所を、ありくと彫つてさう、表の目貫は、不動の體、裏の目貫は鞍馬の大悲多聞の、御神體をあらはす、下緒には法華經の七の卷、藥王品を、三ながれ組んで候、持つたる太刀は二尺六寸か、七寸かと覺えたり、切羽股よせ、うんどうかぶとがれ、眞の目貫そら目貫、せめしばひき石突かはさきに至るまで、上品の黄金にてひらめき立つて見えてさう、着たる烏帽子は、六波羅樣の當世むきの、つぶのちつと荒らかなるを、一くせみくせませ、雛形にあひをあらせ、鋤形をいがくと、一ためためて、左へ折つた烏帽子なり　髮の髮は縮んだり、眉の毛は刈つたり、昨日今日の山出、

○實に花やかで而も豪壯なものではないか、而してこれを以て現實に裝束したりとすれば誤りである即ち、これを謠ふて舞ふたまでであるが、當時此如き潮流は確かにあつたといふ事が追想されるのである、又能樂の方では、これを以て倚慊すとなし其謠ひ物には絹紋紗の直垂の露を絞て肩に掛けとある如き單純なるものでありながら、裝束には色彩優麗錦繡燦然たるものを着用した、秀吉の如き人が政略上自分も舞ひ、大に猿樂を奬勵した有樣であるし、特に當時の美術家が腕揃ひと來て居るから、之を風流に面白く、而も非常に花美に衣裳の模樣等を拵へた

○玆に注意して置かねばならぬ事は、能樂の衣裳の模樣は、多く幸若から移つて來たものであるが、これに一種天正時代の濶達な風が寫されて、又秀吉が明を呑まんとするやうな豪壯たる氣風がありくと現はされて居る事である

○此濶達豪氣な風の現はれた模樣は、徳川氏の式樂まで及んだ、尤も元和の大阪夏陣で、戰は一先落着をつげたとはいへ、士風は依然として盛んであつた、人集まれば必ず武勇談をする、前代の濶達な氣風は未だ去らないで、男女ともに其衣裳は、品質の善惡は暫らく置き、模樣などに至つては前代の勇壯濶達なものを喜んだ、喜んだといふよりそれが自然の趨勢であつた、例へば

○伊達政宗といへば其頃獨眼龍といつて恐ろしい遠大な計をたてローマをも呑んでやらうといふ程の勢を有つた人てあつたが、此人が寛永二年正月二日將軍家光公を饗應したる光景は實に壯大、華奢を極めたものである、今此に慶長以降徳川氏の雜事を記したる玉露叢筆記といふ寫本に依ると、此日將軍は御數寄屋にて朝飯を喫せられ、政宗の手前て御茶を飯り、御慰みとして大小名の能樂を催された、柳生但馬守、櫻井八左衞門、毛利甲斐守、加藤式部少輔、永井日向守等の面

々各々其得技を發揮して舞ふたが、將軍は倘政宗へも一役所望あつた、政宗は仰せを畏み實盛の太鼓を打つたが、其日の裝束は、疋田鹿子の小袖に金糸入の五色の糸で雪に薄の五ッ紋を七寸位の大さに縫はせ、裏地は淺黄である、下襲には金紋淺黄地緞子に紅梅裏肩衣は緞子へ唐團扇と葛唐草を金の摺箔にし、又袴も疋田地へ種々なる菱を金糸にて織付たるものである。

○そして將軍家の裝束は薄柿色小紋に紫色にて葵の御紋を置いたる小袖に紅裏を附け、白無垢の下着に緞子の袴であつた、倘政宗は小姓十八人に踊五番を演しさせたが、其又衣裝が華麗である、第一番が種々なる伊達染の小袖に紅梅の裏附に、玉繻子の帶を締め金の扇を持つた、第二番が舟躍りといひ、衣裝は黑地の綸子に金銀を以て蔦紋樣を置、白綸子の帶を締め、腰に金銀の鈴を下げさせたが、第三番は白綸子に金の摺箔を以て枝垂柳と、桐の葉紋樣を置、帶は黑綸子で白練の絹の鉢卷を締め、第四番は黃地に銀で鳴子の大模樣の小袖に白羽二重へ金を以て菊水を置いたる下襲、裏は紅梅色であつた、第五番は黑繻子に金の模樣の紅梅裏を附たのである。其綺びやかなる居並ぶ大名の綺羅を飾りたると相映發して、色彩陸離目も幻ぜんばかりであつた。

○如此華奢なる衣裝は今から見るといふと夢としか思へない程であるが、これも又當時の好みであつた。即ち民間に行はれたる染紋樣は格子、切石、石疊、大海松、渦卷、丸藷し、輪違ひ、或は花鳥虫等の色染縫箔、帶は金襴を以て最も美となし、黑地に梅櫻松等の類を織附、廣さは却て二寸程、足袋は紫皮であつた、又衣服の地色は赤地白地などが行はれたやうである、藥師通夜物語といふに「稚き時より是をして綸子や紗綾に羽二重を憲法染に數をして裏に紅梅もみ附花かいらぎの鮫鞘に金鍔大小打違ひ云々」以て其一般を推するに足るであらう。伊達風俗といふて天明頃まで行はれた衣裝は、全く當代より胚胎したのである。

○此大模樣は其始め旗指物や狩衣等のものに信仰上から神佛の名號だとか、神佛に關する種々の物を書いたり、後に家の紋章、武器の類を書いた處から來たものである（これにつき倘有益なる談話あれど、それは別に記することあるべし前に拔粹した幸若の烏帽子折を參照すべし）

○さてかゝる伊達風俗に、元祿は德川氏の最も太平な時代であつたから、色彩、模樣、文學の調和が旨く

出來た、文學趣味と繪畫の調和が得て、それに色彩の調和配合が立派に出來て來たから、其美觀は譬ふるにものがない、これ後世までも賞翫される所以である

○いて其頃の上野の花見といふは、何事ぞ花見る人の長刀とて、墨田川の喧騷であつた反對に、樂器は用ゐず喧嘩はなし、只靜かに雅やかに、手拍子揃へて花やかに踊る位であつたが、其衣服の美を盡したるは今日より到底想像にも及ばぬ、ひつた、金糸銀糸の縫ひ模樣の小袖が、辨當をからげて來た紐を花の枝に繋いだのに脱いでかけ、以つて衣裳の美を競爭する、(所謂小袖幕)花の影には毛氈を敷いて酒宴、多くは女なり、正に之れ極樂の境である、

○今も同じ雨勝の花見どき、春雨のしと〳〵と降る中を、ぬるゝを厭はず下山する、其大氣さ大樣さ、かゝる太平無事な時でも前代からの武士氣質の精神は承け繼いで居る、其色彩の上にも此精神が現はれて居る事は申す迄もない

○然るに元祿の風俗は天明に至つて一轉して、柔弱に墮落した、元祿風の大氣な處を去つて淫風を含んだ色彩を生じた、否淫風の極に及んだ、併し天明頃とても只武を忘れて了つただけで、流石は元祿の餘風を受けて居るだけあつて可なり見らるゝものであつたが、

○之が文政に金銀法度、絹布法度の嚴令が布かれてから、絹物も木綿に見えるやうに、唐棧とか其他縞物が流行した、裏も額裏になり、色彩なるものが全然廢れて了つた、前日の華美な風俗は忽ち地を拂つた、これは日本人の精神に非常な壓迫を加へたもので德川氏の世の末であつた自然の勢であらう、維新の頃になると、其頃廟堂に立つた人々が凡て沒趣味であつたから、いよ〳〵元祿風のものは影を止めない事になつて、色彩等は毛頭觀念に浮ばず頭骸骨の如きや單に本國盡忠など染め出したのやら或は彼の南宗の文人畫が文盲の人によつて畫かれる、文人畫を畫く人は皆文盲であつた如く、日本の社會が墨繪になつて了つた、帶でも七子に墨繪の蘭竹を畫き、長襦袢にも四君子七香花を畫くやうに、凡ての彩色が墨繪になつて了つた

○以上天正以後から明治の初年までの衣裳模樣等の變遷を述べたが、畢竟ずるに時代の精神と色彩模樣等の關係は不離のものである、戰國時代には武張つた模樣に花やかな色彩、例へば幸若能樂の如き衣裳が流行し、降つて元祿前後の演劇となると又一段柔くなつて、源平盛衰記の新中納言が、元祿風のなまじめ所謂本田

鬣の鐙を付け、熊谷、畠山、佐々木等の古猛者の名を借り天鵞絨や緞子の袴を着するといつた風に、歴史を離れて、當時の柔い太平の色彩を寫實し、武張つたもの丶上に粧ふ様になり、之が天明に於て柔弱に墮落し、次て文政以降沒色彩稍墨繪的になつた、即ち時代々々の精神に從つて色彩も變化して行つた事は爭はれぬ事實である

○今一度この事を繰り返して話すと、其以前は模様色彩が信仰から風流になり、天正頃からは武張つたものから風流になり、元祿には之に詩歌俳諧の理想を取つて、即ち文學との調和を成した、そこで

○今日以後の流行に就いて考へて見ると、相變らず此轍を踏んで行くといふ事が推知し得らるゝ、近來不景氣の聲の盛んであつた時、銀鼠、藍鼠白茶鼠等のくすんだ沈んだ色が流行した、それが戰爭の氣運で景氣が引立つと、昨今彼のオリーヴ色が用ゐられるやうになつたが此色は黄の勝つた青と黄との調和した、所謂萌黄色である、物の萌え出づる色で、盛んな色である、即ち戰勝の影響で抑へ難き人心の萌え出づる有様が色彩の上に現はれて萬歳の聲と相應じたのである、

オリイブ色
青　三
黄　七　}の二原色想合。（黄は喜びの色青も亦愛の色万歳の聲に和するの所以）

然らば今後大萬歳の聲に伴ふ色はといふに、黄に赤を加へた色彩である、赤は非常に盛んな色で、天正の頃は全く赤い衣裳を着たもので、之が岩佐又兵衛が畫に寫されて居る、

○此て少しく色彩の説明をしやう。

色彩の原色は赤、黄、青の三色であつて、其又元とするものは太陽である、太陽が廣大なる光線、色彩、溫熱に依て萬物を生育する、すると其原色なる三色が相合し重層し紅、紫、白、綠、藍、黑等の色が現れて來る之れを第二間色といふ。此第二間色が又重なり又和して様々なる色を成立たしめて殆んど數ふるに其煩を覺える程であるが、泰西の色學者は此色彩の原色を目して七色といふ、之れは彼等が太陽より發したる色彩の相重りたる虹等を以て標準とするからであつて、試みに今私が述た三色は何種のものでもよいが燈光を見る時に於ては必ずや下青にして中央、黄を帶し、上邊に於て赤なる事を見るであらう。即ち太陽の光線を人造で此に借り來つたものである、左に精細に燈光を分解すれば。

黑　紫　紅　赤黄白　黄青藍紺黑

まづ此の如くであるが、其上下兩極に黑の存在するのは尙地球に北極南極ありて共に寒冷なる如くである、そうして此部分中に暗線なるものがあるのであるが到底肉眼では見止むる事が出來ぬ。ザツと色彩の原理は如此であるが、其精しい事は他日又本紙を借りて述る事とする。因に云ふ太陽は干支では丙となし燈火は丁に位するとの

事である。

○明治の今日の有様は、天正以後の彼の濶達な氣風がある、といふのは、時勢が丁度似て居る、今日歐洲列强と肩を並べて、そして隣國と戰つて居るが如きは、天正頃の群雄各々割据して覇を爭つたと同じてある、而して又一方に元祿のやうな、文藝の發達があつて、優しい花やかな思想を含んて居る

○されば天正元祿の風俗、模様色彩が復活して來たのは偶然てないので、社會の氣運が之に向ふやうになつたは即ち社會の狀態が恁うなつたのである、彼の繪端書の極美な色彩のものが時好に投じて來たのも、誰れが奬勵したといふ譯てなく、自然の趨勢が恁ういふものを要求して來たので、私は之を以つて日本が世界の一等國に列すべき氣運であると思ふ、元祿風俗の復活するのを見て教育者等の中には眉を蹙めるものもあるとの事てあるが、それは元祿當時の士風稍墮落を芽したるを想起し以て萬事を律するのであらうが、そは三味線を見て猥雜の樂器といふと同論である、即ち樂器その物は決して左様なる猥雜のものてないのてあるが、夫れを使用するものは重に弦妓の輩なると、又其歌の鄙猥なるを連想して之れを見るさへ嫌ふといふやうな感じを或物に與へたので必ず其器が猥雜なるものてない、此元祿の風俗も而うてある、題名こそ古く借りたれ、決して元祿當時一般墮落の風潮までは借りて來たのてはなく度々述る如く自然の趨勢であつて、是等が根元となり一派新しき意匠を生み出す事は疑ふ可らざる次第である、故に其の如き心配は一掃してそれよりは以前より行はれて居る女學生の穿つて居る所謂海老茶袴に眼を點じて其改良に心を注がれたい。此事は二三私も新聞に論じたが、尙其必要を感じたから再び此に云ふ事とした。

○まづ海老茶なる色彩は如何なる色より成立して居るかといふに、

青三、五。赤三、五。黃三。

の非常なる高度の色素より成つて居る、即ち赤は陽の極、靑又正色の一なるも、此赤に接する時は陰色と變じ、黃其中間にあつて其平和を保つて居る、此の如くてあるから、既婚者には最適當の色とするも、未婚者にはこれに反して最も有害なる色素といはねばならぬ、といふのは此色彩は今も述る通り最高度の色彩相依つて成つたものであるから、此色を日々見馴れて居る時には知らず〳〵の間にこれに感化され頻りに配を

求むる念を起し遂には習得する學問も十分腦裏に入る事難く或物は之れが爲に墮落の淵に陷入るであらう、而るに近年又黄色を脱き去つたる紫色が漸く行はれんとする兆もあるが、一層注意を要するのである、而らば如何なる色素が適するかといふに、無色、即ち白色がよいのである、

○是等を鑑みたのであらうか、眞言の僧徒の衣は正色を用ゐずして、青泥（藍白黑の合同）或は栗皮茶（赫黑黄）等の雜色を用ゆるが、これは精神を他念なからしめん爲である世の教育家たるものよろしく此に注意す可きてある、

○要するに、色彩模樣等は時代の大勢と大に關聯して、始終するといふ事、而して天正元祿の風俗の復活は最も今日の時勢に適した自然の要求てあるといふ事、彼の文政以後明治初年頃の如き色彩模樣の衰微は、そは當代の悲觀的人心の反映で、決して喜ぶべきてないと共に、今日以後色彩模樣の盛んならんとするのは最も喜ぶべき氣運てあるといふ事を述べたのである

## 參考

（尙參考として左に元和以後の畫家及び其畫風等を揭ぐ）

**元和、慶長年中**

△當代の畫派に雲谷、狩野、長谷川、曾我の四派最も盛名あり、土佐は此時稍名を陷す。

△狩野派は、永徳、光信、孝信、山樂、

△雲谷派は、等顔、等益、

△長谷川派は等伯、（長谷川は雲谷風と稱す、筆力勁健、當時及ぶものなし）

△曾我派は、直庵、二直庵。

△土佐派は、光則、土佐派を汲んで本阿彌光悅、

△當時の筆致、規模頗る宏壯、趣致、奇抜、瑰麗。意匠嶄新。色彩濃厚、豔麗。稍々通俗的に向ひし事。

**德川氏幕政時代**

△當代の畫派、排山の餘韻を繼いで筆致豪健、彩色の華麗なる曾我雲谷、長谷川の諸派いづれも各々技を爭ふ。

△當時支那は明亡びて清興り明人戴笠、陰元、木葉即非。歸化し來り多く其古書畫を齎し來る

△又土佐、住吉、土佐より一派を與せし光琳派に各々名手現れ來る

△土佐は光起より光文に致るまで數代。

△住吉は、廣通、廣澄、弘貫

△光琳派、尾形光琳、本阿彌光悅より胚胎せし派なり、弟乾山、酒井抱一。

△狩野は探幽齋守信

**儒者、學者其他の人物**

△德川氏初世藤原惺窩。林羅山を擧け用ゆ。

△德川四代將軍家綱の時、林春齊、僧契冲等の學才。五代將軍綱吉の時、北村季吟、吉川惟定の國學者、木下順庵、伊藤仁齋の儒。小說文學者

には井原西鶴、近松門左衞門。俳諧には芭蕉、其十哲、八代將軍吉宗、前代の浮華柔弱の風を新ためんと欲し居宅の華麗を毀ち衣服饗宴贈遺の質素、曳いては玩具類にも一定の制を設くに致る、漢學甚だ隆盛を來たして朱子學、復古學古學、古文辭派等の各派ありて新井白石、荻生徂來、伊藤東涯の碩儒出ず。十一代家齊の時賢臣松平定信出て華奢に流れし風俗を再び挽回せんとして得ず漸く勤王の聲發芽し來る家慶に至り老中水野忠邦三たび贅澤品を禁じて又得ず勤王の聲益すく高くして幾何もなく浦賀に米艦の來航するありて長夜の夢一時に覺む

△元祿前後より、住吉、土佐、光琳等現はれ畫法も漸時温和になり來り、享保年間は無事太平なれば畫法幽和從て壯健の筆を見ざるに至る天明前後に至り支那風の畫法、所謂文人風大に行はれ、祇南海、池無名、謝蕪村の南畫、能代紂汪、宋紫石の沈南蘋風の清を以て立つもの、又清より一種の寫生風を出して丸山應擧の輩出せる文化より以後明治に至る間、漸く時勢の轉輪せんとして次第に男健の筆法を出して松村呉春の四條派、岸岩駒の守元、南蘋の象的、谷文晁の南北折衷、原在中の明、和の調和、田能村竹田、渡邊華山、椿々山の明清畫、由中納言浮田一惠、岡田爲恭の倭繪派、葛飾北齋の浮世繪並び興つて幕府末世の花を咲かせたり。

以上は米仙氏が綺麗なる、校閲を經たるもの也、甚他色彩に就いての氏の說は非常に有益多趣なるものなれば一層精密なる談話を聞きて本誌に掲載すべし

# 御製の英譯

文學博士　末松謙澄

末松、金子兩男の歐洲に派遣せられたる目的の一は、列國に向て我國現下の地位、主張を明かにし、以て彼等の誤解を防ぎ、且つ其同情を促さんとするにあるものゝ如し。末松男が四月の「ナインチーン、センチュリー」誌上『帝(ミカド)の心(ハート)』と題して、御製十六首(中十五首は皆時局に關するもの)の英譯を掲げ、以て我　睿聖文武なる天皇陛下の仁惠に富み、平和を愛し給ふことを世界に知らしめたるは、彼の使命を行ふに於て最も其効績の著しきものといはざるべからず。予は今玆に此文を譯して、我讀者と共に　陛下の御仁德を仰ぎ、且つ男爵の此擧を讃せんと欲する也。

(譯者しるす)

日本歷史上千古未曾有の緊要なる秋に當りて、其統治者たる　皇帝の御宸襟を推察し奉ることは、何人と雖も敢てする能はざる所なり。然れども幸なるかな、日本の　皇帝陛下は詩人にてましませり。世上何物かよく溢れ出づる詩歌の如く人心の奥秘を傳ふるものありや、日本に於ては御製の公にせらるゝこと極めて稀なるは事實なり、然れども戰局の開けたる以來、御製の或物は時々本國の印刷に附せられ、讀者をして朧ろげながらも稍々御衷心に充ち溢るゝ御感懐を推察し奉る

ことを得せしめたり。

日本の詩形は概ね太だ短少なりと雖も、其意味に至つては往々深遠なることあり、通常日本の繪畫が一枝の竹を描き、一輪の花を寫して、尚よく天然の秘密を洩らすが如く、日本の詩歌も亦數行の文字を以て直ちに人心の奥底を探り、之に伴ふ幾多の思想を捉へ來りて讀者の想像に浮ばしむ。予は左に　皇帝の御詠草十六首に向て甚だ不完全なる英譯を試みたり、然れども日本詩歌の特長たる字句の洗錬、感情の悠遠を失はずして英譯することは最大の困難なるを以て、予は只單に原作の意味の概畧を示すに止めたり。散文よりは稍々可なるあらんも勿論韻律に合はず、諧調に愜はざるものあらん。若し予をして英詩に熟達せる人の助けを籍らしめば、或は稍々耳に快きものを得べかりしならんも、そは却て人工的に流れて、原詩の簡潔なる美質を抹殺する嫌なしとせず、かるが故に予はその譯の不完全なるを知りつゝも、尚自己の計畫に從ふことを敢てし、成るべく御製の意味を重んじ、其素朴飾らず、原詩に忠實なるの點に於て世の寛恕を得んことを求めたり。

此御製の如き短詩形は通常三十一字なるを規則とし、漫りに之を増減することを許さゞるものといひて可なるが如し。かるが故に詩人は其作の長短に關して之を破るの自由を有せざるなり、且つ其綴りの數も一定し、初行五字、次は七字、第三行五字、第四行第五行各七字、合せて三十一文字なるの規則なり、これ故に此詩形を稱して三十一文字の歌とはいふなり。(原詩に於ける最後のんはむの變形にして獨立せる一綴をなし、從て明瞭なる發音を有すべきものなり、)

(一)

四方の海皆はらからと思ふ世に
など波風の立ち騒ぐらん。

Whereas I deem this as an age,
Wherein the 'four seas' in brotherhood are bound
How is it that the fierce winds rage,
And dash and spread the waves around?

「四方の海」といふは全世界を意味する文學的用語なり、支那にていふ「四海同胞」の四海是れなり、四海皆同胞の教義あるに拘らず、世界の平和が放恣なる君主の俄然たる擾亂に逢ひ、其飽くなき虚榮貪婪によりて國民間の和諧の破れたることを歎じ給へたり。

(二)

子等はみな戰の場に出て果てゝ
おきなや獨り山田守るらん。

I suppose all sons to the front are gone,
To do their duty all under arms,
And their old sire at home alone
Guards and watches their lonely farms.

吾人は　皇帝の同情の農夫、百姓にまでも及べるを見るなり、若き子等は國の爲めに遠く戰場に赴き、年老えたる双親は淋しげに其のさゝやかなる山田を守れり、此御製は實に國と君との爲めにあらゆるものを拋ちて其義務を盡さんとするものに向て無限の愛憐を垂れ給へるを知るに足るべし。

（三）

夢覺めて先づこそ思へ、いくさびと
向ひし方のたよりいかにと。

Each time from sleep I awake,
One thought comes up at once to me,
How matters go there, where is gone
So many a warrior for my sake.

こは其奉戴する君のために戰はんとて進みゆく軍隊に對する　皇帝の御懸念を完全にあらはせり。

（四）

千早振る神の心にかなふらん
我くに民の盡す誠は。

The Power above, so stern and just,
Gladly approves, as I dare think,
The sweet sincereness of my people,
So earnest their devoir to do.

皇帝は人民の忠誠にして愛國の念に富めることを嘉賞せらる。

（五）

國のため仇なす敵を挫くとも
いつくすむべきことな忘れそ。

Hard as thou strikest, for thy land,
The ruthless foe that bars our path,
Forget not, at the hour of need,
The mercy's way the heart dictates.

皇帝は戰場に於ても人道を忘れ給はず。

（六）

いくさびといかなる野邊に明すらん
蛟の聲しげくなれる此夜を。

The night it is far spent,

The insects keep a growing hum,
In what unsheltered places now
My soldiers do they spent their night?

蒸暑き夏の夜に於て　皇帝はいくさのにはに野營する疲れたる軍人を忍び給ふ。

（七）

まつりごと出てゝ聽く間はかくばかり
暑き日なりと思はざりしを。

This day when deep in things of state,
The things that I am bound to do,
Little did it occur to me
How very hot the day had grown.

こは夏の日の政務を執り給へる後の御製なり、これによりて我等は　皇帝の政務を執り給ふ時の御熱心なる、よく夏の日の暑さをも忘れ給ふことを知るを得べし、此御製は或は東洋的ならんも通常詩材とならざる如く見ゆる事實の中にかくもやさしき詩情を含ませられたるを見る。

（八）

つはものゝ心と共に乘る駒も
疲るゝ知らでいや進むらん。

In strictest bond, we may be sure,
With his undaunted rider's mind,
The soldier's steed still charges on
And knows not or fatigue or fear.

馬と騎士との間に於ける同情を認め給へる優美なる御製。

（九）

國のため斃れし人を惜むにも
思ふは親の心なりけり。

Even as I silently lament
For those who for their country fall,
I stop, and can but ask myself,
What do their fathers and mothers feel?

こも亦人民に對する有り難き御懸念。

（十）

端居して月見る程も戰ひの
場の有樣思ひやりつゝ。

Even while seated in my balcony,
I gaze at Luna shining bright,
My thoughts carry me far away
To the scene where battles rage.

いとも靜かなる中に端居し給ひ、月の光を仰ぎ給ふ時さへも　皇帝は國の爲に戰ふ軍人の身の上を忘れ給はず、遙かに戰場の有樣を思ひやり給ふ、あゝ此時よ、此月の光に照されて侵し難き敵の堡壘に進みゆくもあるべく、野に斃れて屍の上に此月の光を受くるもあるべし、或は看護手に運ばれつゝ此月を見る傷病兵もあるべく、或は占領したる高臺に登りて無邪氣に愉快に此月光を仰ぐもあるべし。あらゆる此等の光景は皇帝の御想像に浮びたるべく、又讀者も之を想像することを得べし。

（十一）

國を思ふ道に二つはなかりけり
いくさのにはに立つもたゝぬも。

Some may stand on the battlefield,
And some—God wot—may stay at home,
But all the souls that love their land
Are all the same where'er they be.

假令戰場に出でずとも愛國者たるを得べし、皇帝は國民一般の愛國心を嘉賞し給へり。

（十二）

ますらをに旗を授けて思ふかな
日の本の名を輝すべく。

When from my trusting hand the flag
Is given unto my faithful men
My heart mounts high; the rising sun
Will surely bring it fame and light.

こは皇帝が聯隊旗又は其他の軍旗を與へ給へる時又は後直ちに咏じ給へるものなり、我等の旗の標章は旭日なり、日の本の名を此旗の下に立つ敢勇なる軍人は豐榮登る旭日の如く輝かすべしとなり。

（十三）

靜かにも世は治まりて喜びの
盃あげん時ぞ待たるゝ。

O for that time when joys of peace
Shall fill again a peaceful world!
Then shall I lift the wine cup high.
O for that time, I long for it!

此御製は盃に關せり、日本が戰爭を開きたるは誠に止むを得ざるに出づ、皇帝は眞摯なる平和の熱愛者なり、或君主は眞實平和を希はずして外觀に平和を愛するが如く粧ふものあるべし、されど　皇帝は之と甚だ異ならせ給へり、皇帝は單に領土の擴大又は不正な

る動機を以て戰爭を開かせられたるにあらず、皇帝は實に世界の平和を克復し、即ち四海同胞となりて事物の正當なる秩序を樂まんことを切に望ませらる。

(十四)

つはもの丶糧(かて)も秣草(まくさ)もはこぶらん
　牛もいくさの道につかへて。

Food for my men
And fodder for their steeds;
In carrying ungrudgingly
Even the oxen in warfare serve.

皇帝は最もいやしき牛さへも國のために其務を盡すことを咏じ給へり。

(十五)

國のため揮ひし筆の命毛の
　あとこそ殘れよろづよまでに。

The traces left by 'life-hairs' of pens
That were handed by patriotic hands
Shall endure for thousands and thousands of years,
Remembered and admired ever afresh.

こは日本の筆に關せり、命毛は日本の筆を形くる毛の尖きの名なり、昔より愛國者の殘したる筆蹟多し、而して現今の戰爭に於ても戰場に斃れたる陸海軍人の遺せし詩歌又は其他の筆蹟あり、皇帝の咏ぜられたるは如何なる種類の遺筆なりや、文字の上には明かならざるも、恐らくかゝる種類の全體を包含せられたる如く見ゆ。

(十六)

古への文(ふみ)見るたびに思ふかな
　己が治むる國はいかにと。

Whenever I open
The ancient books,
The one thing I ponder is,
How goes it with the people I rule!

此最後の歌は數年前の御製なり、皇帝が眞正の君主としての御行蹟あることをあらはせり、若し敎訓に充てる賢君の事蹟を記せる書あらんか、勿論君主に必要なる先導者として、とつて以て模範となすべく、若し暗君又は非政によりて起りたる不幸を記せる書あらんか、又とつて以て消極的の訓戒を得るに足るべし、かくの如く皇帝は古への書を讀まるゝ毎に必ず治め給ふ人民の上を思ひ給ふことを咏じ給へり。

* * * * * * *

吾等は以上の御製によりて　皇帝の御宸襟の概略を推察し奉るに足るべし。之を書くに當りて予は些かも我君主を輝かさんとの思想を有せざりき、予があらはさんと思へしは只　皇帝は必要ある時國の權利を保護せらるゝと同時に君主として最も仁慈に富み、且つ最も人道的におはせることをいはんとしたるのみ、而して此等の御製にあらはれたる御感懷は日本人民の多數を貫くべきを疑はず、吾等の敵國は常に吾等を嘲りて西歐の文明を分つこと能はずといひ、又は極言して「野蠻」「猛惡」なる人民として吾等を汚辱したり、露國貴族の子として博愛家なるトルストイ伯の如きすら、最近尙かゝる言を放ちたるにあらずや、かゝる誹謗は單に日本人を知らざるよりて起りしや否や、予は一に吾が讀者の判斷に待つ。　（完）

譯者附言、詩情饒かにして英詩に堪能なる和田垣博士は數月前(二)に掲げたる御製の英譯を試みられしなり、こゝに記して讀者の參考に供す、

The sons all, ere this fall,
At the country's call
To the front are gone,
Leaving farm and field and all
In the land of the aged sires alone.

# 高等文官試驗及第秘訣

喜多澱南

高等文官試驗は世の法學生の最も難關として一般に危懼する所であるが此の感想は年一年受驗者の競爭劇烈を加ふる毎に彌々益々其の度を高むるのである、彼等は實質的に受驗學力の有無如何よりは寧ろ主として受驗中に於ける危險を切に感ずるので現に學力の點に於て充分の自信ある受驗者と雖も其の試驗場に臨むや戰々競々として安き色もなきは全くこれが爲めてある、而して受驗中に於ける危險は吾等實際に經驗したる者の獨り能く語り得べきて世の受驗者の爲めに自ら經驗したる及第秘訣を茲に擧げることにしやう。

受驗者の唯一期すべき所は試驗官に對して遺憾なく自己の學力を認識せしむるの一事である、受驗者が自己の學力を認識せしむる機會は試驗官が數個の問題を提げて受驗者に臨む時この際受驗者が先づ觀取すべ

き要點は發問者の意思である、即ち問題の要求する事項の範圍は如何若しその答辯にして所要範圍を掩はざらんかその程度に於て受驗者は僅かに自己の學力を認識せしむる機會を失つたもので之に反して答辯がもし所要範圍を脱せんか其の脱したるものは徒らに試驗官を煩勞せしむるのみか問題を正解する能力なきものとして却つて不利益なる心證を與ふるに過ぎないのである。

發問者の意思を觀取するには獨り問題の範圍のみならず進んで其の主眼點を捕捉せねばならぬ、試驗官は問題の主眼點を捕捉して之に充分の解答を與へざる限りは決して滿足するものではない、主眼點を逸して餘事を談ずること如何に叮嚀懇切を極むとも到底致命傷たるを免がれないのである若し問題の意味が明かに二樣に解し得らるゝものがあれば其の二樣に解し得らるゝ理由を述べて自己はその中何れか一を選んで答辯するが可い。

次に論ずべきは時間の利用である答案は凡て簡單明瞭を尙ぶのであるが所謂簡單明瞭を尙ぶは一言半句にして萬事足れりと謂ふのではない苟も一問題に所定時間のある以上はその時間全部を利用することが必要である、即ち問題の範圍を脱せざる限り換言すれば問題の主眼點と云ふ直接に尙ほ一歩進んで間接に關係を有する凡ての問題を遺漏なく解決することである、若し問題に就て學說が數個に別れ未だ歸一するものあらざる場合は其の諸學說を列擧することも必要である併し一々之を論難批評して最後に自己の所信を明白にせざる限りは全く徒勞に終ることを注意せねばならぬ。

答案の文章は敢て巧妙を要せずむしろ平易明析にして難澁ならざるを尙ぶのである、平易明析にして難澁ならざるは文章家にして初めて成し得べしと論ずる人もあらんなれど何の事はない平々凡々の句調を以て普通の文體に書き流せば可い、唯忌むべく愼しむべきは冗長なる文章である是等は多くは誤謬に陷り然らざるも到底意味不明に沒了するものである、之と同時に文章の字體鮮明なることも亦必要なる一事項で可成楷書にて普通、人をして容易に讀み得べき程度に記載することを努めねばならぬ。

以上は試驗全體に通じて注意すべき重要なる事項であるが元來高等文官試驗には四個の階段があつて各々其の試驗の目的と趣きとを異にするから以下各場合に就て詳細に論じて見やう。

**論文試驗**

論文試驗は殆んど一ヶ月の期間があるから先づ十日間を起草期間として他の二十日間を之が材料の蒐集に當てる事が出來るのである、參考書は可成內外の書籍を廣く涉獵するが可い尤も日本の著書のみでも大抵事足るべきも國際法の如きは外國の著書を多少參考に資するの必要を感ずるのである、吾人は國際法を選擇する受驗者の爲めに良好の參考書として條約に關してはタイラー氏の A Treatiese on International Pablic Law. 仲裁裁判に就ては History and digest of the International Arbitration 國際事件の先例に關してはピト、コベット氏の Leading case and Opinions on International Law. を推擧する之は何れも帝國圖書館に在るから是非就て見られたい」論文試驗も每年約半數の不合格者を出すのだから中々馬鹿には出來ない、論文試驗に失敗したるものは恰も金州丸常陸丸が擊沈された如く武士が戰場に臨まずして先づ倒れるのだから人間これほど遺憾なるものはないのである、今日まで私立大學出身者の多くが高等文官試驗を避けて專ら判檢事又は辯護士試驗に走せたのは一に此の危險を恐るゝかてあらう、勿論僅々廿四字詰廿四行の半紙廿五枚より成る小論文であるから兎ても完全なるものを望むことが出來ないが可成的その完全を期するため文章は勉めて簡明に其の所論の內容を努めて多くせねばならぬ、從つて論文の起稿に當つて最も留意すべきは其の構成である、第一に總論第二に本論第三に結論として之を章節に區分して各別に論ずるは論文として其の體裁を得たるのみならず自己の論旨を明瞭ならしむる點に於て利益なる方法である。

論文試驗の問題は大抵法學社會に於ける難問であるから試驗官も必ずしも其の心中一定不動の答辯を要求するものではない從つて受驗者は各自各別に其の研究たしる所に從ひ大膽に之を立論し大膽に之を立證して其の所信を披瀝するの自由を有するのである否むしろ責任を有するのである彼の徒らに他人の糟粕を嘗め雜多の學說を羅列するに止まる者の如きは如何に寬大なる試驗官と雖も之に不印を與ふるに恐らくは躊躇せないであらう

**迅速作文試驗**

高等文官試驗中最も多くの危險を感ずるものは恐らくは迅速作文試驗であらう、問題は必ず論文と關係を有するものだから此の點に就ては大に心を丈夫にすべ

きてあるが兎に角一時間内に論文と稱し得べきだけのものを作るのだから中々の苦心てある、此の短時間の中に我が運命が定まるのかと思へば誰しも心臓の振動の自ら喉にまで達せんとするを感ぜざるを得ない試驗中最も多くの危険を感ずると云ふのも實は茲の事てある。

斯の如く心臓の鼓動の劇烈なるに伴ふて精神が動搖し初むれば兎ても充分の思想があつても之を發揮する事が出來ないのである、迅速作文試驗は其の名の示す如く甚だ迅速に筆を運ばねばならぬ筆を運ぶと共に文章を構成せねばならぬ最初の五分、十分にして精神が動搖して徒らに時を空費せんか最早や最後てある時辰はより聲高くチクタクを急ぎ精神は益々動搖して筆を握つたまゝ白紙を瞰むで遺憾ながら往生せねばならぬ、假令白紙を瞰まざるまでも十分十五分を空費したる後は兎ても結論のある文章を書く事が出來ない結論なき文章は到底論文どして見る價値が無いから試驗官の眼にも矢張りその通りに「價値なき論文として映ずるのである、故に曰く迅速作文試驗に於て最も記臆すべきは生命に差支のない限り心臓の鼓動を制止すべき事てある。

此の故に迅速作文試驗前の數日は宜しく讀書等を止めて早くから靜穩の場所て充分の睡眠を取らねばならぬ、頭腦は可成冷靜にして苟も精神に疲勞があつてはならぬ精神に疲勞あるものは最初より迅速作文試驗の如き劇烈なる競爭場に立つ資格は無いのである、試驗場に臨んては充分精神を靜め極沈着に最初の五分、十分を正に筆を下さんとする論文の腹案に思考を潜むべきてある、迅速作文試驗の論文は必ずしも章節に分ち論ずるの必要がないから各問題に應じ各適當の方法を選ぶが可い但し章節に分ち論ぜざる場合には論旨の變ずる毎に各行を改めて書き下すを以て有利なる方法と信ずる。

試驗場の時辰は何處のものでも大抵その進行の甚だ早いものであるが殊に迅速作文試驗場の時辰に至つては驚くばかりに急進する事を更らに諸君に告げて置く、慥かに普通のものより倍の速度に於て進行するから驚かざるを得ない從つて極精確に時間と論文との比例を計つて筆を下す甚だ怜悧なる受驗者も其論文の三分の一を草し終つて試みに頭を擡ぐれば時計は早くも二分の一の經過を指して居る、之は不思議とポケットの時計を取り出して見ても矢張り正しく二分の一これて

はと他の三分の二を草するに周章狼狽を極むるに至るもの十中の八九皆然りである、之れ大に注意すべき事であらうと思ふ。

之に就て試驗官に迅速作文試驗の答案の樣子を聞いて見たが中々可笑しい、最初の數十行は何れも字々皆階書で字體甚だ鮮明であるが中半の數十行は何時の間にやら行書に變じて字體も稍々不明確に最後の數行に至つては草書の何が何やら殆んど讀むに苦しむものが多いとの事であつた、是れ事實的にこの間の消息を示すものではないか、故に吾人は字體に就てはむしろ行書を選ぶことを勸告しやうと思ふ（時間の許す限り階書を可いとするは勿論なれど）何となれば比較的明確にして時間を要せざるものは行書に限るからである。

### 筆記試驗

筆記試驗は普通二問題（時には三問題）に對して二時間與へらるゝのだから時間の點に於ては左程の苦痛を感じないが併し之とても豫め問題に應じて時間を割當てる事が必要である、受驗者の多くは第一問に多くの時間を費やして至極精細に論及するが此の結果第二問に至つては時間の餘裕はなきため自然簡單に過ぎて全く申譯的の答案を付するに至るの弊がある、斯の如く二者甚だしく其軒衡を失するは當初時間の配當を誤るの罪で最も戒しむべき事である。

問題中稍々難問に屬するものは暫く之を後にして先づ最も容易なるものより筆を下すが可い、容易なるものは能く短時間を以て解答し得るから餘す長時間を難問の思考に當てる事が出來るのである、此の際尤も危險なる方法は之を倒用する事であらう若し之を倒用せんか難問題の爲めに先づ時間の過半を失ひ尙ほ完全なるを得ざるに頭腦漸く錯亂して他の容易なる問題をも之が爲めに其の完全を得ず斯の如くして有耶無耶の中に答案を提出するに至るのである、虻蜂取らずとは眞に此の事だらう。

論文試驗と迅速作文試驗とは共に豫備試驗であるから其の期する所單に合格點數に達するを以て足れりとするも本試驗の一部を爲す筆記試驗に至つては其得點の多少は直接に他日發表さるべき成績の優劣に關するのだから受驗者は單に合格點數を期するのみならず宜しく進んで其の一點の差をも爭はなければならぬ、而して等しく同一の思想に基づくものと雖も之を文章に表示するの巧みなると拙なるとは試驗官の認識に於て非常なる差異を來すもので勢ひ此の試驗に於ては文章

家が利益するのである、所謂文章家とは既に云へる如く舞文婉字を以て徒らに文章を修飾するを意味せず努めて錯綜紛雜を避け平易明析に論理一貫して一讀人をして立論の正鵠に服せしむる底のものをいふのである、迅速作文試驗の場合と違ひ筆記試驗には多少時間の餘裕があるから答案を書き終れば可成一回閲讀するが可い、脱字誤字等が隨分あるので之が爲め自然論旨を不明に歸しめ、或は甚だしきに至つては全く反對の意味を表示するに至るものあるは往々にして吾人の實見する所である。

多くの受驗者の中には、或は試驗場に入る間際に當つて急しげに「ノート」を拾ひ讀み又は諜々他人と論議する人があるが之は慥かに精神の錯亂を來すもとで他に何等の利益も無いのである、否何等の利益もないのみならず却てその入場間際に讀んだ事が絶えず腦を來往して之が爲めに却つて他の記憶を薄弱にするの恐れがある之れは斷じて廢すべき方法であらう、凡そ筆記試驗に於て或一定の事項を記憶するの必要なる事は勿論であるが之よりも尚ほより多く必要なるものは應用推理の力である、この應用推理の力は入場間際の拾ひ讀み又は論議によりて妙に減殺さるゝのである。

## 口述試驗

迅速作文試驗に次て危險なるものは恐らくは口述試驗であらう、試驗官は最後のこの試驗に於て最も精確に學力を査定せんとし又實際に之を査定し得るのである、試驗官は必ず反問に反問を重ねて受驗者の眞の智識を認識せざる限りは何時までもその反問を續けるであらう、筆記試驗に試驗官を瞞着して合格の名譽を僥倖したる才子も此の試驗場に於てはさすがに其の假面を脱せざるを得ないのである。

筆記試驗等に於ては苟も問題の範圍内と認むべきものは時間の許す限り發問の主要點のみならず之に直接又は間接に關係を有する事項にも論及するを以て可とするも獨り口述試驗に至つては之が例外をなすものである、口述試驗に於ては可成發問の要點を簡單に答へるを以て最良の方法とする、試驗官が若しより多くの答辯を得んと望まば更に發問を試むから受驗者は答辯の簡單に過ぎたるを悔む樣な場合は少しも起らぬのである、彼の自ら進んで詳細に之を論議せんとして附加率連徒らに廣舌を弄する輩は忽ち瞥眼なる試驗官より反問の矢を放たれて八面襲撃終に果敢なき最後を遂ぐるに終るのである。

受驗者の或者は一旦既に答辯したる事は假令其の途中誤謬なる事を自覺しても飽まで論理を貫徹して不正の結論を得てそれに滿足してゐるが斯の如きは甚だ拙策と云はざるを得ない、勿論一旦答辯したる事を直ちに掌を飜すが如くに取り消し取り消又取り消しといふ風では一向感心せないが併し中途に於て誤謬を發見したる以上は頑固に之を固守する必要は少しもないのである、否試驗官は何れも是れ一世の大家この人に前に己れさへ明かに自覺し得る如き謬論を固執するは實に一文の價値なきのみならず試驗官の眼にはむしろ沒理漢らしく映するので此の場合に潔よく前說を撤回するは慥かに名譽の退卻である。

名譽の退卻は之を一たびするを妨げないが二度三度同じ問題に就て繰り返へすに至つては最早や列强の同情を失はなければならぬ、故に自說の明かに誤謬なる事を發見したる場合の外須く勇往邁進すべしてある、彼の反問に反問の結果或は自說の誤謬に陷りたるにあらずやなど速斷して輕忽に退卻を初むるが如きは其の以後に於て來るべき幾多の反問に到底回復すべからざる失敗の淵に陷るのである。

口述試驗は唯に學力の査定のみならず之と同時にその人物如何をも併せ見るのだから受驗者は可成その言語擧動を愼重にせねばならぬ、併し愼重その度を過して小心翼々として薄氷を履むが如きは彼の粗豪徒らに放言を好むの輩と同樣排すべきである、要は心を小にして膽を大にしに卑屈失せず輕忽に流れず沈着の態度を以て溫顏試驗官に對する事である。

# 明治闇黑史（六） 禁轉載

有磯逸郎

## ○林有造等の政府顚覆陰謀（下）

『陸奧、大江等と熟議を凝して、後日を契り、林は意氣昂然として、獨り東京に上ぼつた、此時林の胸中に書かれた妄想は、それは隨分壯絕快絕なもので、安治川口に立つて、三百年の風雨を凌いで、豐太閤の雄圖を現はしてゐる大坂城を顧み、陸奧以下の同志は、各々必死の勇を奮つて、闇中に運動を進めて居るのを思ふと、既に天下は手に握つたやう、然かも九州表よりは。每に官軍の不利を報じて來るので、ます〳〵面白く、林は驀地に東京に出て、再び例の白髮山の運動に

取り掛つた』

『死物狂ひに、ヤマの運動を續けてゐる途中に、爰に林は意外の事變を耳にした、それは明治十年は四月の十五日兄貴の岩村通俊は、戰爭の眞最中に、鹿兒島縣知事の任命を受けたので、向島の植半で、岩村の一族は集りて、送別の宴が開かれた、胸に一物ある林も、素知らぬ顏で平然と。一坐の中に入り、杯を換はしてゐたが、老人や婦人の間にも、話題に出るのは、九州表の戰爭談、特に熊本城の動靜如何、といふのが坐中の話題と爲つてゐたので、林も合槌を打つて調子を合せてゐた丁度其の處へ、一ツの急報は達したのぢや……林の耳には意外千萬な報道であつたから堪まらぬ、物に動ぜぬ流石の林も、此時ばかりは心臓も破裂せんばかりに驚いたさうであるが、成程、今から考へても、此時の林の擧動が、見ゆるやうぢや。それは賊軍に圍まれてゐた熊本城は、首尾よく官軍と連絡が通じたといふ報道であつたのよ』

『熊本城は連絡を通じた！』、旅順陷落の號外を受取つた此の一月の我輩等と同じく、坐中の者は小供に至る迄、何れも踴躍して喜んだ、が、林一人は、坐中の喜べるを傍らに見て、獨り愁然として、機會の逸し去りしを悲しんだ、といふのは、熊本城の安危如何は、官薩勝敗の分るゝ所で、京都の大本營が、熊本城に意を注いでゐる其の虛を衝かん、と巧んでゐた空中の蜃氣樓は、熊本城の連絡せるが爲に、がらりと目算が外れた譯、在東京同志の者一同も、今二三ヶ月は熊本の連絡は通すべしと思はれず、林自身も斯う早く官軍の捷報を聞かうとは豫期しなかつたのぢや。爾うして二三日の後、又候意外の報道を受取つた、今度は熊本連絡の報道よりも、林には苦痛であつた、それは國許の同志――立志社員の重もなる者より、銃器買入を中止すべしといふ寢耳に水の、電報を送つて來たとぢや』

『銃器の買入を中止すべし――何んといふ電報であらう、數年前より萬事を抛つて從事した大計畫を抛棄すべしといふ電報であるのぢや、林たる者、啞然として驚かざるを得ない、そればかりでなく、その頃東京に上ぼつてゐた板垣退助は、中途に林等の計畫に遠がり、例の理屈好の特性を現はして、護國兵團組織の議を唱へ初めた、土佐の明星たる板垣にして既に斯んな風であるから、在京土佐人の中にも、ぼつ／＼板垣の說に和する軟派の起つてくるのも亦た止むを得ない。元來、我輩は林のやうな性格の瞭然しない男は、餘り

快然とせぬ方であるが、此時の林の境遇に對しては、一掬同情の涙なきを得ない、」

『此時林の態度は、如何であつたか、といふに、流石嘘にも政府の顛覆を胸に畫いた男ぢや、熊本の連絡にも氣を挫けず、同志の翻覆に對しても心を折らず、「熊本の連絡を通じたるは、寧ろ我黨の運動に好機會を與へたるもの、自信強き西郷も、之ありしが爲に大に土佐を頼むの心生じたるべければ、土佐人の起つべきは方に今日に在り」と論じ、同志を激勵して、運動を續けてゐたのは、見事〳〵、爾して一方には大隈重信等を尋ね、白髮山の下附金を迫つたので、その効果現はれて、いよ〳〵金員の下附を受くべき程度に運んだが、金を受取るべき日取は瞭然せぬ」

『日取は判然せぬ、といつて、此の大事の際に茫然して居れぬので、林は岩崎彌太郎を三菱會社に尋ねて、新公債證書で下附さるべき右金額十五萬圓を正金九萬圓に賣らんとを相談した、大腹の岩崎は、目前六萬圓の利益があるのを算盤において、早速に應じて呉れたのはよいが、その半額——四萬五千圓を前金に、と言つて見ると、岩崎はおひそれと應ぜぬ、種々推問答の末に、漸やく一萬五千圓を受取り、此の一萬五千圓の金を携へて、林は再び土佐に歸つた、無論東京出發の前には、岡本等と手筈を定めて、土佐に歸つたのぢや」

『土佐に歸つて見ると、同志社の輿論は、林の想像通り、片岡を初め社員の重もなる者は、何れも擧兵を不可として、護國兵團組織の議に傾いて居る。當時世人は土佐を如何見てゐたかと言ふに、板垣等は護國兵團組織を稱へて、公明を示してゐたにも拘らず、孰れも猜疑の眼を以て、土佐に注意を加へてゐたのぢや、待てよ、爰に斯樣な物がある(と傍らに散らかつてゐる反古の中より、古雜誌の綴込を出だし)、之は今も出て居るが、當時最も冷罵の筆を揮つて、時勢を諷刺した初代の團々珍聞ぢや、十三號に斯んな記事が出てゐる、

　市公も俊公もしつかりなせへ、常にない暴風で、木戸は倒れる、板垣はぐわたつく、萩は搖れる、豐後梅の子が落ちて、窓へコッキリ、大いたけんの子供なら、中津にや居られぬだ、「三ちやんも、岩ちやんも、周章てなさんな、大黒柱を抑へて居さへすりや、何樣な西風にても、倒れはせぬと思ふが、何卒南風の雜らねへやうにして、庭の衛の塀や、臺の塀の倒れぬ中に、三尺棒を突かへ〳〵

といふ文字が出て居る、何樣な西風にでも、倒れはせぬと思ふが、何卒南風の雜らないやうにして、といふのは、土佐が、此の西南役に關係しないやうにといふ言條であるらしいが、一皮剝いて、その奧に潛んでゐる鬪々記者の眞意を見ると、世人が、如何に土佐人の擧動を眺めてゐたかといふ當時の模樣が、今の君にも判るであらう、之は表紙に現はれてゐるやうに、六月十六日の發行であるから、丁度林が、一萬五千圓の金を携へて、土佐に歸つてゐた頃の風聞記に爲るのぢや、』

『世間が右のやうな風聞を傳へてゐるにも拘らず、土佐表にては、此の一大時機に際して、擧兵を不可として大平無事の護國義勇團の議論に日を費やして居たから妙ぢや、林は必死と爲つて、その不可を論じたが、容易に決せず、山田、池田、島地の三人を別室に招ぎ、篤とその利害を說くと、漸やくにして、擧兵に應じたので、爰に擧兵論が再び燃へ立つた、靑年血氣の徒は、早くも大阪乘込の快事を想像し、先後を爭ふて、何れも意氣旺盛の體、特に前に言つた谷重喜の如きは、己れ先づ大阪に乘り込むべしと主張して、又もや乘込の先後論に、議論の花を咲かせた、が、銃器到來迄は、各々沈重の態度を取るべしといふの議、勝利を占めて、林は三たび東京に出たが、實を言へば、此時既に時機は過ぎて、不運の惡戲者は、舌を吐いて林等の前に笑つてゐたのぢや』

『林が三たび東京に出る前後に爲りて、其れ迄は、九州の天に氣を奪はれて、魂の拔殼のやうであつた當時の政府も、他の方面に注意を加ふるの餘裕を生じ、林は一萬五千圓の金を携へて土佐に歸つた頃より、そろ〳〵土佐人の行動に注意し初め、當時政府內で鎌の敏なるが如し、と敏腕の名を博してゐた河野敏鎌は、先づ土佐に歸りて、それとなく土佐の國情を偵察すれば、同じく土佐の出身で、元老院議官で居た佐々木高行も、政府の意を受けて土佐に歸り、陸軍中佐であつた北村某といふ男も遣つて來る、擧兵派も逆まに探偵を放つて、窃に政府の愚を晒つてゐたが、焉んぞ知らん、此時林等は却つて運命に翻弄されてゐたのに氣が付かなかつたのは滑稽』

『果然！　果然！、例に依つて林は陰謀本部の大阪に立ち寄ると、陸奧の手に屬して、和歌山方面を引き受けてゐた彼の山東直砥の使者が遣つて來た、慥か此時の使者は兒玉仲兒であつたやうに覺えとる、否、此の

時代には後に陸奥の腰巾着であつた岡崎邦輔等は、眞の小僧ッ子で、西南戰役當時の活舞臺に出なかつたのぢや、當時は兒玉仲兒も若者であつたが。兎に角山東の使者として林を尋ね、「時機は逸せり、中止しては如何ぢや」と和歌山の事情を述べて、山東の意思を傳へた。林は頑として中止の議を退け、たとへ如何なる障害起るも素志は曲ぐべからず、と稱して兒玉を追ひ返した、が、山東の注意に及ばず、此時旣に探偵の黒手は、林の跡を追ふてゐたのぢや」

「林は大阪より京都に出て、陸路、大津に出ると、尾行して來た巡査は林の進行を止め、京都に引ッ返へして、憲兵の取調を受けた、スワ陰謀露見、と騒ぐ胸を抑へて、鷺を烏と言ひくるめたが、之と同時に那處よりともなく、片岡健吉等は捕縛せられたり、といふ聲は聞こへて來たので、流石の林も、悵然として、運命の我に利あらざるを嘆じたさうであるが、成程林の身に爲ると、其樣であつたらうと思はれる。懷ろ息子の君等は知るまいが、闇中に秘密の計畫を起して、その中途に、同志の身上に異變あるを耳にした時ほど淋しいやうな、心細いやうな感の起るとはない、林も土佐表の變事を耳にして、ちよと氣を折つたが、鋭氣を鼓して、東京に出て、銃器買入に着手してゐると、東京へ出た丁度三日目に、警視廳に捕へられて、鍛冶橋監獄の人と爲つた、數年來心血を注いで計畫した乾坤一擲の快事業も、憐れうたかたの水の泡、ハッ〱。此時高知で捕へられたのは、片岡健吉、谷重喜、山田平左衛門、池田應助、岩崎長明、池添禪陽、桑原正之、弘田延外五名、政府は板垣も、後藤も、連累に數へてゐたさうぢやが、實は板垣は護國兵團組織の頃より、林等一味と遠かつたゐたから、關係がないといつた方が、穩當ぢやらうよ」

「林等の大陰謀も、斯んな鹽梅式に屁のやうに終つたが、西郷軍は今少しく粘着強く、熊本城の連絡も今少しく日を過ごすと、一寸面白い芝居が見られたてあらうと思ふ、那の方面も局外の我輩等は力瘤籠めて踏ん張つた甲斐もなく、右のやうに日に會つた雪達磨のやうに消えて仕舞つたのは、今から思ふと、殘念でもあるが、また馬鹿らしいやうでもある。林等の失敗したのは、何が第一の原因ぢやといふのか、土佐人は餘り利巧で、理屈をいふとが好であるからで、原因も何もあつたものぢやない、大事の瀬戸際に、やれ擧兵論の、やれ建白論のと、理屈を捻つてゐる間に、十年一

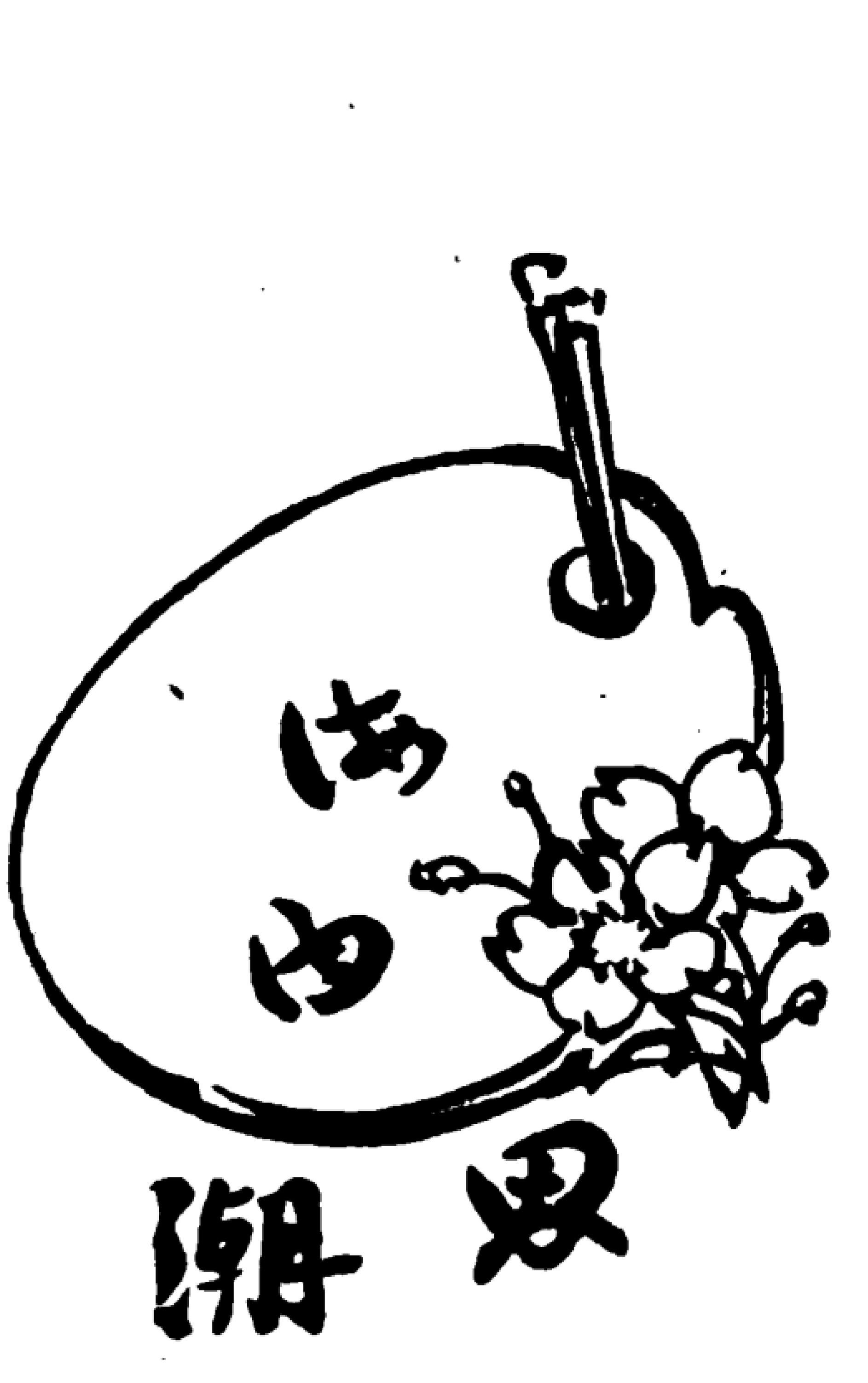
過の大時機は去つたのぢや、フ、フン、土佐人は理窟て陰謀が出來上るものと思つてゐたらしいのぢや』

『林といへば、世間では人情を解さない、好んで他を計略の中に陷るゝ木强漢のやうに思つてゐる者も多いやうであるが、此の陰謀時代に於ける林は、陸奥よりも、片岡よりも、大江よりも粘着强よく、頼母しい處があつたやうぢや、否、大江といへば、陰謀の途中に奇策を出だして、板垣を怒らしたこともあつた、それは兎も角も、林は十年の禁獄と定り、岩手監獄に護送せられた時、丁度千住の町外れて、籠の中より、ちらり萱堂の姿を見て、我知らず胸一杯に爲つて、顏を上ぐるとも出來なかつたと、何時も林は咄してゐるのを見ると、林といふ男も、可愛らしい處があるではないか』

### 文士初對面錄(その十五)

天中天

▲後藤宙外氏　大兵肥滿の東男のやうに、雜誌なぞの寫眞て見たときから思つて居たが、思ひきやて、痩ぎすな小柄、お氣に障へたら御免なさい、どちらかと云へば風采の揚らぬ方で、取りつぎが甚だ六ヶ敷い性質だが、話して居る中にいつか面白くなつて來る、鏡花君が此人の小說を評して何處となく重々しい、どッしりした處があると云つたが其通り、其人物にも亦これが適評である(ツヾク)




## 俘虜

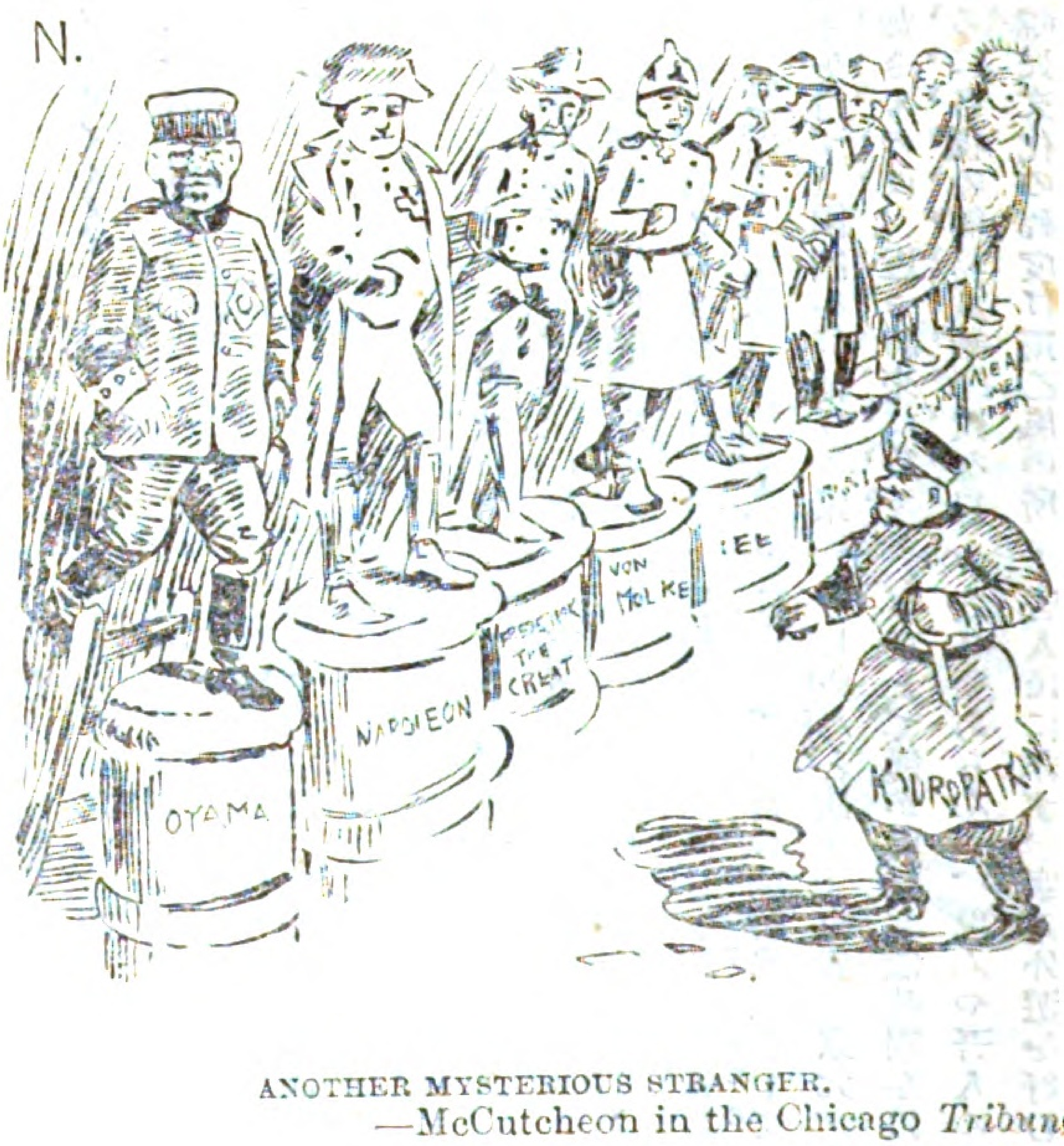
【精神界】

俘虜を晒ふこと勿れ。我等も俘虜にあらずや。如來の御國の民たるべき身を以て、みにくゝも罪惡の魔王に降りし者ならずや。日本に來れるロシアの俘虜は、降服を耻ぢずといふ。而も風のあした。月のゆふべ、いかで思を其故山に飛ばす者なからむや。然るに我等、己をみよ。光明の御國のたふときをしりながら、そをこひしと思はず、魔郷の苦惱を惡ぜざるにあらずして、そをすてかぬる者にあらずや。知れ、我等はロシアの俘虜より劣れる者なるを

見よ、我等は一切の魔軍を絶滅すべき大命を受けながら、卑怯にも、劍を敵旗のもとにさゝげたりし身にあらずや。ロシアの俘虜はもとよりみにくゝ我に降れる者なり、されど降るまでは、けなげに戰ひき。且つ其敗れたるは、主將、其道を失ひしによれるもの少きにあらず。然るに我等は、いかにぞや。向上の戰場に立つて、過去永劫の間、いかほどの奮鬪をば試みたるか。我等は、すこしも人にかたるべき功名なきにあら

ずや。されば是れ我等が主將の弱きがためなるか。あゝ、何ぞ然らむ。我が向上軍の總帥は、既に三千年の古に群り來る衆魔を伏して、「我はジナなり、世に勝てる者なり」と呼ばせたまへるにあらずや。菩提樹の蔭を照らせし曉星は、とはに無明の迷暗を破却したまへる勝利の旗章にあらずや。而して代々の聖賢は、共に此旗章を望み、その指麾に隨ひて、みな相ついて、奮進せるにあらずや。聞け。三千年來すこしもたえずして、いよ〳〵さかふる大法の唱道は、實に我聖賢の凱歌の連續せるものなるを。總帥、既に勝てり、諸將亦た勝てり、しかも我等は敗れき。我等が、‖ロシアの俘虜よりも勝れる處、いづれにありや。

餓うれど、周の粟を食ふを快しとせず、渇けども魔の泉を飲むを潔しとせざるは、丈夫の意氣なり。‖ロシアの俘虜は、平然として、日本の食を食ひ、日本の水を飲めり、加ふるに、あさましくも娼婦とたはむれて、その德操のそこなはるゝを顧みざらんとす。我等は、これを嗤む。されど省みよ。我等は、自ら、たえず煩惱を糧とし、罪惡を食とし、常に情慾の魔女と戯れつゝあるにあらずや。我等が一歩墮落の歩を下す時、惡魔の嘲笑は一段高きを加ふるも知らずして、かの俘虜の如く、慚づることなく、愈々亂れ行く者にあらずや。




ANOTHER MYSTERIOUS STRANGER.
—McCutcheon in the Chicago *Tribune*.

‖然もロシアの俘虜は、自尊の度を失はず、縲絏の下、猶時に敵を罵り、敵を嘲る。我等は如何全く情慾の奴隷となり、煩惱の婢妾となり、罪惡の語を以て、罪惡の德をたゝへて、自ら甘んぜる者にあらずや。知るべし、‖ロシアの俘虜よりもいかに我等の劣れるかを。

嗚呼、我等は俘虜なり、賤むべき俘虜なり、‖ロシアの俘虜よりも劣れる俘虜なり。一念、これを思ふとき、如何ぞ自己の淺ましきに泣かざるをえむや。ましてや楚歌よもにみちて、眞實に我を慰むべき故國の語、一も我に來らざるを感ずる時、我いかんぞ寂寥の思に咽ばざらんや。然るにたふときは如來の大御心なるかな。我等の不義を責め給はず、却つて我等をたすけんがために、その智慧の劍を以て、迷暗の魔宮を破り、猶ほ我等を御子と呼ばせたまひて、其招換の御名を以て我等を呼びたまふ、聞かずや、南無阿彌陀佛の御名は、實に其御聲なり。嗚呼、これ我故國の語なり。此御語、すでに我に聞こゆ。これ我を鎖せる敵窟已に破れたるの證にあらずや。敵窟、既に破れたり、殘從たとへ暴るゝも、これ我主にあらず、我はもはや俘虜にあら

す、何ぞためらふべき。「子よ、來れ」と呼びたまへば、「父よ、往かん」と應へん、實は「欲生とは、即ち是れ如來、諸有の群生を招喚したまふ勅命」にして「歸命とは、「如來の勅命にしたがひたてまつるなり」。俘虜を晒ふことなかれ。我等も俘虜なり。されど感謝せずや、我等は敵既に破れて。安らかに御國に迎さるべき身と定められたる光榮の俘虜なり。

## 韓國學生をして日本留學の氣風を昌ならしむ可し

『新人』

當路者の考定したる韓國學校組織の方針を見るに、(四月十七日國民新聞所載)京城に高等師範學校、中央師範學校、中學校を設置し、各道に師範學校を配置し、行々は京城に大學と言ふが如き高等の專門學校をも設くる筈なりと傳ふ。若し之をして事實ならしめば、吾人は多少異議なき能はず。蓋し此報道は餘りに簡短にして內容を知悉するに由なけれども、大體に於て日本の現制度を移植したる感なきを得ず。國制を移植する素より大に可なりと雖、日本現今の中學校の如きものは、近き將來に於て朝鮮に必要なきものなり、吾人は之に更ふるに各種の簡易實業學校を以てするこそ、最も適切の施設なりと信ず。韓民文化の程度は獨乙風の所謂ギムナジユム制度よりはレアル、シユーレの設備を以て最も緊要と爲す、中學校設置の如きは、普通教育の步武を進めたる後にて可なり、漫に各種の學校系統を整備して外觀の美を作るの愚策たるは、當路者素より之を知らん、然らば斯の如きは大に考慮す可きに非ずや。京城に中央師範學校を設け、各道に師範校を配置するは、普通教育發展の準備として最も適當の施設ならん。只高等師範學校を直ちに京城に設くるに就ては、吾人別に異見あり。蓋し今日直ちに高等師範學校を設くるも、如何なる生徒を此處に收容す可きやは、先づ當來の問題なり、吾人思ふに生徒を得ること容易ならざるべし、適好の素養を積める朝鮮人多からざればなり。然らば朝鮮教育に從ふべき日本人を收容す可き乎、是れ二種の互策ならん。只之が教師を求むる、恐らくは難中の至難ならずとせず。假令是等の困難なくして、教師も學生も共に之を得べしとするも、之を京城に置くは策の得たるものなりや否や。思ふに高等師範の學生を日本人に求むるならば、之を朝鮮に置く可なり、彼地の事情に通曉せしめ興味を深うせしむる利益あれば也。若し學生を朝鮮人の間に求むるならば、宜しく之を日本の國內に置く可し、何となれば朝鮮人をして日本化する機會を多く與ふ可ければなり。

京城に大學を置く可否の如きは、今日に於て深く考量する必要なきに似たれど、吾人は原則として、普通教育、尋常の師範教育、及初等の實業教育、若くは日本語の準備教育を除き、高等なる專門的教育を受くるに至らば、當分朝鮮學生をして宜しく日本國內に遊學せしむる方針を取らしめんと欲す。京義、京元、京釜鐵道既に布設計劃せられ、京城より東京まで僅かに五十餘時間を以て到達する今日、何ぞ遊學の困難を訴ふる必要あらんや、況んや吾人の聞知する所に依れば、朝鮮人は決して盤居人民に非ず、寧ろ外遊を好む者に似たり。近來朝鮮學生の米國に遊ぶ者頗る多し、是れ日本に之が收容する適當の設備無ければ也。若し日本の內地に朝鮮學生を收容す可き適當の學校を設け、且つ學生の安價に留學し得らるゝ利便を與ふるあらば、朝鮮人は喜んで日本に來り學ばん、斯くして彼我の理解を深くし、同情を厚うし、日韓の和親を固うす可き

也。濫に學校を朝鮮に起して、不完全の教育を施すよりは、高等の學藝は日本に來り遊ばしむるを以て最も利益大なりと謂ふ可し。政府の韓國に於ける教育施設も。民間有志の學校經營も、この方針に依て計劃せられんとは吾人の切望して措かざる所。

# 元祿風流行の兆

『時代思潮』

N.

樣々なる浮世の態かな。一方には武を尙び兵を練りつゝある世に、他方に元祿風の流行を見んとは。明治の文明は尙混沌の裏に彷徨して歸向する所を定めず、特に嗜好服裝の風尙に至りては古今東西の流行趣味雜然として統一する所なく、人をして街上百鬼晝行の想ひあらしむ。縉紳の邸宅は必らず和と洋との二様を並べ、光琳の屛風に飾られたる室の床の間には美術院派の朦朧畫あり、古茶器と寫眞ブックと相并び、外面ゴシクの家屋の內には、ヌボー式の家具を具ふるが如き、將た又婦人の服裝が和洋の蕪雜なる混淆に成り、頭には清淡の束髮簪をさしながら、衣服は濃厚の縞柄を着するが如き、若くは又多くの會合にはヤンキー風の洋服と白襟紋附の古風と相並ぶが如き、皆混沌と蕪雜と不統一と無趣味との自白にあらざるはなし。此の如き風尙混亂の時代は即ちあらゆる新意匠、新工夫の現はるべき時にして、その中終に渾然歸一の風潮を生じ來て、玆に明治式の風尙と流行とを見るべきなり。我等は必しも今の蕪雜その者を悲まず、又あらゆる異彩、新風の簇生するを厭はざるなり。此の如きは過渡の時代、特に東西古今の文明が膨然として相會したる時勢には必然の勢にして、一世の好尙はこの間にその適歸すべき所を發見せずんば已まざればなり。夏雲岫を出でて、風を起し、雨を齎らすに先つて風雲の變態を呈するは、新霽清明の天を樂み得る必至の預程なればなり。



Russia—"How can you expect me to give you an indemnity when I am not even getting away with a whole skin?" —*Amsterdammer Weekblad voor Nederland.*

されど、今の世に元祿風の流行その一端を現はせるに對しては斷乎として反抗の聲を擧げ、撲滅の策を講ぜざるを得ず。何となれば、外面風尙の事は內面精神の傾向と離るる能はず、衣服裝飾の微も終には思想と感情とに影響を及ぼし來て、靡然一時代の傾向を作るの虞あればなり。

云ふまでもなく、元祿はその幾多の長所美點と共に、確に肉慾の時代なり。當年の理想は意氣にあり、華奢にあり。粹にあり。男の意氣地、任俠の粹は、風流の意氣となり、淫靡の粹となり、淳樸の風地を拂つて傲

奢俗をなし、簡古、勁道の意力ある趣味は見るべからずして、虚飾、伊達の艷態、冶樣一世を風靡したるは即ち元祿にあらずや。元祿は肉慾を天國とする者の理想たるべし、その日その日の快樂を追ひてその他を知らざる者の樂地たるべし。而してその衣服の濃色、鮮彩、その風姿の妖艷、淫靡はその氣風の最も著しき代表たり。

想ふに明治の世は已に肉慾と天國を夢むる者の世界にあらずして、成功、活動の覺語は青年の頭腦を占領せり、生存競爭の世界は粹や通を容るる能はざるが如き觀あり。然れども肉慾と成功とはその表面相距るが如くにして、その裏面は密に相關聯し、功名心の成れる所、其處に肉慾の追從は生じ、成功に蹉跎したる人、その人は即ち又再び目前の快樂に失望を慰するの人なり。此を以て大魔王が佛陀の成道を障げんとするや、先づ肉慾、快樂の魔軍を送り、佛陀が之に動ぜざるを見て、之に次ぎて功名と Pride との魔軍を以て之を誘ひぬ、キリストを誘惑せんとしたる惡魔も亦、先づ石を化してパンとするの物欲を以て神の子を試み。之に次ぎて世界的威力の獲得を餌としてその心を動かさんとしたり。今の世「成功」といひ「事業」と呼びて、その Pride に驅られて、之を一生の理想となす者、老若天下に充つ、彼等は一歩を轉ずれば即ち肉慾の人、物慾の奴隷なり。見よ、今の世は上流に住する、高官、豪商等、所謂る成功の人にして、肉慾の魔網に陷らざる者幾何ぞ。成功を夢み功名に急なる青年にして、毅然として物慾の外に超然たる者果して幾人ありや。明治の世は活動の世なり、生存競爭の世界なり、而してその活動、その競爭の根底に理想なく信仰なし、此の如きは即ち慾魔、快樂鬼の最も人を魔し易き時勢ならずや。この時に當りて、戰雲東亞の天を蔽ふにも拘らず、國民の愛國心はその高潮を呈せるに拘らず、又武士道の呼聲高きにも拘らず、他方に元祿風の流行その端を開かんとするは、單に一個の奇蹟なるか、將た又何等の緣ありや。然り無理想、無信仰の時勢に加ふるに、風尚趣味の混沌を以てし、玆にその間に欲魔の乘ずるによりて、一世の氣風稍肉慾の天地に傾き、その一端を元祿風の復興に現はせしなり。而して風俗趣味の力は實に精神傾向の代表にして、又その傾向を助長し刺激せんとす。元祿風の流行は、果して一風俗の興廢、外面嗜好の一細事として看過するを得べきか。

記者曰、元祿風俗の流行に就いては、其善惡の議論一樣ならず、或者は之を以つて社會が眞文明に趣くの前兆也といひ、或者は社會墮落の結果なりと斷ず、然れども共に偏狹の論たるを免れず、共に一面をのみ見て他面を知らざるもの也、吾人は宜しく中庸に從ひ、其善を採り弊を捨つるの覺悟なかるべからず

# 青年元氣養成法

尾崎行雄

「成功」

元氣の大小肉體の强弱如何に由らずして、一に自信の念の厚薄に由るものである。自信の念に厚いものは如何なる場合にも元氣は旺盛で精神は確固てある、同時に勇氣も膽力も强大である、元來人は何事も悉く完全して居らない、從つて他人からは是非の品評も毀譽の言葉も掛けらるゝが、自己に牢乎として拔く可からざる何等かの信念だにあらば、決して我が元氣を他人の言葉や若しくは世事の困難位に奪はるゝもので無い、例へば死の苦痛が眼前に迫つて居る時でも、我に自信し自任する所ある人は、所謂從容として眠に就くので、其間毫も元氣の衰ろへたるもののあるを發見しないのである、故に元氣を養ふ方法としては、即ち先づ

自信の念を養ふを以て肝要なりと知る可してある。

然らば如何にして自信の念を養ひ、其力を胸に貯はへんかと云ふと、修業時代の青年ならば、常に勉強の傍ら古今賢哲の傳記を熟讀して、以て高尙な理想を抱くやうに心掛ける外は無い、好んで不健全な小說などを讀んだり、新聞の雜報中の軟弱部面を讀んだりしては、理想は低くなる許り、精神は澒張になる許りで、決して之に依つて我が元氣を練磨助長すると云ふ事は出來ない、人には夫々目的があるから、目的如何に依ては、戀愛文學の趣味を覺へる事も、市井の俗事所謂社會の裏面の出來事を觀察するも、一概に惡いとは斷定し難いが、然し志氣未だ固まらず、精神も幼稚な時代に在つては、斯る類の智識を得るは決して利益なるものでない、成る可く志氣を懸奮せしめるやうな、胸膛を豁大ならしめるやうな書を讀むのが、實際非常に爲になるもので、其には只傳記を常に愛讀しつゝ居るが最も適當なりと信ずるのである。

傳記中の人物は、孰れも必ず群に卓越したものであらればならぬ、然しながら之を悉く模倣する必要はない、其中で自分の性格に合した、其人物の行爲が如何にも我に刺戟感化を與へるやうな人を撰んで、假りに之を我が師として拜するに足るものとの信念を胸中に刻み込む、而して自分は又之を模し、余は彼の如く未來の英雄たり豪傑たり君子たり哲人たり得るとの自信を起し、平生勉めて我が理想を遠大に高尙に仕向ける、此の習慣が養はれて來て、いつ如何なる場合にも泰然として自ら任ずる所を動かさざれば、之に伴ふ元氣は極めて壯んで、決して凋衰汎喪する事は無いのである、彼の熱心なる耶蘇敎信者が、非常の迫害に逢ふも猶毅然として聲色を動かさず、我が敵を飽く迄も憐れんで、之を敎へんとの元氣が口に眼に溢れて居るのは、畢竟神の存在を深く〳〵自信して居るからてある、又我が兵士が非常の苦戰の場合ても、更に元氣を失墜しないと云ふのは、我が上官の技倆を信頼もするし、又我れは大和男子なり、大和男子は敵に弱味を見す可きものに非ずとの自信を抱いて居るからである、若し斯くの如き自信が無かつたら。困難に壓迫されたり、或は打擊を蒙る度毎に、元氣は悉く消失して仕舞つて、能く自己の天職や任務を完ふする事は出來ないのである、夫れ斯くの如く自信の有無が元氣の消長に密接なる關係を持つて居る事を知るならば、青年輩は何を置いても此の自信の念を養ふと云ふ事に心掛け、自信力は即ち偉人傑士の傳記を讀んで不用意の間に養へ貯ると云ふ事を、平生深く〳〵銘記して居られればならぬのである。

# 偉人主義と凡人主義

『日本人』

世の靑年を奬勵するに古來偉人の言行を以てするの殆んど常なるが、此に反して凡走人義を唱ふる者亦た之れ有り、曰く、人々皆な偉人たらんことを欲するは過てり、偉人は社會に稀れなる者、總ての人皆な然らんとするも豈に能く得んや、而して偉人たらんとして得ざるや、變して一種粗野の徒と爲り、虎を描いて猫たるに終はるは、洵に其人一生の不幸たり、最初より斯かる者たるを望まず、各々の其の宜しきに從ひて安全なる生活を送るに若くはあらず、凡人の凡人たるは其人の幸福にして、又た其の天職たり、社會は多數の凡人に依りて成立し、多數の凡人に依りて活動するものなりと。

是れ一應道理あるの言として聽くべし、世に英雄豪傑たらんとして事志と違ひ、徒らに煩悶懊苦せる者少からず、今の時代は唯だ漠然英雄豪傑を以て居るべきの時ならずして、皆な各々相應の職業に從事するの必

要あり、夫の自ら亂世の英雄を以て任し風雲に際會せんことを念ふは、決して稱すべきの事ならず。然れども亂世の英雄を以て任ずるの不可なるが故に人は皆な凡人を以て居らざるべからずといふも亦た宜しきを得たりとせず。凡そ人を奬勵せんとする、先づ現在よりも一層良善なるものゝ存するを示すを要す、人は必ず凡人ならざるべからずといふが如き、決して之を皷舞する所以の者ならず。凡人にして善く働らくは即ち謂ゆる大凡人なる者、之を一種の偉人といひて可、若し凡人主義を以て世人に勸めんとする、少くも大凡人といふを以て理想とせしむべし、否らずんば世の進歩を期すること極めて難たし。

偉人とは必ずしも名聲の嘖々たるを意味するにあらず、名の聞ゆると聞えざると最初より不問に附すべし、世には名の高くして實に愚なるあり、將た名の聞えずして却て智なるあり、名を以て實を推せば、謬らざる少し。苟も己れの務むべきを務めて、而して多少己れ以外に益する所ある、即ち稱して偉人とすべし、眞の凡人は己れの務むべきを務めず、成るべく勞せずして世を送らんとする者なり。務むべきを務めざるは人として有るまじきの事、宜しく鞭撻を加ふべき筈なるに初めより。凡人を以て居れと勸むるは、決して人を教ふるに適當なる途にあらず。眞の意味に於ける英雄豪傑も亦然り、名全く聞えずとも苟も己れの務むべきを務め、而して其の務むる所の直接若くは間接に世を益するあらば、之を英雄豪傑と稱して可、但だ英雄豪傑といふの直ちに人をして亂世の姦雄を聯想せしむるに因り、其の語弊を避くるが爲めに偉人を以て稱呼するの當れる見るのみ。百里に行かんとする者は九十里を半すといふ、九十里に半して可なりとする、即ち其の到達する所知るべきに非ずや。

體育に喩ふれば、英雄豪傑即ち偉人といふ猶ほチャムピオンの如し。總べての者をしてチャムピオンたらしめんこと固より能はず、又た必ずしも望ましき事にあらず、實にチャムピオンは一種の藝人たるやの觀ありと雖も、而も其の然るが故を以て之を稱揚せず、且つ人の然るを不可として之を制する、則ち個々體育を萎靡せしむるに終はらん。チャムピオンを褒揚し、或は賞牌を與へ、或は名譽の優勝旗を授く、而して之に依りて體育に多少の活氣を添へ、平素室内に蟄居し讀書に耽る者に自然に愉快を感じ運動場に出てゝ運動に加はらしめ、斯くして多數の者をして幾許か其の身體を鍛らしむるを得ば、體育の事稍く目的を遂せりとせずや。若し或は然らず、人々皆なチャムピオンたらんと欲して而も得ず、且つチャムピオンたらんと欲して學業を等閑に附するの不可なるを念ひ、乃ち運動を行ふの益なくして却て害ありとするに至らんか、爲めに全く體育を放棄するの結果とならん。能ふべくんば今日の如くにチムヤピオンなる一種の藝人を作ることなくして一般の體育を奬勵するの望ましとはいへ、是れ俄に望みて得べからざる所、若し己れの業とする所を等閑に附するなくして能くチャムピオンたるを得ば即ち大に慶賀すべしとす。

チャムピオンと云ふを以て人に望むは必ずしも不可なりとせず、英雄豪傑といひ偉人といふを以て一般の人を奬勵する亦不可ならず、況んや眞の英雄豪傑といひ偉人といふの頗る普通に言ふ所と趣を異にし、盛名を博するを要せず、又た亂を好むを要せず、各々其職に應じて盡くすべきを盡くすを爾か稱するに於てをや。現にヒーローなる語の最早戰場に偉勳を奏せる者に限られず、政治家に説教家に文學者に理學者に用ゐらるゝは人の知る所たり、英雄豪傑や、偉人や、之を排斥するよりは其解釋を善くするの優れるに若かず。

詞藻

# 女客

泉鏡花

## 第一

「謹さん、お手紙、」

と階子段から聲をかけて、二階の六疊へ上り切らず、欄干に白やかな手をかけて、顏を斜に覗きながら、背後向きに机に寄つた、當家の主人に一枚を齎らした。

「憚り、」

と身を横に、蔽ふた燈を離れたので、玉ぼやを透かした薄あかりに、くつきりと描き出された、上り口の半身は、雲の絶間の青柳見るやう、髮も容もすつきりした中年增。

これはあるじの國許から、五ツになる男の兒を伴ふて、今度上京、しばらく爰に逗留して居る、お民といつて續緣き、一蒔繪師の女房である。

下階で添乳をして居たらしい、色はくすんだが艶のある、藍と紺、縦縞の南部の袷、黒繻子の襟のなり、ふつくりした乳房の線、巾細く寛いて、晝夜帶の暗いのに、緩くまとふた縮緬の扱帶に蒼味のかゝつたは、月の影のさしたやう。

燈火に對して、瞳淸う、鼻筋がすつと通り、口元の締つた、瘦せぎすな、眉のきりゝとした風采に、しどけないなりも、目に立たず、繕はぬのが美い。

「これは憚り、お使ひ柄恐入ります。」

と主人は此方に手を伸ばすと、見得もなく、婦人は胸を、はらんばひになるまでに、づッと出して差置くのを、疊をづらして受取つて、火鉢の上で一寸見たが、端書の用は直ぐに濟むだ。

机の上へ差置いて、

「眞個に御苦勞樣でした。」

「はい〳〵、これはまあ、御丁寧な御挨拶痛み入りますこと。お勝手から此方まで、隨分遠方でござんすからねえ。

「些とも憚り樣なことはありはしません。謹さん、」

「何ね、」

「貴下、其の（憚り樣ね、）を、端書を讀む、つなぎにいつてるのね、ほゝゝ。」

謹さんも莞爾して、

「お話しなさい。」

「難有う、」

「さあ、此方へ。」

「はい誠にどうも難有う存じます、いゝえ、どうぞもう、どうぞ、もう、」

「早速だ、おや〳〵。」

「大分叮嚀でございませう。」

「そんな皮肉をいはないで、坊やは？」

「寢ました。」

「母は？」

「行火で、」

といつて、肱を曲げた、雪なす二の腕、擔いだやうに寢て見せる。

「貴女にあまへて居るんでせう、どうして、元氣な人ですからね、今時行火をしたり、宵の内から轉寢をするやうな人ぢやないの。鐵は居ませんか。」

「女中さんは買物に、お汁の實を仕入れるんですつて、それから私がお道樂、翌日は田舍料理を達引かうと思つて、序に其の分も、」

「ぢや下階は寂いや、お話しなさい。」

お民は其まゝ、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引つかけの端をぎうと撫て、輕く衣紋を合はせながら、後姿の襟淸く、振返つて入つたあと、欄干の前なる障子を開めた。
「此處が開いて居ちや寒いてしやう。」
「何だかぞく〳〵するやうね、惡い陽氣だ。」
と火鉢を前へ。
「開ッ放して置くからさ。」
「でもお民さん、貴女が居るのに、其處を閉めて置くのは氣になります。」
時に燈に近う來た、瞼に颯と薄紅。

第二

坐ると炭取を引寄せて、火箸を取つて俯向いたが、
「お禮に繼いで上げませうね。」
「どうぞ願ひます。」
「まあ、人樣のもので、義理をするんだよ、こんな呑氣ッちやありやしない。串戲はよして、謹さん、東京は炭が高いんですつてね。」
主人は大胡坐て、落着濟まし、
「吝なことをおいひなさンな、お民さん、阿母は行火だといふのに、押入には葛籠へ入つて、未だ蚊帳

があるといふ騒ぎだ。」
「何のそれが騒ぎなことがあるもんですか、又いつかのやうに、夏中蚊帳がなくつては、それこそお家は騒動ですよ。」
「騒動どころか沒落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。
何しろ、家の燒けた年でせう、あの燒あとゝいふものは、何ういふわけだか、恐しく蚊か酷い。未だ其の騒ぎのない內、當地て、本郷のね、春木町の裏長屋を借りて、夥間と自炊をしたことがありましたつけが、其の時も前の年火事があつたといつて、何年にもない、大變な蚊でしたよ。
けれども、それは何、少いもの同志だから、萌黄威の鎧はなくても、夜一夜、戸外を步行いて居たつて、それで事は濟みました。
內ぢや、年よりを抱へて居ませう、夜があけても、的はないのに、夜中一時二時までも、友達の許へ、苦い時の相談の手紙なんか書きながら、わきて寢返りをなさるから、阿母さん、蚊が居ますかつて聞くんです。
自分の手にや五ッ六ッたかつて居るのに、」
主人は火鉢にかざしながら、
「居ますかもないもんだ。
あゝ、些と居るやうだの、と何でもないやうに、いはれるだけれども、何爲阿母には居るだらうと、口

惜いくらゐてね、今に工面して遣るから可い、蚊の畜生覺えて居ろ、と無念骨髓でしたよ。未だそれよりか、毒虫のぶん〳〵矢を射るやうな烈い中に、疲れて、すや〳〵、傍に私の居るのが嬉しさうに、快さうに眠られる時は、猶堪らなくつて泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だつてねえ、よくそれで無事でしたね。」

顏見られたのが不思議なほどの、懷しさうな言であつた。

「まさか、蚊に喰殺されたといふ話もない。そんな事より、恐るべきは兵糧でしたな、」

「然うだつてねえ、今じや笑ひばなしになつたけれど、」

「餘り然うでもありません、しかしまあ、お庇様、どうにか蚊帳もありますから、」

「ほんとに、どんなに辛かつたらう、謹さん、貴下、」と優い顏。

「何、私より阿母てすよ。」

「伯母さんにも聞きました、伯母さんは又自分の身がかせになつて、貴下が肩が抜けないし、然うかといつて、修業中で、どう工面のならうわけはないのに、一ッ賣り二ッ賣り、一日だてに、段々烟は細くなるし、最う二人が消えるばかりだから、世間體さい搆はないなら、身體一ッないものにして、貴下を自由にしてあげたい、と初中然う思つて居らしつたつてね、お互に今聞いても、身ぶるひが出るぢやありませんか。」

と顔を上げて目を合はせる、兩人の手は左右から思はず火鉢を壓へたのである。
「私は又私で、何です、なまじ薄髯の生へた意氣地のない兄哥がついて居るから起つて、相應にどうにか遣繰つて行かれるだらう、と思ふから、食物の足りぬ阿母を、世間でも默つて見て居る。
一層忰がないものと極つたら、たよる處も何にもない、六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだらう。
やつ了はうかと、日に幾度考えたかね。
民さんも知つて居ませう、あの年は、城の濠で、大層投身者がありました。」
同一年の、あいやけは、姉さんのやうな頷き方。
「あゝ、」

（未完）



# ボン／＼錄

白也

凡々錄と漢字で書いても差支ないが、白狀すれば、實は僕はボン／＼時計なのだ、二階の柱に懸けられてから、既に三年たつ、其間隨分忠實にやつて來たから、正確だつていつも譽められるが、時には卷くのを忘れて置き乍ら、止まつたの、死んだのつて小言を聞く事もよくあるよ、然し僕は、何も僕の罪ではないのだから、其度々に、自分のおこたりを人の

罪にして了ふのは、人間の癖だなと思つて、獨て笑つて、居るばかりだ。

それよりか可笑しいのは、本年十八になるお孃さまだよ、主人も物好きに、この女を女學校になんか遣つてゐるが、何んになるつもりだか、近頃はしやれる事ばかり考へてゐて、本なんか一寸も讀まない、毎朝僕の前の處で、鏡臺へ向つて、諸肌を拔いて、兩足を廣げた變な坐りかたをして、白粉やら紅やらこて／＼と付けて、四五十分もかゝつて、妙な格好な、雨傘にも日傘にもなりさうな髮を結つて、一人で得意がつて居ると、下から奥樣が大きな聲て、何をしてゐるねえ――おそくなるよ！と怒鳴ると、ウーと鼻で返辭をしながら、上眼て烏渡僕の顏を見て、ほんとだ、最早八時になりやがる……て、何と云ふ物の云ひやうだらう、流石の僕もこの一言には閉口するよ、若しこれが寢過して、いよ／＼遲刻といふ段にでもならうものなら、それこそ大變、なんだ手前は、最早そんな時刻になつてしまつて、とう／＼今朝は遲刻ぢやないか、八角なおかしな顏をしてゐる癖に、生得意だよ……なんて僕の顏を攻擊する、その癖御自分のお顏にはお氣が付かないのだから、可笑しくつてたまらない、そんなに僕の針の廻しかたが早いつて、不平を云ふかと思ふと、日曜か祭日に、芝居見物の催しでもあらうものなら、今度はあべこべのお小言だ、まだ夜も明けないのに起き出して、夜明烏のやうに、があ／＼といふ騷ぎさ、朝湯にゆく、例の通りお化裝が始まる、お召更も出來た……となつた處まだ早過ぎる、獨て廊下をかけ廻つてせき立つてゐる、おやまだ七時だよ、こんなものろつ臭い時計なんか、ぼつこわして了へなんてお憤りだ、僕だつて那樣勝手な云ひ草を聞く時には、隨分小腹も立つけれど、人間の屑はこんなものだらうと觀念して、僕は時計の態面を維持して居る。

彼是する內、よい程の時刻となると、うれしい／＼つて雀躍をして、馬鹿にしてゐるぢやないか、丈けつまりの太つちよの癖に、伸び上つて僕にキツスを

しやうとする、如何に僕だつて、この體たらくには辟易せざるを得ない、僕は其時の面想を思ひ出すと、今でもぞつとするやうだ。

主人と云ふのは四十四五の、元氣のよいお役人だが、日曜の外は、大抵朝早く夜おそいので、お目にかゝる時は少ない、奥樣は四十ばかりの、色のあさ黑い、眼の小さい、その割に口の大きい、いやに落付いた變なお方だ、僕は元來こう云ふ女は嫌ひだ、尤も僕が嫌ひだからと云つて、主人が好きなのには致しかたもないが、もう少しはし〳〵したらいゝだらうと思ふ、と云つてお孃樣のやうに、はし〳〵し過ぎられても反つて恐縮する。

其外に婢が一人居るが、これは時々掃除にくる時逢ふだけだから、最もお近づきは薄いが、僕の横顏をはり倒すやうな配釆のかけかたをする處から、推測すると、澤庵も一年には餘程無駄にしさうに思はれる。

主人がお出ましになると、間もなくお孃樣も學校へいらつしやる、と殘る者は奥樣と下女君ばかりだ、それだのに奥樣は二階へ來て、主人の机の前に坐り込んで、下へは一向に行かない、机の引出しを開けて見たり、狀差の手紙を讀んで見たり、讀めもしない英書を開いて、書がないつて立腹つたり、窓から顏を出して表の方を眺めたり、路を通る人の格好を見て獨て笑つたり、針箱を出して縫物をしたりして頗る悠長な態度で時間のたつなんかには、我れ關せず焉と云ふ風である、この間に婢は下で何をしてゐるだらうかと、餘計なお世話だが、僕は大に氣がもめるよ、奥樣がこれでは、主人は幾年たつても、浮ぶ瀨はあるまいと、つく〴〵氣の毒になるやうだ、然し主人は一向平氣なものだ、尤も一日留守なのだから、この樣子は御存じがないからだらう。

軈て僕が十二時を知らせると、俄かに驚いて、然し乍ら悠長に、猫のやうな欠伸を二つ三つして、お婆アさんのやうに膝の上へ手を突張つて、ドッコイショの懸聲て、立ち上ると、前掛をポン〳〵とたゝく

のが癖で、お尻の回りをくるりと撫でゝ、改めて僕の顔を見て、確實に、耳が間違つたのでなかつたのを確めて、ストン〳〵と下へ降りて行く。

夫から何をするか知らんが、時々ガチャンと云ふ音を聞く、奥樣が二階に居る時の方が、反つて下は靜粛だ、●尤も其時は婢は寢てゐるのかも知れないが、扨て僕は、一人でこの一室を睨み廻して居ると、或日のこと向ふの疊の上に小さな光るものがあるのを發見した、能く見るとそれは縫針だ、あぶないなア全體お仕事を始める前と、お終ひの時に、恰も外科醫が手術をする前後に、ガーゼやピンセットの數を調べるやうな具合に、針の數を讀まないと云ふ事があるものか、若しこの針を、主人かお孃樣か、或は落し主の奥樣がふみでもしたらと、獨で心配してゐると、間もなく奥樣は又上つていらしやる、ふまなければいゝがと冷々してゐると、果然！ 痛い！ と云つたが、幸ひ怪我もしなかつたと見えて、いきなり拾ひ上げたが、針が落ちてゐる、あぶないぢやないかねえと云つた、其語調から見ると、何んだか針を叱つたやうに思はれた。

午後は午前と同じやうな事をして、夜になるのが常だ、尤も三時頃お茶を召し上る、下女を呼んでお芋かお菓子を買はせて、婢に一とつ遣つて、お茶を二階へ運ばせて、獨りでたべたり飲んだりする、其内三ッばかりは紙へ包んで、お孃樣へ殘してお置きなさるのだ、五時頃にお孃樣はお歸りになる、尤も學校の方は三時までなのだが、歸りに音樂の稽古に回るとやらでこんなにおそくお歸りになるのだ、時には六時過ぎてもお歸りがないので、婢を迎ひに派遣することも屢々だ、お歸りになると、すぐさま大きな異變な聲で軍歌だか長歌だか爲態のわからないものを怒鳴り立てる、御自分では餘程美聲のおつもりらしいが（音樂を稽古するなどゝ大膽な希望を起す處から見ると）僕が聞いては全でぬえの鳴聲だ、尤も僕も實はまだ、眞實のぬえの聲は聞いた事はないが、猿面蛇尾と云ふ、變な動物の出す聲だから、

定めて異變なものだらうと想像する、其想像のぬえの聲が、恰もお孃樣の怒鳴り聲に酷似して居るから妙でたまらない、それでもテナがどうの、サプラノがどうのと、御講義は中々お上手で、御自分ではベースが一番お得意だとおつしやる、若し乳鉢がテナても歌つたら、お孃樣のベースは至極結構だらうと、僕は熟ら〳〵考へてゐる。

聽て燈火頃になると、主人がお歸りになる、前にも云つた通り、四十四五の元氣のよいお方だ、手かばんを机の上へポンと投り出すと、洋服のズボンを一寸つまんで、ぐいと引き上げて、大樂坐をかくと、今日の新聞を取て、ずらりとよむ、この間凡そ五分位、隨分早い讀みかただ、思ふに大きな字ばかり讀むのだらう、すると其側に、奥樣もお孃樣も坐り込んで、何が奈何したの、誰が何をしたのと云つて、一日の出來事を、交る〳〵悉皆報告する、隨分愚にもつかない報告が多い、例へば魚屋が來て、比目魚は四錢だと云ふから、三錢五厘にまけさせたのなどと云ふ類だ、然し主人は、何んとも其報告に對して批評は試みない、何んでもかでもフン〳〵と云ふばかりだ、主人中々悟つて居るなと、いつも僕は感服する。

主人は中々の藝人て、和歌もよむし、發句もする、特に平家琵琶が最も得意だ、日曜には朝からお友達の方が來て、午前は和歌會と發句會、午後は琵琶の御稽古て、夜の更ける迄大騷ぎだ。

集つてくるお友達も、皆藝人揃ひて、半日掛つて作り上る歌と發句との數は決して少數でない、然し失禮だが、歌らしいのも發句らしいのも誠に少ない、無論和歌は古今調で發句は月並調だ。

琵琶は皆主人から敎を受けるのだから、上手なのは元よりない、主人も御得意がる程には、僕には感服は出來かねるが、然し外の人たちよりは、遙に感服してもよいのだ、其下手連の内でも、頭の禿げた其癖眞黒髯のお方（能く見えるお方だがお名前は知らない）の聲と來たら、實以て奇妙不思議なものだ、

どう聞いても呆法駄羅經と祭文を混合したやうて、それがまた外聞もかまわず、とほうずな聲を出すのだから、たまつたわけのものぢやない、蓋しお孃樣のベースに似て非なるもの、工場の汽笛の如くならずんば、即ち飴屋の太鼓に近きものである、然し當人は中々眞面目で中々熱心である、主人も眞面目である、居合せる人々も亦眞面目である、よくこの聲が可笑しくもなく、あんな眞面目な顏をして、拵へられたものだと、僕は獨て敬服し乍らも、針をよつて笑はずには居られない。

僕だつて可笑しい位は、奈那(どんな)にもしんぼうするけれども、これが山の中の一軒家ではない、御近處のお方の御迷惑は容易であるまいと思ふと、早くこの聲を止めさせる工風をしなければ、僕の罪惡のやうに思はれてならぬ、と云つて、時計の體面を穢すやうな事をしてはならぬと思ふと、僕も實に氣が氣でない、唯万事を全能の神にまかせて、心に祈をさゝげてゐると、軈て九時を打てといふ默示がある、心得て早速、思ひ切つて大きな聲で、ポン／＼／＼と九ツ打つてやると、流石の琵琶師も耳へ入つたと見えて、僕の顏を見て、今度は自分の持つてゐらつしやる、僕の友達（時計）を出して見て、成程と云つたやうな顏つきで「實に時の經つのは早いですなア」なんて、長い間近處へ御迷惑をかけたのは、一向にお氣がつかないと見える、すると主人は、お手をパチ／＼と鳴らして、お茶をお命じになる、又三十分許も、自分勝手な議論や、我儘放題な世評がある、軈て僕が、九時半だとポンと鳴ると、俄かに身繕ひして、漸くお御腰(みこし)をかつぎ出す、すると主人は、大きな欠伸をし乍ら下へ降りて、早速お寢(やす)みなすつたらしい、奥樣が來て、お茶道具もランプも持つて降りて了ふ、いよ／＼これから僕一人、この室で徹夜するのだ、僕の職務も中々容易でない、僕等に較ぶれば、人間などは實に横着千萬なものだ。

（をはり）

# 歌

尾上柴舟選

○　村田愛美

聖冠の眞珠のひかりうつくしう虹と現ぜば花も默ざし

天くらう地はた寒き荒野原誰れか牧者の鞭取るものぞ

盤こめて堅の手てらす春の宵塑像つめたう灯かげに榮ゆる

天の扉に鎚らむは小さしされどまた地にふさはぬわが歌の譜や

日毎日毎天の榮よぶわれながらこゑの低さに身はもだえぬる

○　林漁村

あめの日も唄に麥ひくまめ男妻とはいはて名を呼びにけり

夕鐘は母なき里の春おほひ孝ならぬ子が國出でゝ行く

草にぬるや夏花まじる夏木立木立のひまの湖みて暮れぬ

○　春野鹿子

むらさきに波をあやどる蓬萊の島かげゆるや春のあさじほ

夢ならであひ見がたなの野よ人よ春はいく世をめぐりめぐるも

ほゝ笑みて袂わかちじ春の夜の夢守らせむ緋牡丹のはな

砦守る人を泣かせてたが行くか小雨のよひの山ほとゝぎす

○　岡田道一

行く春を森なつかしみ分けて入れば椿は落ちぬ胡蝶の塚に

みんなみに小さき國ありうるはしき牡丹は王孔雀は少女

○　東　薫

姉の子はをみなと云ふに嬉しくてまづ編みそむるよだれかけかな

○　鹽谷芳谿

薄月夜笛に興がる公達の狩衣しろう散るさくらかな

○ 三浦桂園

雲雀なく野のたそがれの鐘のおとに母と二人のゆふべをぞおもふ

○ 小谷寒鴉

さくら花散りてあとなきみ社にかなしき人の魂まつりする

○ 啞空

去年ことし神の愛子の惡戯やおもちやあつめていくさし暮らす

○ 田中靜湖

あけがたの天のみ國の花の野を詩誦しゆくと夢に入る君

朝の野に詩歌の鳥のつどひ來て君にをしへしうたやそも何

詩にも痩せ歌にも痩せて春をこもる草の庵のうぐひすの聲

春やいづこ君と二人の春やいづこ野なる一人に夕日つめたき

○ 池田松峰

さまよひて角笛吹けば朝の森ひと葉ひと葉の光をかしき

戒をえて髮剃りおとすゆふ窓やあゝ西空の雲はくれなゐ

歌にうむ春の日永を髭まげてわれによりくる命婦のおもと

○ 大福伏峰

草餅をたうべに來よと文くるゝ伯母ひとりほしき桃の市川

ぴくにをどる鯽のあぎとを吹く風の春やはらきや葛飾の里

傘を干す家二三軒かぎろひて小岩の里に人畑を打つ

青葉漏る初夏の日かげは椽を射て文かくによき石竹の宿

▲歌募集 六月十八日限り、東京本郷區四片町十番地ほの部尾上柴舟宛の事

## 豆の花　繞石選

花豆や飽かぬ稽古の馬鹿囃子　初聲

花豆に種菜莖立つ日頃かな　同

豆の花小徑牧舍に通じけり　同

豆の花鄙の染屋の干し場かな　同

豌豆の花に日和や千住在　同
大根は種となりけり豆の花　青龍
たて込めて蠶飼の家や豆の花　同
馬茶屋の小便桶や豆の花　五選
豆咲いて葱は坊主となりにけり　同
鷄に籠を伏せけり豆の花　翠藹
一畦は豆の花なり麥の畑　圃外
豆の花垣破れたる草家かな　英子
賴む手のゆるき砂地や豆の花　沛亭
畑隅の小さき墓や豆の花　黄村
暮を出る寺門の脇や豆の花　松溪
豆の花海見ゆる家の畑かな　失名
桑畑や桑のとぎれに豆の花　石羊子
裏門を出て道狹し豆の花　白江
豆の花點々として麥の中　四緑
鞘豆や花まだ蔓の末近く　鳴子
豆の花花に似た蝶飛んで居る　奇一
豆の花亂れし蔓を括りけり　苦風
豆の花社日の雨に盛りかな　蝶衣

選者吟

駒込や庭の裏畑豆の花
外厠窓にからみて豆の花
畑限る竹垣低し豆の花
麥畑へ通ふ小路や豆の花
豆の麥つくる程畑廣からず
麥を吹く風爽かに豆の花

七月分課題　夏野　六月十八日限
八月分課題　氷水　七月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事

文士初對面錄(その十六)　天中天

▲後藤宙外氏(ノ二)　一體此人は兩刀つかひて、美しい小說を書くかと思へば、また堂々たる論難もやる、これが爲めに、以前は小說家として遇せられて居たが、今では寧ろ批評家の地位に立つて、此人が小說を作るといへば何となく素人のやうに考へる人が多い、而も氏の最も力を注ぐものは小說である、僕の遭つた時『どうも時文なんぞ書きますと、小說の筆をとつた時、空想を妨げられる傾があります、尤も以前は、論文を書く爲めに、决して小說が拙くなるものでないと考へて居ましたが、それは絕世の天才にのみ望み得べき事て、我々のやうなものは經驗上兩刀をつかふのは不利のやうに思ひます』とて今後は盛んに創作を出されるやうの話てあつた。



# 評論

## アンチセミチムズムとジオニズム

文學士　煙山專太郎

### (下)ジオニズム

ユダヤ人の國狀、一方に於ては實に斯の如くなれば、歐米各地に於ける其同胞の間には、此等貧民の救濟を目的とする諸種の團體あり。パリに設けられたるラリアンス・イスラエリット・ユニヴエルセルの如き其一に屬し、獨り歐米に於ける同胞を賑恤するに止まらずして、アフリカ、アジア等にも及び、就中、アビシニア及支那に於ける同民族勞働者の慘狀を改善せんとせり。ドイツ、オーストリア、及英國等にも亦此種の會合あり。英國に存するものはアングロ・ジュヰッシュ・アッソシエーションと稱す。此等の外に最近時に至りて俄に有力となりたるユダヤ人の運動あり。之をジオニズムの運動と稱す。これ新にユダヤ民族を糾合して一國土を建立せんと欲するものにして、實に故ドクトル、テオドル・ヘルッルの首唱する所、彼は筆を揮て、論說に、小說に、戲曲に其所見を唱道し、ヘブライ文のエレズ、イスラエル紙を主管し、又ドイツ文の「世界」新聞にも執筆して此說を披瀝したり。パリに於ける有名なるユダヤ文士、マクス・ノルダウを始め、英國にもサー・フランシス・モントフィオル等熱心なる贊成者ありて、此說は忽にして世界的の勢力を得るに至りたり。故バロン・ヒルシュの首唱にかゝるパリの「ユダヤ人殖民協會」も亦此主義を實行せんが爲に設けられたる者にして、トラスト組織をなし、虐壓の下に懊惱するユダヤ人を移して南米アルヘンチナ共和國内に一の殖民地を建てんとするを以て其目的とす。此計畫は大なる成功を博し得たりとすること能はざるも、兎も角も、協會は現に同共和國ブエノス・アイレス・サンタ・フエ及エントル・リオスの三州内に三十一万八千エークルの田畠を有しつゝあり。こゝには十四のユダヤ人殖民地

あり、其十一はエントル・リオスにありて一九〇一年一月の調査によれば、其人口、八千四百に及べりと云へり。曾て解放黑奴の故郷アフリカに歸らんことを望みしや、アメリカの慈善家の地をリベリアに得てこゝに彼等を移し、一小共和國を建てしめたる事あり。こは一八二二年の出來事に屬し、其成績頗る良好なりしかば、ヒルシュ男は思ふに之に傚ひて窮民をして自主自由の生活を營ましめんことを欲するに至りしならむ。ジオニストの新殖民地として擇ぶ所は、南米の外彼等の故土たるパレスチナあり。されどパレスチナを彼等に與ふる事に付ては、熱心なる基督教の信神者は皆反對せり。或は又モロッコの地の最、可なるべきを說くものあり。議論紛々としてもとより未だ決着する所あらず。彼等は一八九七年初めて第一回の大會をバーゼルに開き、ロシア、ルーマニア、ドイツ、オーストリア、ブルガリアを始め、英佛米伊の諸國及パレスチナ等、百十七の會を代表する一九七人の代表員之に會せり。第二回、第三回とも亦翌年及翌々年に於て同地に催され參列員及び之が代表する團體の數次第に增加せり。一九〇〇年には、大會をロンドンに開き、一九〇三年にはバーゼルに開きしが、此バーゼルの會に於ては、英國政府提言するに、英領、東アフリカなるウガンダ鐵道線の一地帶を彼等に貸附し、英國政府監督の下に彼等の自治殖民地を建つるを許諾せんことを以てせるあり。ジオニストの領袖連は、大概、此好意に贊せしかど、ロシア代表員は、却てパレスチナを得んことを唱へて反對せしかば、會は兎も角も、九人の委員を東阿に派して之を見分せしむることゝなしたり。ユダヤ人の殖民の主義は、ヘルッル一度之を筆にしてより、其宣傳の迅速なる、ロシアにては、第三大會の時、八七七の團體なりしもの次回に及びては一〇三四となり、米國には一三五あり、ブルガリアに四二、英國に七五あり。英國のジオニズム運動者は一万五千を數へ、此主義を贊助する者三十二万に及ぶと傳ふ。是に於て此等を統一する大團體を構成するの必要を生じ、之によりて一八九八年には、英、米及アルヘンチナに、一八九九年には南阿、ブルガリア及オーストリアの各地に大聯合の組織成り、此等は獨り殖民事務のみならず、一般に地方ユダヤ人の啓蒙事業に從事し、學校を建て、文庫を設け又病院を設くることを司れり。運動を統率せん爲又大運動委員の設けありて、これ等は、各地方の團體より選任せらる。此外、經濟方面の一機關として一八

九八年春、ロンドンに「ユダヤ人殖民トラスト」なるものの建設せられたり。一株一磅として三十万株の豫定にて、既に應募額は四百万フランに達せり。今や全世界のユダヤ人の六分の五は、相率ゐて此殖民主義に贊し、他日擧げて一の新ユダヤ國を建つるの時あらんことを曉望しつゝあり。

ジオニストの文學も近時日に益々盛況を呈しつゝあり。キーン發行の世界新聞及エル・プログレソ、パリのレコー・ジオニスト、シカゴのハッチヤは皆運動の大中央機關紙なるが、此外、私設の機關紙亦尠からず。プラーグ、レンベルグ、ハンブルグ、ミュンヘン、ベルリン、ロンドン、ペテルブルグ、ワルシヤワ、ブエノス・アイレス、アムステルダム等の諸要地には、皆其一二の發行を見ざるはなし。ジオニズムの創唱者たるヘルツルに著書「ユダヤ國家」、小說「パレー・ブールボン」及「舊新國」等あり。外に戯曲「新居住地區」あり。こは一八九九年の作にかゝり、一八九八年出版のマクス・ノルダウが戯曲「ドクトル・コーン」と共にユダヤ人たる其主人公の一基督教徒と決鬪して果つるを描きたり。蓋しユダヤ人の其學問的努力に拘らず、將た其正直なる勞働にも拘らず、彼等にふさわしき位地待遇を享くる能はざるの現狀を憤慨して、異國民との和合の到底不可能なること、斷然之と絕て他に其居を卜するの勝れるに如かざることを寓意するものなりしなり。一昨年公にせられたるヘルツルが「舊新國」は、ユダヤのユトピアを描寫したる小說にして、万國のユダヤ人がこの國土に合集して、其工藝は驚くべく進步し、學問美術は榮へ、正義は公行せられて些の凝滯なく、民主共和の政體によりて個人の心意は完全なる發展を遂ぐるてふ極樂淨土を想像せしものなりと云ふ。此等諸文豪の作を外にして現時に於て操觚の士のユダヤの理想鄕を寫すもの甚多し。

ジオニズムの運動は此の如くに蔓延したり。ユダヤ人の習俗にして容易に推移せず、其貧窮にして救助せらるゝの目途なき、今日の如くにては、彼等を他の廣漠人なきの地に移すの得策なるを思ふに至るべきは、これ自然なり。此企の可なるは、如何にして何人と雖敢て之を拒まざるべし。只困難なるは、如何にして此幾百千の貧民を移すかと云ふの問題にあり。吾人は如何にも多數のチェルケッス人のカブカスよりしてトルコに轉ぜし事や、數千のアイルランド人の米國に赴きし事や、將た多くのドイツ人の西ロシアよりして南ロシアに移住せし事

例を有するなり。されど此場合に於ては移住民は、新殖民地に生計する、舊地と同様の職業を以てせし者なり。ユダヤの仲買、問屋、如何に其事務に老巧なりとて新殖民地は果して彼等に授くる丈けの充分なる職業を有すべきか。アルヘンチナにまれ、パレスチナにまれ、北阿にまれ、東阿にまれ、新來の移住民に要するは、第一に農民たるの資格にあるなり。然るに、パレスチナにありし往時のユダヤ人が善良なる農民たりしに拘らず、其子孫は、漂浪、日、久くして殆んど田野の勞働を忘れ、今や之に適せざるものとは化し去りたり。彼等多く四肢の勞力によらずして其口を糊せんことを欲す。殖民の事、恐らくは著き成功を望べからざるなり。吾人はこゝに至りて此編の冒頭に揭げたるタキッスの言を回想す。ユダヤ人は果して常に憎惡の心を以て彼等以外の世界に臨まんと欲するものなるか。これ先天の性情か。將た外來の刺戟の之をして然らしめたるかと。眞理は思ふに、此最後にあらむ。彼等浮浪の生活を營み、曾て一地に定着せず、到る處、四周の窘迫を被る。心あるもの頑となり、固とならざらんとするも得べけんや。况や彼等は自、エホバの眞子たるを以て任じ、其歷史傳說を以て竊に傲りとなすものなるに於てをや。彼等の執拗にして多く移らざるは、歐洲人民の多年、彼等を虐遇せし結果なり。彼等とても、もとより缺點なきにはあらざるべし。されど、これ等の缺點を助長し、發達せしむるに於て力ありしは歐人其者にあらずや。獨り、一切の責をユダヤ人に課して超然として我不關焉を裝ふべきにあらず。ユダヤ人解放の語は、幾度となく世の所謂、志士仁人によりて繰り返されたり。されど、これ多くは論理上の立論のみ。解放の正理なる、誰か之を知らざらむ。惜むらくは、彼等は、感情の方面を無視し、友愛の眞情熱意に於て之をせざるなり。今やユダヤ人善後の問題は一の國際的問題となり、此等薄命なる多くの民人の、相携へて次第に東洋の地に新家鄉を求めんとするものあるに至れり。此時に當りて聊か其來歷を詳にするも亦無用の業なりとせざるべし。これ此一編を草して概狀を紹介せんとする所以なり。(完)

▲正誤　前號アンチセシチズムはアンチセミチズムの誤、今を去ること二十年は二千年の誤なり

# 家庭と儀式

△子貢欲レ去二吿朔之餼羊一子曰、賜也爾愛二其羊一我愛二其禮一といふ事が論語にある、吿禮の將に廢れんとするを惜しまれた語である、自分は此禮――茲には儀式が――我國の家庭から、次第に廢れ行くのと日暗して、實に歎がはしい傾向だと考へる

△儀式といへば形式である、無形の精神を形に現はしたものである、一面からいへば兒戲に等しい甚だ下らないやうに感ぜられるか、之が人生に與ふる敎訓の偉大なることは思ひ半に過ぐるものがある、自分は今こゝには敢て硏究的態度を取つて、儀式の意義やその齎すところの結果に就いては云はぬ、只之れが人生に至大至高なる敎訓を與へるとだけを信ずるといふに止める

△近來儀式の廢つたことは甚しい、小兒が生れたからといつても、赤いお飯をふかして向ふ三軒兩隣へ配つたら、後は朋友親戚へ葉書の一本で事を濟まし、又緣者朋友も同じく葉書でツイ通りのお祝を述べる位が關の山である、結婚式も、自由結婚といふ無趣味な事が流行り出してから一層簡便になつて、中には何時夫婦になつたのやら、いつ小兒が出來たのやら、親しい友達でさへ一盞を吃せられるやうな夫婦もある、されば高砂や尾上の松の謠を聞くやうな祝言の盃なるもの絕えて見たこともないやうになつた。

▲隨つて親の命日を忘れ、何回忌何週年の法事供養も營まぬが多く、またく營めば親の三年に祖父の七年を加へ、母の十三年も取越して、兄弟の何回忌も一緒にし、先祖代々の精靈を一時に召集して、而もそれが只つた一日の法事供養、これだけの佛なり神なりが集まる事なれば嘸立派な法會でもあらうと思ひの外、壇那寺の住持に近い處の緣者が一人二人、凡そ一二時間の後には式も墓參りも何もかも濟んで了う、呆氣ないといふも勿々愚かなり

▲かくの如き大儀式でさへ然ふである、況して其他の小儀式に至つては、全く其影をも止めぬが多い、年老染みたるといふやうなれど、昔はさうでなかつたといふ、冠婚葬祭は申すに及ばず、正月の元日から一年中に於ける小さな儀式の數々が、先例に依り、家法を考へ、嚴めしい處は何處までも嚴めしう、樂しい處は何處までも樂しう、いとも鄭重に行はれたものであつたといふ、自分等が小供の時分を想ひ起して、一番樂しい嬉しいと思つた印象の強いのは、正月に晴衣を着て、早朝儀式の席に列ること、家内の者が重々しい佳儀の述べやう、それから雛祭りの可愛らしい、五月幟のいさましい、七夕の美しい、その儀式に伴ふいろくの小說的空想、九月は菊の酒をいただいて、親類緣者の往復等、かゝる儀式に先だゝれる家庭的のものに多かつた、而してこれが爲めに薰陶されて、道念を高め、人格をあげたこと、實に少々でないと自ら省みて信ずる場合が多い。

▲要するに家庭に於ける儀式が次第に衰へて行くのは、子女敎育の上からも、家庭の和樂といふ上からも、非常に注意すべき問題であると信ずるから、こゝに此問題だけを提出して識者の一考を煩はすのである。

(烏有氏)

# 雜誌の編輯と新聞の編輯に就て

松　井　柏　軒

一雜誌の主論主張は、常に思想界のあるものを捉へて

評論すると共に、又時事、殊に政治、軍事等の評論を廢すべからず、今や曠世の大事業たる征露役の央にあれば也

一能く新聞と雜誌との區別を明白にするを要す、恐見を以てすれば

新聞紙は速報を尙ぶ故に事實の確否を顧みるの遑無きと往々にしてあり、隨つて總ての記事論評共に精査細討を缺かざるを得ず

又粗雜なるものと雖も忍んで記せざるを得ざるとあり必らず四頁六頁乃至八頁の新聞を作り、事無きが故に餘白を存するを得ざれば也

雜誌は之に反す

必らずしも報導の早きを要せず故に精査細搜して其の詳密ならんとを要す、而かも紙數限りあるを以て粗雜のものを避くるを要す

論文の如きも新聞は一應日々の出來事を略評するに止まるも雜誌は一ヶ月中最重要の問題を把て縱橫に論評し又思潮の傾向を觀察して之を評論する餘暇あり

雜誌の記事は總て詳かに、且つ確實なるを要す、新聞紙の載せ得ざるが如き詳密なるものたるを要す

而して趣味と實益とを併行せしむるを要す

例せば社會的に趣味ある記事と共に宗教文藝實業等に精査したる材料を供給すべし。小生は多くを知らざるも慈善事業又は實業界には或る事項を調査したる報告等屢〻出づるも僅かに蒟蒻版に止まるあり譬ひ印刷さるゝも公表されざるもの多し、雜誌は此等の全文を揭ぐるか又は其の要領を拔摘するを要す

斯くして新聞紙の短所を補ふに雜誌を以てするを得べし然らずんば雜誌は到底新聞紙と兩立し得ざるべし

## 文士初對面錄(その十七)

天中天

▲柳川春葉氏　紅葉山人が如才なかつた所爲(せい)か、其門から出た人は皆如才がなくて交際が巧みだ、その上大家振つたり人を瞰下ろしたりするやうな事は決して爲ぬ、何處までも作家らしい。おとなしい、愛すべき風のあるのは、今時珍らしい。そのうちでも春葉さんのお如才なく(ことはつて置くが如才ないとは勿論よき意味に於て)、人を外(そ)らさぬ交際ぶりと來たら、うら若い女なんぞは近寄らぬ方が危險がない、男振りも好い、小說も旨い、三拍子揃つては甚だどうも何てある。聞く處によれば、紅葉山人のお使者として、滿足に其役目を勤める辯才のあるのは門人中て此人が第一てあつたさうな。

# 文藝時觀

## 五月文壇

孤村主人

花は了然梢を辭して了つて、見渡す限り青葉影、野には麥が成熟して、眠氣を催さす樣な心地よい風が吹いて來る時、窓の下で寢轉んで小説を讀む程人生に愉快な事はあるまい。日本の多くの作家は此の月も勉勵して吾人に此の愉快を縱縱さして吳れた。先づ一番に眼に附いたは

◎新小説の高安月郊氏の血染の梅と云ふ脚本だ。全曲三段に別たれ、其の一段が二、二、三とに直に別たれて居る。初一段の一が美術の展覽會二が櫻木天峰と云ふ美術家である劇主人公の寓居。第二段の一が櫻木天峰の製作を購ふたのが因緣となり、一つの緣を結ぶ中富平右衞門の住宅の場。其の二が築港棧橋の場で、櫻木天峰は兵士に召集されて中富の家に宿る事となり、其處を立出で乘船する場なり。此の場にて劇のヒロインなるおとよは戀人の船の浪間に隱れ行くを見送りて海中に身を投ずるなり。第三段の一は夢の場より引續き劇主人公の捕はれとなり居る狀況を見す、二は二百〇三高地奮戰の場、其の三は同裏手にて劇主人公の悲壯なる最期を見せるのである。

此の劇は二つの事柄が重なつて成立つて居る事となる。一つは個人の自由と云ふと可笑しいが願望——もう一度云換へると人間が自己の心靈を自覺した心が、國家の命令權と鬪爭する心的現象と、もう一つ戀愛と事業との鬪爭を見せて居る事なのだ。然し此の作家は初めより個人の自由よりも國家の權力を重く見せて居て、劇主人公に其れに反抗さす樣な擧動を少しも見せて居らぬ。個人は全然國家の命令權に絕躰的に服從せねばならぬ事として居るので鬪爭と云た所で、云はゞ少しばかりの煩悶で、而も其の終りに至つては劇主人公は此の煩悶など曖昧の中に葬つて居る。其れは免れ難ない境遇から起つた心念にしろ此の曖昧な作の空虛に戀を入れて作者は彌縫して居る彌縫して居ると云ふ言は穩當ならぬかは知れないが僕には然うとしか思はれない。

若し此の作家が今一段と劇主人公の藝術に對する渴仰心を深くし、其の煩悶を深くしたならば、此の悲壯劇は更に〳〵光彩を放つて、全般にもつと引締りが出來て、高い調子で成功したらうと思ふ。要を云へば題を選んだ割には全く曲線的に過ぎて居る。今少し直線が欲しいんだ。作者は末段が戰爭であるから、直線は餘りあるだらうと云ふかも知れないが其れは舞臺面の變化にのみ苦心して居る人の言で、眞實の悲壯劇を解して居る人の言で無いと僕は答へやう。思ふに此の作者は現今の舞臺、現今の俳優と云ふものを餘りに多く頭腦に置き過ぎたのではあるまいか、僕は此の作者が東歐の劇作を深く味はうて居ると聞いて居るから此の言を爲すので、現今のぬえ的の脚本が屢々舞臺に演ぜられるのには僕はうんざりして了つて居るから態うも云んだ。第三段の夢の場で戀人を天女にしたのはいゝ思附て、其の美くしい振事も作者の働きは充分に認められる。然し主人公の煩悶に移つて正面鳳凰堂の壽判諸佛像を見ての表白は、今一息だと思ふ。何としても滿足が出來ない。ヴエレスチヤギンの畫を上から下すのは敬服す可き思附きだが、僕の云ふのは此處だ。全體の調子と釣合はぬ。若し演ぜられたならば、劇は飽迄曲線的でなければならぬと思つて居る、氣の弱い部下の多くの劇評家は一番に此處を攻擊

するに違無い。此の畫を見せるにはもつと剛い所が欲しいんだ。もう一つ云いたいのは劇中に顯はれる人物に性格の無い事だ。おぬいもおとよも同一の性情で、牛右衛門に源吉も同一だ。或は之は無理な注文かも知れないが、この劇が傑作でないと思はれるのは此の點からだ。猶私が不感服なのは、表白が一躰に引締らぬことだ。髙安氏は或は普通の世話物のつもりで書いたのでは無いかしら、もし世話物で書いたとすれば夢の場の重くるしい事は全然調和を缺いて居る。悲壯劇なのだらう然らば表白の中に重味ある言葉を缺いて居る。所詮場に上つて攻撃は免れず、傑作とは云はれない。

◎泉酒汀君の大和錦讀んで見たものゝ何が書いてあるのか薩張り解らないと云つては濟まないが其の意のある所を解するに苦しむ。阿兄の云はるゝ通り小說は何も理屈を述べるものぢやない。又然う一々詩的〳〵つて詩がるのでないとしても之は餘りに酷い。何も這麼に文字を盡さずとも活版職工を煩はさずとも、紙を盡さずとも、或る所に女にのろい秀夫と云ふ男があり、其の戀人は龍子と云てと全く新聞の三面雑報體に書いて貰いたものだ。酒汀君は未だ作家としては年が若くて居るのに何故這麼に研究心が無いんだらう。人生の中に愛情の光輝をのみ見て其れを書き顯はさうと思ふなら、何としてももつと深く見、深く考えて書かれば作家としての存在は許されぬ。普通人も見得る事が出來、普通人も書得る事が出來るものを書いて居るのでは、其れは特別名章の小說家でなくて只の文を綴る人なのだ。普通人の見得る書得ると云ふ言葉には語弊があるが、つまり餘りに輕く平凡と云ふ意味なのだ。敢て此の作をのみでなく近來の君の作風を見ては、ドラマチストとしてもアイデアリストとしても立てない樣な氣がする。一つ緊褌一番振ひ給へ。

◎宙外君の泡沫人は僕は評すまい。其れは僕よりも宙外君自身此の作の價値を知つて居らるゝと思ふからだ。僕は思ふ宙外君は製作に就いて誤解した意見を抱いて居らるゝのでは無からうか。昔の闇のうつゝなどの製作を思ふと僕は宙外君の現今に就いて疑を抱かれば置かれない。鏡花君は天鼓紙上で此の頃は一般の作風が理屈ぽくなつて否けないと云つて居る。此の否けないと云ふ事は甚麼根底があつて云はれたのだらう。自分の作風とは一致しませぬと云ふ事ではなからうか。主張や理屈がある小說は何故否けないか、もつと悉しく云つて貰は無ければ解らない。理屈や主張をもつて藝術化させれば否けないと云ふのか、藝術化さしても理屈や主張は絶躰的に否けないと云ふのであらうか。何も宙外君の作を評するに鏡花君の言を持つて來ないでもいゝんだが、氏と鏡花君とはもつとも親しい仲だと聞いて居るし、其れに此の說と宙外君の此の頃の傾向と一致する樣に思はれたから、此處に揭げて見た譯なのだ。

◎花房柳外君の平等主義評なし

◎文藝倶樂部は卷頭に遊佈園の例の時代物を揭げてある。其の他の作品は僕は眼を通したが、何故編輯者は此の勢力ある雜誌に今一段小說に注意を拂はないのだらう。賣らんが爲めには俗受け專一と云ふが之では俗受けてもない。奈何してもいつも小說は新小說に一籌を輸する。其の他の時文や活社會、演藝界、新家庭と遙かに新小說を凌駕して居るではないか。只ほんの少しの注意、新らしい有望な作家を迎へる事なのだ。有望な作家を迎へたなら、其の作家が生きる樣迎へて遣られればならぬ。原稿は賣物買物と云ふ風ならば雜誌の生命は消えて了ふ樣に思ふ。何でも無い事だが之れが人氣に關するので、世人が小說は新小說を重じて見るのも新小說の編輯者が此の理由を知つて居るからだ。くれ〴〵も硯友社の先輩石橋思案氏の一顧を希ふ

◉大鵬は久々て江見水蔭氏の砧の里、中島孤鶴君のクラリッサの飜案、

其れから勝岡舟人の寛の曲と三つを掲載した。寛の曲は事實談らしく書いてあるが恐らく飜譯であらう。雷鳴轟く中で寛の曲と神の曲とを彈ずる邊り實に面白く讀まれた。之が眞實創作であつたなら僕は佳作として賞讃しやう。クラリッサは未完なれば完結の上に評さう。

◎水蔭氏の鮎の里は水蔭氏近業中の白眉の作で慈う云ふ風の作をすると昔の全盛時代の江見君が思出され、此の作家で無くば見られない美くしい情緒が味はれる。時々慈う云ふ風の作を見せて貰ひたい。水蔭君は或は云ふであらう。こんなのは刪れたもので直ぐ作されると白眉の作だなどゝ云つたものを却つて罵るかも知れないが、若し那麽言を發するのなら、氏は自身の長所を余く自覺しないと更に言葉を僕は返さう。只例の何とか曆だの、貝塚だのとは云はなくとも濟むんだからなる可く願下げにして貰ひたい。隨分鼻について居るからね。もう一つ云ひたいのは末段の鼓に於て自分は益々入水の覺悟が固くなつたのには今一段の力が入らぬ樣に思はれた。

◎見渡す他の雜誌の明星、白百合、七人、帝國文學にも之と云つて目立つたものは見當らない。白百合の岩野の泡鳴君の闇の橫木は氏は力を入れて物されたのであらうが慈る神秘めいたものは氏の材では無い樣に思はるゝ。吉田白甲君のペエトオフエン詣では相不變面白い、明星の蒲田泣菫氏の鷲と大原女、氏は此の頃ひどく調子に重きを置く樣になり之にもさつさよいこの……とある之の價値に就いては僕は云分があるから改めて述べやう。馬場孤君蝶のうきくさは餘り小說めいて居て其れて居て捕捉し難い盡し失敗の作だ、其れよりも夜半の街の方が成功して居る殊に初一句に大なる力がこもつて居る。相不變晶子女史の短歌の妙なるに至つては敬服する。何と云ても明星誌上の花だ

（完）



漫評

# 在韓同胞の家庭

在京城 伊藤千助

韓國に於て一家を構へて居る、我同胞の家庭は概して、腐敗、墮落、不和、無味、無情である、之れは社會問題の上より見るも、亦韓國經營の上より見るも、實に憂ふべき現象であると思はれる、而して此の如き不完全なる家庭の原因は、即ち家庭の主人公とも云はるゝ妻と及び夫の心得違ひより出來るのである、余は操觚者の任務として、世人の注意を促して斯る不完全の家庭の改善を計る爲め、少しく其現狀を述べてみやうと思ふ。

先づ在韓同胞の夫婦關係より申ますが、韓國に於て一家を構へ家業を爲し居る者の夫婦の間柄は、法律上の手續を經たる者は稀で、其多くは野合結婚に依つての出來合夫婦である、所で在韓同胞の內に、一種異名

の『朝鮮女房』と云ふ妙な家族がある、之れは即ち野合結婚の出來合夫婦の妻のことである、此新家族の出來るのは、同胞が渡韓するの目的が永久的で無くて、金を儲けば歸ると云ふ考を起して居るから、家族を連れずして、單身で渡韓して、一家を構へる運びに至りても、尙鄕里の妻を呼ばずして、妻までを假りに一時的の間に合せを迎へて、妾の如く下女の如く妻の如く、召使ふて一家を構へるのである、ですから韓國で一家を構へて居る者は、鄕里の方には妻もあり子もある者が多いのである、中には鄕里を立つ時に、正妻を連れないで、圍ひ者か或は、朝鮮行の連れを特に拵へて渡韓する者が多い、之れ等も渡韓せば即ち朝鮮女房と化するのである。

　夫婦の關係が此の如きであるから、朝鮮女房は皆不品行で不貞操であつて、夫も亦不品行で內を外にして藝妓買ひを爲し、料理屋遊びを爲し、廓通ひを爲すのである、妻も亦醜聞を流すのである、故に斯る夫婦間に生れる子は無論、私生子、庶子となるのである、其生子を養育するにも、甚だ不完全の行り方であるから亦不品行の息子が出來、不品行の娘が出來るのである此の如き有樣であるから、家庭の腐敗、墮落、不和、無味、無情は寧ろ當然と云ふべしてある。

　韓國の我居留地は、何所でも風俗紛亂であつて、夫れが久しきに亘つて居つて、其裡に生活する者は、之等の點に就いては、杞憂する者も別にないやうである然しこの事は、社會問題の上から速に改善せないと、海外に於ける新日本の發展上、直接に或は間接に沮害物となるので實に將來が氣遣はれるのである、同胞が不品行の證據は、各居留地に比較的、料理屋多く、藝妓多く、特別藝妓（娼妓を朝鮮では特別藝妓と云ふ）多きに徵しても明白に分るのである、斯る社會の繁榮は外國人や亦は韓國視察者等の如き者を相手とするは少ない所で、其繁榮の客は皆我居留地の同胞である、斯る社會の繁榮を、居留地の膨脹とか、大發展とか云ふて歡迎する者があるやうであるが、余は首肯することが出來ないので、大なる社會問題の一つとして、同胞の注意改善すべき一問題であらうと思ふ。

　家庭は即ち國家の本であるから、平和で圓滿で健全でなければならぬ、亦個人の事業の上より見ても、不完全なる家庭は其事業の發達せない基となるのである健全圓滿平和なる家庭を有する所の者は、其事業も發達するのである、亦健全圓滿平和の家庭を有する國民

の多くある國家は即ち健全の國家となるのである、ですからして家庭改善問題の如きは、八釜間敷云ふのみでなくて、實行せねばならぬ大問題であらうと思はれる、在韓同胞の家庭の改善を計る如きは、之れも韓國經營上、忽諸に附すべからざるの一問題であらうと思ふ、此の如き不完全なる家庭は、在韓同胞者悉く皆然りと云ふのではないが、獨り下流社會のみに止らず、中流社會の家庭にも往々不完全のものがあるから、玆に陳べて世の注意を促したる次第であります。

## 從軍餘談

○○生

▲美しき會食

九連城を陷れた夜、軍司令部内の路上に、篝火を焚き、宮殿下并に黑木大將を始として、參謀官一統居並び、敵の捕虜將校二名をも其席に列せしめ、敵ながら、天晴の働き振、其日の戰勞を慰めんとて、ウイスキーを擧げて共に健康を祝された、我等の一行も、其席末を涜したが、其場の光景、宛として畫の如く、尤も美しい會食であつた、通信員の一人は、戯れて曰く、「惜むらくは敵將のクロパトキンあらざるを」

▲狐將軍

砲兵大尉マツキユー氏其通譯を顧みて曰く、「君は黑鳩將軍の綽名を知れりや」、「否」ゼネラル、フオツクス（狐將軍）とは露軍を通じての彼の綽名なり、假令い海城に來るも、遠からずしてハルピンに逃走せんのみと、呵々大笑す

▲我兵の義氣從軍武官を感ぜしむ

追擊隊の砲火も稍下火となり、衛生隊も、敵兵看護の暇を得たりし故、露の負傷兵擔架にて運びけるが、今や、重傷者の一人を運び去らんとて、擔架を露兵の傍に置きし時、外國通信員從軍武官も、其傍に集り來り我兵の行動に注視せり、露兵は、殊の外重傷にて、泡を吹き、呻き叫び、顏や頭には、蠅群れども、拂ふに由なし、我兵之を見て、不憫と思ひけん、己が帽子を脫ぎ、之を扇となして、群れ來る蠅を拂ひ遣る、日本兵士の義氣を見て、流石蚤捕眼にて、我皇軍の一擧一動を、注視せる外人等の、深く賞讃の念を、切ならしめしが如し、

▲戰場の火事場泥棒

支那人の、火事場泥棒的根性は、危險を冒して、戰地を出入し、我が戰國時代の、百姓等に行はれたる、落人脫の如き、行爲をなす、一戰濟むや、彼等は、大笊を肩に掛けて、戰場をあさり、死屍のポケツトを探して金品を竊取し、甚だしきは、其被服を剝ぎ、赤裸となす抔、暴狀至らざるなし、之が爲めに、聯隊番號等の不明となる爲、我軍にては、其警戒を嚴にするも、彼等の敏捷なる、出沒自在捕捉するに苦しむ、中にも滑稽なるは、砲彈銃丸等を、ウンと背負ひ込みて、まご〳〵なし居る者あり、宛然たる古鐵買の體裁なり、

▲外國通信員と負傷者

外國通信員等は、或は强者に對するよりも、弱者を憫む人情の、常態より出しものか、道に捕虜と會する事あれば、殘り少なきシガーを與へて、其情を慰むることあり、摩天嶺の戰にも、或露兵頭に貫通せる銃創

を受け、滿面紅血に染みて、打倒れ、呻き苦しめる者ありけるが、通信員等は不憫とや思ひけむ、先づ背に負へる外套を取外し、兩人して、體を持ち上げ、余は兩足を取り、傍の木蔭に運び、携へ來りし、ウヰスキーを飲ませければ、閉ぢし眼を開き、敵か味方か、未知の恩誼に、無量の感に堪へざりけん、感恩の涙滂沱として、滿面の紅血を洗ふを見て、通信員も余も、豈に一掬の涙なからむや、相顧みて無言の儘、前方戰線に進み行けり、

### ▲十年晩れて居る

英國新聞紙中でも、殊に、プロ、ジヤメニース（日本專賣）の、モーニングポストのナイト氏、常に、僕に語つて、「露國の遣り方は、今日の歐洲の各國から較べると、凡て十年晩れて居る」と、其理由を問へば、「それは日本の軍人が、充分說明する事が出來やう」と、言つて呵々大笑した、

### ▲黑木大將と外國記者

義州に在る間、一度も外國記者に會はなかつた、大將黑木男爵は、鴨綠江を渡りし一日の夜、九連城に於て、始めて外國記者に握手した、曰く「鴨綠江を渡らなければ諸君に御目に掛らん積りで居りました」と、以て大將の、決心を知るべしてある、

### ▲久邇宮殿下の御謙德

久邇宮殿下には、黑木大將等と共に、安東縣を御出發あらせられし時には、同縣駐屯の淸兵一大隊許が、一行を御送し、そして鳳凰城に、着かれた時には、同地の淸國軍隊が、御迎ひ申上げた、一同馬から下りられて、禮を受けられし時に、黑木大將が、宮殿下に席を讓られたが、殿下には固辭して受けさせられず、强いて次席に着かせられた、余が之れを證明せる迄もなく、斯くと見た英米人は、早くも、夫れと悟て、酷く御謙讓の德を、稱へて居た、

### ▲宮殿下の御仁慈

我軍が敵の捕虜を遇するや、實に寬大恩仁を極めて居る、殊に負傷兵の如きは、出來得る限りの治療を施し、些の遺憾なしと云ふのは、外國從軍記者の評てある、現に去る八日の如きは、宮殿下、並びに、黑木大將は、露の負傷兵を、安東縣官立病院に見舞はれ、懇篤なる御言葉を賜はつた上、一錢の貯もなき兵士には、各金五十圓宛を、賜はつたとの事、殊遇此に至つて、極はりてある、然るに、之に反して、何ぞ露軍の暴虐なる、その一例を擧くれば、去る一日虎山の戰に於て、我軍僅か二人の、捕虜たりし近衞の一兵卒を、木に縛し、鼻を殺ぎ、下齒を引き拔き、見るも慘酷たらしい、殺戮をやつた、而して此慘話を參謀官から聞かされた一外國通信の如きは、歸途語つて曰く、「恐らく馬賊の所爲て露兵てはあるまい」と云つた、何處迄彼を庇蔭しやうとするのだらう、

### ▲鳳凰城の日本婦人

敵地も敵地荒くれた露兵の充滿して居た鳳凰城に只つた一人の日本婦人があつた、この日本婦人は、元露人の妾てあつたが、戰爭前は料理屋のやうな事をして居たそうだが、我軍の急迫鳳凰城を突いたので、露軍は狼狽遁逃の際、彼れ一人り逃げ殘つて、今に在住して居るけれども、一時商品器具を其儘にして、或る田舍へ避けた間に、支那人の爲めに橫奪されて、今は、何の蓄もなく、僅かに我軍政署の保護に依つて、其日を送つて居る、余は一日某と共に、その女を訪問して見た、當地には、日本の醜業婦五名ありしが、此の女も醜業婦て、生地は例の島原の者て、十年前に、浦港に航し、今年三十歲になると云ふ、名は、尾崎みつと云つて

ハルビン、ニコリスクを股に掛けて、旅順の果て迄も行つた事があると、而して、當地へ來てから、九ヶ月目ではあるが、少の財産も拵らへ、今度は一度歸國しやうと思つた矢先て、飛だ目に逢ひましたと、嘆じて居た、同様せし婦人は、伴ふて遼陽方面に逃げやうと、强らたれが無理に拒ばんて、踏み止まつたのだと、當人は語つて居る、同人には、四歳許りなる雜種兒が居るので、聞て見れば、自分の子てはなく、矢張り洋妾てあつた、日本婦人の子て、兩親共に亡くなつた爲め、引取つて世話して居るとの事てある、同人は、洋裝にして束髮、九州辯てはあるが、なかなか、話の出來る、大に、支那官吏の意氣地なきを、罵しり露兵の愚を笑ひ、談、東郷少佐の事に及ぶや、柳眉を逆立て、「もし少佐てあると云ふ事を知つて居りましたら、後て聞いて殘念な事をしました」と、暗に露軍に於ける日探を以て任じて居る所など、頗ぶる可憐てある、(尤も同少佐と同行せし婦人は、同人が所謂姉妹分のものなりしと)、何にせよ氣焔万丈當る可らずて、醜業婦の口から國家を論ずるを聞くのも、又一奇てあつた、

▲露營の混雜

鳳凰城連山關に於ける、それと同じく甜水站に於ける舍營も、又遠く人家を離れた小川の側に、天幕を張る事になつた、外人は僅かに九名てあるが、通譯從僕の二人の日本人の外に少くともそこていざ舍營となると外人の通譯とは天幕をいづれ樹蔭に張るが、其傍に從僕は料理場を造らればならぬ、そして其所に寢るのてあるが、扨困るのは、大勢の淸韓人て、馬耳の内に寢るもの、其下に轉るもの、或は露天に臥す者、丸て日本なら乞食の生活だ、そして加之に馬が各自に四五頭は居るから、長滯留と見ると厩を造ると云ふ始末てある、それも此頃の様に、晴天つゞきてあると宜いが、一度降雨となると其混雜は一通りでない、今迄外に抛り出してあつた、荷物を、悉く車の内と下に入れる、從つて淸韓人夫の居る所が無くなる、其中に料理場に雨が漏り出す、今迄の小川は汜濫する、折角某通譯が、半日費つて七八人の淸人を使つて造つた、水浴場を滅茶々々にして終ふのみならず、第一飮料水がなくなる、半里もある村落へ水を取りにやる、氣候が激變するので濡れたまゝて寢起きをするので、支那人が病氣を惹起す、ソレ軍醫部へ行け、其手續は通譯がする、馬が怪我をした獸醫部へ引張つて行け、蹄鐵が外れた馬が嚙合を初める淸韓人が喧嘩をする、それに仲裁に入らふとしても、通譯とて支那語朝鮮語は、餘り晰せぬから、込み入つた事になると何にが何やら薩張り分らず、何事が起つたかと、外人は周章出す、そして外人共に關して不都合な事件が持上ると、先づ第一に引出されて叱られるのが、通譯てある、嗚呼軍事通信員通譯も、亦辛らい哉、

# 鬼面魔語

醉美生

▲男を魅せんと思ふ女は、宜しく薄暮薄化粧して嫣然として笑むべし。

▲東京人の御幣擔なるはするめをあたりめといひ、すり芋をあたり芋と呼び、すゞり箱をあたり箱と名づくるにても知らる、序に最も不吉なる梅兒を大當とでも改めては如何。

▲流石に東京は大都會なりと頷かるゝこと唯一あり、彼美人の齊々して多きこと是れ。

▲醉時の快に歌ひて、二日醉の苦しきにもどさんか、寧ろ始めより白湯飲みて平々淡々たらんか。砂糖の甘きに舌うちてビツトルの苦きに眉をあ

つめんか、寧ろ初めより味噌汁を啜つて豆々しからんか。この間を決するはやがて人生の大問題を決するなり。

▲文庫に掲げられたる平井紅雨氏の「未だ及ばず」、緑雨氏を學びて未た及ばざる所あるも、又なか〳〵に他人の及ばざる筆なり。

▲天鼓誌上、翔人氏の「高田實と村田政雄」面白し。予元來高田贔屓家なり、村田は予の見ることを熱望して未だ見ざる人なり、予も亦二人者を研究して其所見を公にせんと思ふ。

▲トルストイ翁が思想の大變化を來たせるは毫も怪むに足らず、性來眞摯、熱誠なる人が青春の情を恣まにせば老後當然來らざるべからざる結論なり、只翁が大人物なる丈け其眞摯熱誠も亦大に、從て其結論も亦甚だ大なるのみ。

▲ツルゲーネフの小説をよむ、終始夢幻的の美感に醉うて卷の了るを覺えず。トルストイの小説を讀む、屢々我が身の上の顧られて、卷を閉ぢて沈思默想するを禁ずる能はず。ツルゲーネフの作は純然たる美術として見るべし。トルストイの作は純然たる人間學として見るべし。

▲「アンナ、カレニナ」のレヴィンやキッチーや、アンナやウロンスキーや、ステッファンやドルリーや皆吾人の日常親しく知れる人を憶ひ起さしむ、否な自分自身が已に彼等の考へたることを考へ、彼等の行ひたることを行はんとしつゝあるなり。例令トルストイの教訓の顧られざる時あるもトルストイの小説の讀まれざる時はあるまじ。

▲藝人高座に上りしとき必ず一人の具眼者あることを信じ、其一人の具眼者に向て演藝するの覺悟あるべし。然らざれば決して名人となること能はず。

▲七人といふ雜誌、七人の詩文いよ〳〵振はざるは氣の毒なり、せめて一二頁位も面白く讀まるゝ詩文を載せて貰ひたし。

▲同誌上夏目漱石氏の「琴のそら音」はあの雜誌には勿躰なき作物なり、夏目氏の筆行く所として可ならざるなし、此篇は四十餘頁に亘るものにして構想の巧と警句の多きを以て優る、友人の家にて幽靈談を聞き、神經稍々過敏となれる歸途、見るもの聞くもの、皆魂を驚かし、膽を冷やしめざるなく、遂に迷信婆の遠吠論に服し、巡査の音づれに色を失へ、愈々露子に凶事ありと定むるまでの筆致飽くまでも緊張して殆んど一分の隙なし、又四谷に至りてよりは筆法がらりと一變して頓に滑稽の感を起さしめ、次て床屋に於ける狸和尚の心理學講義あり、最後に大笑に終るまで誠に自然にして而かも面白し、鏡花ならば只の幽靈談にして了らめしならん、幽靈談の如くにして大滑稽談たりし所夏目氏の夏目氏たる所、殊に最後の「七十二頁にK君の例」の如き獨得の妙を見る。而して警句の妙に至つては殆んど拾ふに堪へず、こは他日に讓らん。

▲爛熳たる紅花の候より蓊鬱たる綠葉の節に移る間に新綠雨に惱む時あり、恰かも是れ已に空想の城を出て而かも未だ實際の境に入り能はざる青年の如きか。

▲角力協會の一大改革あり、全國の好角家をして快哉を味はしむ。而して其注目の中心となるものは荒岩にして荒岩對梅ヶ谷、荒岩對國見山、荒岩對太刀山等皆力瘤を入れて待ち焦るゝものたり、年三十五にして怪力奇術益々其怪奇を發し、遂に大關となつて一代の人氣を小作りの躰（からだ）(勿論力士として)に集む。偉なるかな荒岩。

▲罪惡の大部は單なる好奇心より起る。古の所謂サーパントは好奇の異名なり。

▲或罪惡を犯して其結果覿面にあらはれんとする時程、人間を嚴肅ならしむるものなし。

▲癩病は櫻花の如し。其盛り短きも美なるに於て、其實のとるに足らざるに於て。

## 社會

# 日比谷公園

二葉生

### 公園としての價値

東京市の公園としての價値は、彼是れと云ふだけ野暮て、只だゞ廣くゴチャ〳〵と種々の植込みがあつて、鶴が水を吹いたり鴨の嘴から噴水が出たり、何となく物足らぬ花壇があつたりして、素人細工の箱庭の大きいのである。あれで若し躑躅でもなかつたならば、全然價値のないものとなるのだ、が、幸ひに此花があるので、漸くに體面が保たれて居るのである。けれども此の公園は創設より間のない事で、樹木なども新たに植ゑたのであるから是非はないが、夏の日綠蔭涼風を招くの處もなく、冬の朝積雪詩料を滿す處もない、夏の公園でもなければ又冬の公園でもないのだ。春はいかに、香雪空に漲り來る處もなく、秋はいかに、千樹瓊樓を擁する趣きもなく、平々凡々たるものである。

たゞ初夏より中秋にかけての夜中こそ、この公園の命であらう。けれども其命甚だ感服しかねるものが多い。全體此處は上野の公園とも違ひ、また芝公園とも趣きが異なつてゐる、淺草の公園とは猶更霄壤の差がある筈である。一種特別に毛色の變つたところが、日比谷公園の公園たる特性でなければならぬのだ。が、上野や芝の公園とは無論變つて居るけれど、或る點に於ては頗ぶる淺草公園に接近して居る傾きがある。否、傾向のあるどころではなく、賑やかでない、觀音樣のお堂がない、諸興行ものがないまでゞ、淺草公園の殆んど卵くらゐにまで、蹂躪されて居るのだ。最う十年も經過したら日比谷公園は戀の公園となるかも知れぬ。

戀の公園！戀の公園！。斯う云ふとハイカラ式になつて、至極面白いやうに聞え、彼の洋行歸りの先生方が、ヤレ佛蘭西の某公園は何うであるの、英吉利の何公園は斯うであるのと、金髮綠眼のアニマル主義までを、有難がつて日本東京の公園も歐洲化したと云ふか

知らぬが、我等は俄かに首肯することが出來ない。折角の清い公園を魔風に吹き捲られて、東京ッ子たるものが默しては居られまい。警視廳は直ぐ眼と鼻の先きにありながら、公園の門前に巡査の派出所は有りながら、折には園内もボカリ〳〵と靴の音をさせて歩いて居ながら…。

と、云ふ光景であるから、日比谷公園が何處までの程度に汚されて居るか、何うして淺草公園と接近して居るかを、極めて露骨に記いて、輿論の力を借り、切めてこの公園だけでも清潔に我々の散歩が出來るやうに仕度。たゞに其樣なことばかりでなく、此儘で取締を緩慢にしたならば、いよ〳〵風紀を害し、白晝も百鬼の横行――今でも横行はして居るが、白地には流石剝き出さないで菩薩らしい虫も殺しさうもない面だけは被つてゐる――を見るに至るのだ。であるから、大に警戒を其筋でも加へて貰ひたいのである。

### 晝の公園

順序として先づ晝間の公園から記さう。白晝の公園ては別に讀者を驚すやうなことはない。運動場で未來の大臣や將來の紳士が、種々の遊戯を遣つて居るが、第一に衆目に觸れるてあらう。その外は三々五々園内を散歩する男女が、喜嬉として樂みに滿されて居る。斯うばかりでは、實に白晝の日比谷園は一のパラダイスである。けれども物には皆表裏のあるもので、この樂みに包まれて居るらしき男女にも、存外樂しからぬもあらうさ、煩悶懊惱を慰さんが爲めに散歩するもあらうさ。到底神樣でない以上はそんな事が解かるものてないが、多く躑躅が丘の四阿、噴水池の邊なる四阿、などを本陣とする怪物がある。

怪物と云へど矢張り横目縱鼻の、而かも並々より華美に紅粉を飾り、香水の匂ひプン〳〵と鼻を衝いて來たり、嫣然乍ち見る一痕圓、その深さ千萬丈にして家をも埋むべく國をも塡むべしだ。蓋しこれぞ家を埋むるにあらず、國を塡むるにあらず、金銀財寶を詐取するの穴てあつて、財寶を得る方便に何物でも陷るのだが、此の公園へ白晝陷穽を作るものは、お孃お蔦と綽號を得た八丁堀の怪物と云ふ事である。

お孃お蔦といふは當年正に七十三歳、腰は海老の如くに曲り、眼はショボ〳〵として常に眼脂に閉され、一見三文の價なき婆さんてある。が、若き年より賣りこんだ名は怖しく、今も三四十人の部下を都督して、其の稼ぎ場所をも指定して居る、ある向き〳〵

々への渡り――彼等が稱する一の符牒で、俗に云ふ金擲を搾めて牽制するので、ある向とは矢張りある向きで、其のある向きの者の職務を牽制するのだ―が行渡つてゐるから餘程見逃し難いのでないと、十中の九までは大丈夫だと大威張り。

其の部下が、代る〳〵出張して怪腕を弄する。併しそれが非常に巧妙なもので、ハイカラ式と見て把ると、女學生風をした者が一瞥を送つて、談話を仕懸ける機會をつくる。蛇が見込んだ蛙男が田舍ものだと見ると、國許から口裏で引き出して同國者と瞞着し、千差萬別の智識を搾つて籠絡するのだ。處で彼等の服裝は何うであるか。それは一樣でない。思ひ〳〵であるから分らぬと云ふが正直の言葉である。ある向きのある者はお蔦と語つて曰く

『此節ア、おい等も箍が弛んだと見えて、カラ意氣地がねえや。』

『甘く云つてらア、お前なんか、チツト坐てゝも毎日五兩や三兩にならねえ日はあるめへ、うめへ株ぢやアねえか。』

『ホヽホヽ、今ぢやァ全く錢にならねえや、五兩づゝ揚りがあつたッて、なア、それ半分は年貢に入つちまア。』

彼れが云ふ年貢とは、即ち渡りをつける金、部下を無事に働かせる爲めに、蒔き散らすところの金であるのだ、これにて彼等社會の消息は、十分に知るを得るであらう。白晝の公園は敢て變つたこともない、夜の幕を絞つて反射鏡に映さうよ。

### 夜の公園

夜の公園は、春の末そよ吹く風の温暖く、種々の花の咲き出す頃より、夏は素よりのこと、秋の最初までを命として居る。砂塵吹まくる冬の夜は、我れ人ともに『オヽ寒い〳〵』で、彼樣だゞ廣い處で寒晒しになる愚は先づ多くしない、けれども我々の考への及ばぬ怜悧な人達があるもので、寒いことも無いのやら、將た寒風に肌膚を鍛錬るのやら、寒夜でも「闇黑の植込からガサ〳〵と人の出て來るのには驚かされることが度々あります」と園丁の語るを聞いた。

遠くから眺めると、電燈が煌々と暗に輝いて、夜の公園を飾つて居る光景は如何にも華やかである。殊に月の明かき夜などは、猶更園内を散歩しやうと云ふ氣に誰れもなる。況して若葉の馨り床しく、風なき夜半の今日此ごろなどは、一層の趣きもあり、終日紅塵の

間に齷齪する心を清潔と洗ふにも好い。が、只だ恐れることが二ッある、それが何であるか、一ッは新緑よりポタリ〳〵と毛虫が落ちて、不意に頸元より襲撃さるゝのだ。今一ッは何であるか、さアそれが甚だ此の公園の神聖を汚して居るやうに思はれる。それが眞摯の戀愛ならば、又そこには底もあれば蓋もあるやうなものだが、一時的戀愛——金錢に交換する博愛なラブ——てあるのだ。

前者は年中ポタリ〳〵と落ちるものでない、一年の中に僅々三四十日間も注意すると宜い。特に若葉の頃さへ用心すれば敢て驚くに足りないが、後者に至つては、殆んど四季を通じて出没するのだから始末にいかぬ。けれども彼等とて素より博愛専門に戀の商業者だとは名乗つて居ない。矢張普通の散歩者の如く、園内運動者の如く、植込の間を縫ひ歩いて腰掛に腰を掛てゐる。是等の化性のものには多く附隨者——壯い男、婆アさん——がある。其附隨者の勞働によつて本尊菩薩は、にこやかに笑みたまひもする。腰掛の半座を分けて博愛主義の實行を誘引もする。見込まれた男その者が博愛主義に向つて報酬の約束さへ整へば、履行を爲すべく手を携へて巣窟へ伴ふのである。

其の巣窟は無論公園以外の地にある、が、何れも遠く離れては居らぬ。多く芝區新櫻田町より虎の門外へかけての處にあつて、外見は何處も極眞面目らしい素人家である。それがくるりと後へ回つて見ると何ぞ圖らん、宛轉花の如き顏——夜目には——に媚を獻し、裊娜柳の如き腰を輕く動かして喃々の聲が漏れて居る。而して大方は二階家である。店では小商をする家とか、一寸と路次を這入つた處の家とかてある。是等は普通の巣窟であるが、其の一等上位にあるものは、彼等の『煉瓦地』と稱する土地にある。煉瓦地とは舊山下見附外から八官町、宗十郎、山下町、山城町附近を指示するのだ。最上等なるものは待合であるさうだが、未だ待合までへ昇進せざる素人家て、黴菌製造所の内職をして居る處が多く、それ等の常得意なるものが、此公園に出没する化性のものに依つて營業されて居るのだ。

扨て彼等一時的戀愛の誘導者が服裝、態度などに就て聊か説明して置かねばならぬ。其の服裝に依りて大別すると三種になる。曰く海老茶式部、曰く藝妓風俗、曰く丸髷扮裝——細君式なるもの尤も多く、それに亞ぐに意氣を専門とする内儀式である——。此の三

種のうちて海老茶式部が、公園内に尤も多く出沒するさうで、其態度も稍輕噪なところがある、故に綠陰深き處木の間を漏るゝ燈光に、一瞥をそゝげば彼れまた破顔一笑を以て答へ、戀は無言の中に成立するものなりとの格言を、極めて手輕に極めて安直に行なつて居る。又意氣を專門の內儀式も殆んと一蓮托生て、五一三六の範圍內にあるのだ。然るに丸髷式の細君然と澄す側になると、天稟の構造――顏貌――に高等といふ冠を戴くを、鼻の先へぶら下げてツンと澄す光景は高等官の奧樣とでも言ひさうだ。それ位であるから何れも下婢體のものは伴れて居る、平常の言葉つきなどは甚だ横柄て、而して尾籠であるけれども、目的の爲めにはベランメーに遊ばせの衣を被せて、高尙がるも洵に可笑い。それが所謂附燒刄て兎角に剝げるに安く、心あつて言葉の研究をすると餘妙秤であると言つたものもある。言葉の奇麗な點になると柄に正反對の海老茶式が落ちをとる――全然てはないが稍や純粹の式部が多いから――。併し公園內に於ける丸髷式のお化は、此處の開園と共に園內を占領しやうとした、イヤ一時はある意味に於て其占領に歸した傾きがあつた。けれども由來臆面のない海老茶式部側の、彼等社會に於ける別働隊の爲めに根據地を蹂躙されて、今では唯だ氣位ばかり高く材木屋の鳶てゐても、別働隊の懸引に壓倒されて昔日の影もない、とは云ふものゝ目カ一紳士を籠絡して、日比谷公園をして彼の歐洲の公園科――ある點に於いて――せしめんとする潛勢力のあるは、矢張りこの丸髷式の怪手腕に屬してゐるであらう。太陽が富士山の後背へ隱れて、夕燒雲の照り反しが水の滴たるやうな新綠に颯と浴びせ、それが段々と薄れて空に幾個かの象嵌入れたやう、星がピカリ〱と光を放ち出すころより夜の世界を十二時まで。・

而して是等化粧のものが出沒する場所は、素より何れと限られては居ない、けれども自然に其の姿を顯す場所は稍や極つて居るも訝しい。丸髷式の殆んと繩張內としてゐる處は、園內の休憩所松本の周圍から、鶴の噴水ある池邊、躑躅が丘の四阿あたりを占領し、其間に媚めく香りを夜風に散らして、幾多の浮れ男子の鼻から先に襲ふて、誘ふ手段の巧妙さ、何も知らぬものは、あれがと信じない程である。海老茶式の第一線にて勢力を擅にする處は、日比谷門內の高臺より、音樂堂の後にかけて尤も不可思議の狀を示し、第二線の勢力範圍の地點ともいふべきは、內幸町に寄りて虎の

門の方へ拔ける邊の植込である。第三線の出陣處は西北隅の運動場のあたりより、街鐵電車の往來する濠端(ほりばた)を占めてゐる。時には電車の乘客の如くに裝ひて、愁波と愛嬌を企望者に注ぎ、その手腕を揮ふ階梯を作るさうだ。また藝妓風俗をする一群は、その數に於ても前二者に劣り、勢力範圍に於てもまた劣り、或る時は燈影の陰にチラリと姿を現すこともあるが、殆んど海老式に壓倒され、丸髷式に掻き潑(さら)はれて、其影を納めんとして未だ未練の殘るとでも言ひさうな模樣が見える。

　夜の公園の燈火はまことに奇麗であるが、その燈火の影には、こんな不潔なパチルスが居るかと思ふと、實に不愉快な感じが起る。たゞ日比谷公園の清潔な空氣に洗はれて神聖を保つのは、夜の十二時を過ぎてからである。けれども其頃は園内へ入ることが出來ない、月は皓々と澄渡る夜半、鐵柵の外より窺ふばかりでは物足らぬ、我等に淸き公園で遊ぶを許さぬのである。

●休憩所●

　公園内に二軒の休憩所があつて、和洋の料理も出來、また鮓、汁粉等も出來るが、幸ひにこの休憩所までには未だ魔風が吹きこまぬ。否。より多くは吹き込んで居ないのだ、であるから、切めて之れだけでも眞面目にして置いて貰ひたい。けれども最初開業したときと今日とは、餘程模樣の變つた處もチラ〳〵見受けられる。

日比谷公園は尤も近くに設置したものであるから、變つた趣味もなけれは又書立るまでもなく讀者の百も二百も合點の處だ。故にその暗面にて、世間で餘り人の知らぬ事實を紹介するまでゝある。只だ事實の野卑より出てゝ野卑に了つたは止むを得ない、其點は深く讀者に謝する。

# 新聞活版職工（下）

活版小僧

▲差替●

◎植字と大組の取合「ゲラ刷」が校正から校合されて來ると、前の文撰が受取つて、直りの文字丈(だけ)を拾つて來る、其から差替になるのである。差替は專門に人が居るともあるが、先づ植字の手の明た人や、大組の人がするのである。一躰大組といふものは初めから出來るゝものでなく、植字が大分出來て、此て一面なり二面なり組込まるゝと思はれた時、編輯から記事の順附を貰つて取懸るのであるから、其までは植字の手助け

を爲してゐる。其で此の差替も初の内は大組の人の手で遣るのである。

◎大苦痛大禁物　其處で差替先生は、「ゲラ」と校正刷とを例の如く逆しまに取つて、ピンセットをピン〳〵言はせて、字の顚倒や獲りや誤字を直すのであるが、中には全く植字文撰の過失でなく、起草者の意志で文句を改竄するとがある。此か差替先生に取つて大禁物大苦痛である。字の顚倒や「ルビ」の間違ひ位なれば、如何に多くてもピンセットでチヨイ〳〵啄いて濟むけれとも、假之一字にもせよ、原文より多い字が入るとか、少く削らるゝとが言ふとになると、其の一行の中で融通を利かせねばならぬ。譬へば元の文章より一字多い時には、「二十」といふ句があるのを「廿」と縮め。一字少ない時は「廿」とあるのを「二十」と延すといふ如きものである。が其がさう融通の利く文句計りはないから、時として無理を遣つて、全く捨假なしの句にして了ふ事がある。

◎文章家の罪　其も二字が三字ならば、兎も角も、前后二三行で胡麻化して了うけれども、八字も十字もになづて、何樣しても融通の利かぬとがある。殊に美文か何かとなると、一寸も動が取れないとがある、さうなると八字送り、十字送りて、到頭一段も二段もある文章を、終まで動かす。此に伴なふて「ルビ」も詰め物も動がすのてあるから、殆んど組み直すも同樣て、差替先生此處大弱りの鉢てある。此が新聞なれは可いやうなものゝ、若し雜誌や書籍となると、一一頁附がしてあるから、組方が數十頁も先へ進んてゐると、いや早や靑息吐息。文章家がちよい〳〵、筆の先で書込んだ結果は、斯くも重大な罪を作るものてあつ見てれば。文章を書く人は、大に省みなくてはならぬ。

◎書く人の工夫　其處で此の苦情を防くには、文章を成るべく短かい項とし、別行を澤山に置くとてある。さうすると其中の一項が必ず末尾に空虛があつて、差替先生が送つて來ても此の空虛で息つき得て、最後まで手を煩はさずとも濟むのてある。其次の工風は、書込時に丁度一行なり二行なりに恰當する丈增すなり減すなりするとてある。さうすれば全體の行數には影響が有つても。書入れた丈はスポンと這入り、減した丈はスポン拔けて、差替先生には何の苦痛もない。新聞は雜誌や書籍と違つて、一々頁附をしないから、行數の增減には大した苦痛はないものてある。

## ▲大組

◎此て活版の事濟み　差替が濟て愈々大組となる、此て新聞の一面二面と出來上つて、其から印刷工場に下して鉛版に取つて機械て刷り上る計り、新聞活版の事は此處て濟むだものてある。さて大組をするには、長さ二間巾一間、高さ三尺位の大臺が必要てある。組込は此の臺の上に行はる。此の臺は鐵葉か亞鉛板て張られて、頗る磨り能く堅固なもので、大組を爲す連中は其の廻りを圍んで立つてゐる、丁度醫師の解剖臺の如きものてあらう。主任が一人り、部員數名てある。

◎魔法使ひ　大組の取懸りは新聞社によりて違うが、兎に角比較的に時事問題に遠い分、即ち前々から用意の出來てゐる頁から始まつて、尤も遲く出來る頁に到つて止むのてあるが。其の忙しい時は宛然戰爭も同じて、主任の目色が異樣に光る。さて主任は、新聞一面丈の大箱を、胸の前に引寄せて立つと、他の一人か編輯から廻つた記事の順付を讀み上げる。假に政事面とすると、最初社說と讀み上げる。すると主任先生は先づ社說といふ柱出見しを置き、次に然るべき「オーナメント」を置く、すると他の部員が「へエ社說」といつて「ゲラ」に水を打つて(一體ゲラを取扱ふには水を打たれば崩るゝ恐れがある)主任に渡す。主任は此を受取つて、十四五行乃至二十二三行宛、取つては入れ取つては入れて社說を入れてる。順付讀みは又「お次は政友會の評議員會」と讀む、すると

今差替を了つた一人が「オイ此處だ」といつて渡す、主任は社說の次にメントか罫を入れて、評議員會を組込む。といつたやうに、段々と順付に依つて一面を組み込むのてある。が其の中て體裁上又は編輯の都合上、入り惡くいのを詰め込むとがある。五號文字一行を詰むるには大見出（即ち標題）の前後にある二分「インテル」二枚拔くも可いけれとも五行も六行もになると其計りては行かぬ、其處て各行間の八分「インテル」の引拔に取懸る八枚拔いて一行詰るから、一段を雜と六十行と見て、七八五十六枚拔けて一段に七行は詰め込まるゝ。此が新聞一面七段となると、七七四十九行、小一段も餘計に詰め込まるゝ勘定になる。此の詰める時の談して有るが削る時も其通り、五行削らうと思へば行間に五八四十枚の「インテル」を入れる、十行なれば又其倍て入るれは可い實に「インテル」といふものは神變不思議の働きを爲して、大組先生は實に伸縮自在一種の魔法使ひてはあるまいか。

◎此も非常準備　けれども此は止を得ざる場合、危急存亡の時の非常準備てあつて、普通平和の時に行ふ手段てはない。何故なれば其の形跡が直に判かる。新聞を一見して、ゴタ〳〵してせゝこましく感ずる時がある、此は即ち例の「インテル」引拔ぎを行つた時てある。又此に反して何となく間の拔けて感ずる時がある、此は「インテル」詰込を行つた時てある。胡麻化といふものは何時までも眼ある人を欺くとは出來ないものてある。のみならず「インテル」を無闇に引拔た報は解版の時非常の面倒を來すもので、大に注意しないと總崩れになつて、手も足も出ない破滅に逢ふとがある。

◎天から松が生える　其から小說の入る面とか、社會種の面とか、又は此頃にすると戰爭記事の面となると、挿繪を入るゝに一寸骨が折れる。挿繪も一段物だと何ても無いが、二段拔三段懸りとなると頗る面倒てある。先つ繪の這入る場所を體裁よく極めて、設へば一個なれば中央、二個なれば左右に分けて雁行の體に取ると言た工合にする。其から段割の罫も普通のて行かないから、凡て用事の鉛罫を取出し左右の長を計つて斷ち切り、繪を挾んて入れる。其から繪の左右天地に「ジョス」を詰める、繪の說明を入れる、說明と繪との釣合を見る。此は組込の技術のみならず、多少美術眼をも要するのてある。然るに多くの繪の中には隨分朦朧體も有つて一寸、上下の見さかいが付かぬのがある。又粉な版にしても、木版にしても、入るゝ前に一度インキて刷るから面が汚れて見分か付き惡くい、殊に迅速を尊ぶ場合になると、捻くつて考へてゐる間がないから、浮かりすると天から松が生えたり、人が空中旅行をするといふ奇觀を呈し、編輯から大眼玉を頂戴するとになる。又此の繪を入るゝに付て得て間違ひ易いのは行の入れ違いてある。二行減さなくては成らぬ、一行增さなくてはならぬと、繪の前後て入れたり出したり混雜するから、動もすれは行の附け所を誤まつて、印刷の出來た時見ると、宛て耶馬臺の詩を讀むやうて、何處から何處へ行くのか讀み續きが出來ないやうになるともある。

◎活字の呼び方　其處て大組先生は目を使い、頭を惱まし、四肢を働かして寒のカラ冬にも大汗をかいて一面組み上げると、ルーラーを其上に轉ばしてインキを付け、濕した紙を置き、大ブラシて叩いて、下刷が出來て校正に出す。直つて來る間が一刻千金の極樂て、煙管を取り出して一服、上眼使いて何處を見るともなく、如何にも旨まさうに、如何にも樂しさうてある。が校正刷が文撰て拾はるゝや否、煙管を投げ出して差替へに取懸る。拾ひが惡いと違つた活字をポンと投出し、高らかに「タダスセイ」(即ち正)「もせすのす」と呼ぶ。すると聲に應じて、過たず拾つて來るのてある。一體彼等の仲間には活字を呼ぶに一種の呼び方がある

る、訓と音とを併せ呼ぶのが其法であつて、此は不思議に誤がない。過ちがない即ち右の如く「タヾスセイ」といへば「正」より外にないので此を持つて來る外はない。吾人の千言萬語より此が早いのである。又假名の呼方にも同じヒントがあつて、平假名の「す」の字といふよりは、讀つきの「もせす」の「す」の字といふのである。予も或る場合に「いろはの「す」の字と叫んで文撰を大にまごつかせた事がある。

◎「ノド」「ベタ」　さて右の差替えが濟むと、細紐で結んだ上をメ木で堅くメて其から下のステロ場に下す。其先は印刷工場の部に屬するから此處には記さぬ。普通の面は右の如しとして。序に「ノド」の事を少し話して置かう。「ノド」とは何の意味であるか、即ち咽喉で二個の面を繋く、細き狹き所なるが故にさう云つたのであらう。兎に角二面と三面の間、或は六面と七面の間の如き、雜誌なれば綴目の處に、白い一帶の空地がある。編輯上から言ふと、此處を白くして置くのは、不經濟でもあり、又躰裁上引締らぬ傾があるとして、此にも活字を組込んでゐるが。此も活版工場の手を煩はすのは他の欄内と同樣である。そこで普通表側は鐵道の時間表が這入つてゐるから、一度面倒みて置けば毎日手を懸けないで濟むとだが、記事輻輳した時には其表さへ引抜いて、欄内から溢れた記事を此のノドに收容する（或は欄内の出來上つた時來た種て、截せずに置かれない場合に此を用ゐるともある。此を作るには丁度其の空處丈の鐵の大枠があつて、其の中へ「ゲラ」を組込むるので、別段面倒も無いやうであるが。丁度一杯にしなくては見苦いし、又他のノドへ續くのは不躰裁であるから、其を見積るに一寸工夫を要する。時としては「ルビ」の附た記事をベタ（「ルビ」の附かずインテルを入れぬもの）にして詰込むともある。

## ▲解版

◎台處の後仕舞　さても久しく忘られてゐた女工の噂を爲すべき順序となつた。解版は即ち女工の役目である。解版に女工を使ふのは、活字取扱ひ中で最も損傷散失し易いが此の部なると、そして又此部の仕事が細々して最も婦人に適したると、更に又此な仕事に高い賃錢を拂ふとの出來ないからであらう。解版の仕事は大組で下した大「ゲラ」が「ステロ」場から上つて來た時に初るのである。即ち活字の役目が濟だ後始まるので、言はゞ台處の後仕舞たるに過ぎず。何處までも女の性に叶つてゐる。が解版として女の手を煩はすまでに一寸男工の手を借る所がある。「ステロ」場から上つて來た大ゲラは、取も直さず紙型釜の上立てゝ熱くて迚も手が付けられない。其處で大組部の人々が、ブラシで以て水をドン／＼と撒き懸け、ボッ／＼と立上る湯氣の中から、小ゲラを取出し、ゲラ箱に入れてルビ拔をする、此までは男工の役目で、大組部の者や、偶には植字、文撰も手傳ひするともある。女工が愈々仕事を始むるのは其の翌日の事である。

◎大雪崩　女工は昨夜「ルビ」を拔去られた「ゲラ」を取出して仕事に懸るが。先つ二號三號四號と、大な活字から取つて除ける。其から五號活字の漢字と假名と數字とを分解する。すると後に殘つたものは、「インテル」「タワタ」「スラング」「メント」「ルビ入」「同四、三分の二」「見出丸」等て、又「インテル」を拔き去ると、後は大小の込み物が雜然として混じ。此を一緒に集めるから堪らない、宛然で大雪崩である其處へ年の若い女工共が、前髮を突合はせて、撰り分けるのである。

◎其處へ惚込む　雞が穀類を啄はむやうに、面突込んで、兩肱を張つて兩の指先を働かし、身体を搖振りつゝ、唄歌いつゝ、撰り分るのが見物である。其處へ惚込む謀叛人もあるのだ。斯くて「インテル」「クワタ」「ルビ三分の二」まで一々別個は區分をしてゐると「解版！」と植字から聲が懸る、「ハーイ」と澄だ返事で歸つて行く。ゲラ箱を抱へて戻る。手

引の機械場に行く。ルーラーを轉ばし、逆を抑込み、ハンドルに兩手を懸ける、足を揃へて蹈張る、一心に後ろへ反る。校正刷が出來上る。其から又「ルビ八！」、又植字場から聲が懸る。撰り合けたルビ八を持つて行く。といつたやうな鹽梅て、女工は半ば植字の腰元てある。

◎糸繋ぎ　正午前になると茶の用意に取懸る、大藥罐を四つも五つも持つて、湯を汲んで來る。茶を取出して一々藥罐に振り込む。此も公けてはないが、不文の女工の役目てある。總て飯になる。男工が餅を燒き、蛤鍋を啄き、火鉢を圍んて、大法螺を吹きつゝ飯を掻込てゐる間に。女工は壁と仕事臺の間の狹い處に、莚を敷いて膝突き合はせ、小さい辨當箱を抱へ、人目を憚かるやうに、こつそりと晝飾を濟すのてある。解版が荒かた方づく頃には、「ゲラ」刷が忙かしくなる。手引に行つて例の反を遣る。小箱を抱へて込め物の配布を遣る。其間々には「ゲラ糸」の繼ぎを遣る。「ゲラ糸」とは植字て組み上げた「ゲラ」を括る糸のとて。凧糸位の大さの白木綿製だが。新らしい物計りも使はれぬから、大組の時引抜て山盛にして置たものを、女工が一々解いては繋ぎ、解いては繋ぎして、之を丸く卷くのてある。實に女らしい仕事てある。

◎痛はしき顏の汚れ　處て痛はしいのは顏の汚れてある。活版工場の汚れは久しいもので、活字が原動となつて、籠め物といはず、「ゲラ糸」といはず、小箱其他の器具まて、インキて以て眞黑に鼠色に汚れないものいないから、此に接する人も皆汚れる。着物から手足まてはまだ可いが、遂に顏まて及んで來る。一寸掻いたも撫たり、如何に注意してゐても、長い時間の間には是非此を遣る。設へ女に取つて、何程顏が大事だといつて、浮かり遣るをなら誰といふ差別なく、何處といふ遠慮はないのてある。其も皆が其通りてあるから、後御互に目につかぬやうになつて、鼻の頭、口の邊、眉際に、一刷り二刷り宛、必ず有つてゐて。鼠の三番蹈たといはうか、お釜の鍋墨つけたといはうか、其は其は他から見ると吹出さずに居られない。此の顏が植字の使いか何かて、稀に編輯の方に行くと、一度に哄然と笑ふ、もう女工の姫君、死だ思ひて眞紅な顏して、驅出して行くのてある。

◎兩つ並べて首になる　愈々仕事が了つて、歸るとなると騷ぎてある。洗い場に行つて石鹸てごし〳〵、手足といはず顏といはず、皮膚の剝けるまて洗つて、其から仕事場に返る。後ろの壁を拂つて着物を取出し、新銘仙の綿入、唐縮緬の帶、紅々しい襦袢といつたやうに、仕事着と着替へる。髻を撫て袖口を合はするに時を費し、懷中鏡を取出して後れ髮を撫て上る。其髮も流行に後れず、或は島田、或は銀杏返は普通として、間には花月卷、或は前髮の大いき束髮にリボン懸けた女學生仕立もある。鏡を隱して𥉶つと睨み、につこり崩れて、きつかけに襖を排して出てゝ行くのてある。其處へ惚込んで手出てもするものが有ると、直に工場の風紀紊亂、兩つ並べて首にさるゝから間違いはないものだ。

## ▲假名返し

◎毬栗頭の臑長く　十歲位から十四五まて、二木棒の除れた計り、鼻の下の赤いのも雜つて、「ケース」に向つて立つてゐる。弊衣垢面、毬栗頭て、臑長て、多くは素足てある。彼等の仕事は解版から廻つた假名、數字を撰り分けるのてあつて。背左の掌へ一杯の活字を捧げ、右の手てコト〳〵云はせながら「ケース」へ返すのてある。

◎連節　「いろはアのはアの字だア。のおくウのくウの字だア。其からア五の字だア」といつたやうに。言葉は違つてゐても、節と調子が同じてあるから、能く聲が揃つて、遠くから聞てゐると、連節て流行唄ても唄つてゐるやうて。實に長閑て快い氣持になつて、自然と眠氣を生する計りてある。彼等仕事をする片手て、燒芋や鹽煎餅をむしや〳〵遣

つてゐる。其までは可いが握拳を振り上げ合ふ、遂には「ケース」を覆り返す者も出來する。時として文撰や植字に威かされて、燒芋や鮨の買物に行くこともある。

先づ假名返しは以上の如き單簡なもので、此の外に六號場といふがあつて、前に一區劃を爲した文撰があるが。此も普通の文撰と異なる處はないから別に記すものはない。其から元に歸つて、初め云つた文撰科となり、解版から廻つた活字を「ケース」へ返す。又原稿を拾ふ、此處で環の輪は一週して居るのである。

### ▲時間と賃錢

出社時間は、文撰解版假名返しが早い分て、通常朝八時、植字が其次て九時、大組となる十時十一時に出社するものもある。出社の遲速は退社の遲速に關係するもので、普通服務時間は九時間位てあるから、大組最も遲れて歸り、植字此に次ぎ、最も早く歸るものは假名返し解版文撰等てある。

此頃新聞社て二版三版と作るので、職工の服務時間も種々に錯雜してゐるが。全躰の職工と時間外の仕事を爲さないものは少ない。時間外の仕事は時間内の二倍て、餘程割の可いものになつてゐる。然うなくては、一日分働いた上に骨を折るものが無くなるからてあらう。

賃錢は假名返して六七錢より十錢位まて、女工て二十錢前後、文撰て四五十錢、植字五六十錢、大組は其より少し上てある。大底皆日給て、休日の出勤は二倍を給せられてゐる。て彼等の給料を月に積つて見ると、時間外夜業休日出勤は誰ても遣るとてあるから少なからぬ收入になる。三十圓以上になるものも少なくはない。故に彼等割の善い收入を聞いては、事務や編輯の下廻り先生逹は何時も羨ましがつてゐる。

(をはり)

# 社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は每月十八日

### ▲田舍へお土產　本郷　お酒樣

田紳君永々の在京に、餘程ハイカラになりけるが、友を顧みて「さて太郎兵衞どの、故郷への土產物にはなにがよかんべえのう、輕便て安いもので」、太郎兵衞暫し打案じ、膝を丁と叩き、「電車の回數切符ちうもんが割引があるちうだあ、經濟的て可がつペア」

### ▲戀衣の有難迷惑　牛込　天民生

にひしぼの刷新號といふのに戀衣を激賞した歪文となん云へる人、歌の趣味が餘り解り過ぎて、その戀衣の歌を添削して、此歌が好い〳〵と云つたので、登美子さんなんぞは有難迷惑だわと呟して居る、例へば『またの世は魔神の右手の鞭うばひ美しき惱みながら打たむ』とあるべきそのみながらを見ながらと訂正した如きは嬉しいものてある。

### ▲東郷の濫用　日本橋　小僧

東郷大將の名譽を標せんため、色々な物に其名を附けるも善いが、餘り下だらない物に附けると却て失敬だ、町、停車場、カラー、ネクタイ、インキや錢入、酒、シヤツ、スコッチなどは兎も角蝋燭、下宿屋、ランプのホヤなどと來てはちと…………

## ▲東京市民の氣長

地方人

凡そ何が長いと云たて東京の人位氣の長いものはあるまい、第一、芝公園の人家を移すのに移轉料迄出してそれで揩た揉んだの悶着で五年とか六年とか掛たと云ふぢやないか、其に一倍輪をかけたのは淺草公園が矢張り引越させるに、芝の方の具合を見てからどうかしようと、ゆっくり構へ込んで居たと云ふ事だ、江戸子が氣が早いと云ふのはまさかこんな事を云ふのではなからふが

## ▲妻君監視掛！

淺草 鼻下生

夫婦連れて人力車に乘てるのを見るに、大抵御定まりの樣に女の車が前だ、之は乃公の女房はこんな美人だ、ちと見て呉れと鼻の先へ出して世人へ見せ付けるのか、或は後にすると車夫に挽き逃げされまいかと心配して、それで前にし自分が監視掛をして居るのか、どっちだらう

## ▲風流官

丸の内 大俗生

警視廳は洋服、サーベルの厳かめしい四角四面の御役人樣許り居る御役所と思ふのは間違てる、「此土手に登るべからず警視廳」と云ふ十七字詩をやり出した所などを見ると餘程風流な人の居る御役所に相違ない

## ▲人間は電車に劣る

駒込 哲學生

人間は萬物の靈長だと云ふが事實は電車にも劣て居る、電車は御影石を敷いた立派な道を走て居るが人間は砂利や泥の中を歩るいてる、之は確かな證據ではないか

## ▲市區改正と電車

神田 シヤックリ生

東京の市區改正するのを見るに大抵電車の通る所ばかりだ、必要有ての市區改正でなく電車を通すため、換言すれば電車樣の御通りなる所は人家を取り除いて迄も道を作て上げるのだ、なんと電車樣の勢力は凄まじくも亦ゑらいではないか

## ▲植物園

小石川 野暮天

日曜に小石川の植物園へ行て見ると、男の學生さんと、女の學生さんが澤山來て居る、夫が植物の事など少しも心に懸けず、男は女を、女は男許りを見て居る、一體何をして居るだらふか、高等の教育を受けてる人達だから或る下等な考を持てそんな事をする譯でもあるまい、そこで益々僕はそんな事をする男の學生さん、女の學生さんの心持ちが分からない

## ▲女教員と人爵

宇都宮 三北生

或女教員に婦人同情會（出征軍人家族救護慰問目的）へ入會を勸誘した所が、一言で之を拒絶した、其言草が馬鹿〱しい、同會には其日暮しの裏長屋の女房達が會員中にある許りでなく其會長が人爵を持ッてる人の夫人でないと謂ふのださうだ、學校の先生が人爵を窽いと思ふて居て兒童を教育するのだから飛んだ良妻賢母が出來上つて仕舞ふ、我子が可愛と思ふたら學校になどやらぬ方がましぢや。




# 我が迷信觀

西山筑濱

迷信とは何ぞや―迷信と信仰―迷信と動機―迷信と揣想―迷信と情熱―迷信と詩歌、

## (一) 迷信とは何ぞや

若し之れを文字通りに解すれば、何ものかを迷ひ信ずといふとなり。迷ふは智足らざるが故なり。信ずるは情熱するが故なり。智足らずして情に熱す、迷信ならざるもの果して幾人かある。想ふに迷信は智的作用にあらずして、情的感性に因するが如し。

靈なき山を拜する者あり。情なき草木を崇む者あり。生なき火光を拜するものあれば、心なき岩石を祭るものあり。狐狸に隨喜するものあれば、幽靈に犧牲を供するものあり。天狗の靈驗を吹聽するものあれば、鬼門の說に恐怖するものあり。鳴神に雷獸を想像する者あれば、閃めく電光に善惡神の鬪爭を夢みる者あり。祟山に立ちて靈を呼ぶものあれば、蒼天に向つて自己の不平を訴ふるものあり。赫灼たる朝暾を迎へてアポロン神の雄風を忍ぶ者あれば、嫋嫋たる新月にアルテミス神の俤を慕ふ者あり。一方に寒の氣を惡鬼視するものあれば、他方にこれを善神視するものあり。一方に熱の氣を慈愛の父と仰げば、他方にこれを破壞の魔神と恐るゝ者あり。わが陰影に驚くものあれば、わが陰影を祖先の靈として拜する者あり。甚だしきは廁にさへ守護神ありとして、色々の供物を捧げらるゝ也。虛僞を默許する惠比須の神あれば、戀を叶はす觀世音あり。蛇より出でしといふ女神辨財天は、今尙ほ幾百千の佳人才女が信仰の標的なるを思へば、人間の迷信はそれ遂に盡くるの期なかるべき乎。

われは敢て迷信といふ。何となれば、これ明かに智的作用の所產にあらざればなり。道理の產物にあらずして、想像の產物なればなり。寧ろ理に遠ざかり易き感情の產物なればなり。さればとて、われは敢て迷信を全くあらずもがなと願ふものにあらず、否な、或る程度まではかゝる迷信のあらまく欲するもの也。

蓋し想ふに、迷信の自己を毒し、他人を毒し、世間を毒すといふは、殆んど世間一般の定論なるが如し。われもまた敢て之れを拒まんどするものにあらず。されど、吾人はその毒すといふとの外に、這般の迷信裡より何ものをも拾ひ出す能はざる乎。山を拜し、川を拜し、草木を拜す、元より非道理の沙汰なるべし。非人情の沙汰なるべし。されど、彼等がこれを拜し、これを崇むや、一片の至情實に止む能はざるものあるが故にはあらざるなき乎。虛僞の心よりしてこれを拜するにあらずして、中心の動搖實に壓へんと欲して壓ゆる能はざる底の赤誠あるが故にはあらざるなき乎。若し然らずとせば、われは迷信の何ものよりもより多く人を熱せしめ、より多く人を狂せしむるの理を解するに苦しむ者なり。勿

論中には、自己の慾望を満たさん爲めの手段としてこれを拜し、之れを使役せんとするものなきにしもあらざるべし。されど、彼等の多くは實に斯く感じ、斯く信じてこれを崇める者にあらざるはなし。然らずんばいづくんぞ能く貴重なる自己の身命を一片の木石に托して、安んじて此の天地の間に立つを得むや。斷じて立つ能はざる也。

之れを要するに、迷信もこれを信ずるその人自身に取りては、また決して迷信ならざるなり。むしろ安心を買ふの貨幣たり。迷信といふは、客觀的に觀たる見解にすぎざる也。

## （二）迷信と信仰

迷信も主觀の立地よりすれば、即ち信ずる其の人自身より見れば迷信ならずして、一種の信仰なりとせば、世の所謂清き意味に於ての信仰と如何に相區別せらるべき乎。

凡そ信仰といふ時は、如何なる意味の信仰にせよ、必ず先づ未知のものゝ上に立せられざるべからず。即ち知らざるものを教ゆるの力ならざるべからず。吾人の有限なる智識は、此の無限際なる宇宙万有の廣大に對しては、そこに知るべからず、究むべからざる妙理妙想のいかに多く秘められあるかを教ゆる也。爰に於てか、其の知らざる、その究むべからざる、即ち智識の足らざる所を感情に依り、想像に依り、または意志なぞの諸作用に訴へて、こゝに何ものかを理想し、之れを信じ、これに依らざるべからず。これ所謂信仰なり。シユライエル、マツヘル曰く、信仰は智情意の三作用に關すと。これ眞に味ふべきの言にあらずや。

されど、迷信とはこれに異なり、智の穿鑿をも待たで、己が悲しき、憐れしき、若くは恐ろしき等の情と想像とに訴へて、直ちに其の『信』の對象を造りて之れに歸依し、これを信ずるにあり。此の故に其の對象物の何なるかは彼れの問ふ所にあらざる也。謬誤また念とする所にあらざる也。前者は智明かなれども、後者はむしろ盲なり。前者は『信』の量に於て後者よりも尠く、後者は『信』の度に於て前者よりも強し。一は健全なれども、他は寧ろ病的なり。されど、人性の至情に出で、安心の立命に到るは、兩者殆んど徑庭なきに似たり。

## （三）迷信と動機

迷信をして迷信たらしむるものは、迷信の動機也。迷信の動機とは何ぞや、迷信をして然かあらしむるもの、即ち吾人の心的作用、殊に情的作用これなりとす。

蓋し人間には驚異の念あり、恐怖の情あり。恐怖の情あると共にまた希望の情あり。而して此等の諸情念は、各々宗教的信念の要素を形造ると共に、また實に様々の妄想を構成する一大動機たらずんばあらず。殊に此等の情緒が自然現象と相うち、相觸るゝ時に於て、吾人は實に一大『信』の迷宮を築きいださずんばあらざる也。而して斯る現象は、われ實に太古の民に於てその最も能く發揮せられたるを見る也。

深夜夢覺めて、死せるが如き默寂たる天然現象に對すれば、智あり情ある人間の心は、實に靜かなるを得ざる者なり。殊に元始の民に於ては、其の天地自然の生起を知らざるが故に、かゝる現象に接しては、唯だ死のわが前に迫まり來れるやうに覺えて、中心の動搖自から彼等をして恐怖の念なきを得ざらしむ。恐怖はやがて彼等をして何ものかを祈らしむるの心なり。何ものかに祈り、何ものかの救けを得て、自己の安立を托せんとするの心也。此の時に當り、若し一道の白光東天に兆し來るを認めん乎、彼等の心情はこれを見て救主降れりとなし、歡喜と希望とを以て正に迎へ立つべし。彼等はこれを仰いで神となし、夜と暗黑との征

服者として其の再來を期待せむ。而して幾多の想像と幾多の迷信とはこゝに構成せられて、或は夜の神となり、或は晝の神となり、夜の神は彼等の經驗に依りて知れるが如く、暗黑と恐怖とを人間に與ふるが故に、疎まれて惡神とせられ、晝の神は希望と安心とを來らすが故に、尊まれて救生の神とせられむ。斯くの如き思想の神は、吾人が太古の宗敎に於て少なからず認むる所。尙ほ今日に於ても、此等の神を信奉するもの敢て珍しとせず。而してこれ實に恐怖と願望との所產たらずんばあらざる也。

若し夫れ自己の力の及ばざるもの、或は自己の智識の知る能はざるものの等に接する時は、弱少なる人間の心は、恐怖の情を惹起すると共に、自づからに驚異の念に堪へざるもの也。蓋し其の事物のあまりに奇異なるが故に、若くはあまりに偉大なるが故に、弱少なる人間の智識も、はた其の力も到底企て及ばざるを信ずるがゆゑ也、爰に於てか、驚異の情はやがて一種の迷信を誘發し來りて、其の所作、其の事柄等を神に歸し以て只管其の神の憤怒に觸れざらむことを欲し、これに諸般の犧牲を捧げては、その歡心を得まく希ふに至る。斯くの如きは、實に此の驚異の情に伴ひ來る必要の結果なるが如し。而して此は太古の民にはありがちの事たり。

要するに世の多くの迷信は、斯くして生みいだされ、斯くして保育せられずんばあらざる也。而して以上の諸情緒は、唯一の動機といはざるまでも少なくとも其の重もなる動機たらずんばあらざる也。

## （四）迷信と構想

迷信は想像の產物なり、否な寧ろ想像は迷信の產物なりといふを以て當れるが如し。迷信想像を生み、想像迷信を堅くす。斯くの如きは人類最始の自然なりとす。

いづれの國にか宗敎なからむ。いづれの國にか天地創造の說なからむ。迷信ある宗敎あり、創造の說ある所、必ずや一種の迷信なくんばあらず。迷信ある所、必ずや天地自然に對する自からの構想を宿さずんばあらず。彼のスカンデナヴイア人種の最始の鬼神談の如何に雄大宏莊なるをよ。冷熱の二氣を自然現象の中より捉へ來りて、ローギ、ロードルの善惡神を縱横自在に構想し、ローギ神を以て人間の仇敵となし、破壞的惡神となして之れを恐れ、ロードル神をしてこれが制伏者たらしめ、人間の味方たらしめてこれに善神の稱號を附し、而して之れを拜し、これた崇從せしが如き、或はオヂンの三神を構想し來りて巨人「混沌（ワイマー）」と戰はしめ、之れを斃すやワイマーの亡骸はギンヌンガツプに運ばれ、其の血は流れて海となり、其の肉は碎つて陸となり、其の骨は丘となり、其の眉はミッドガルドを築き、頭蓋は以て蒼穹となり、其の腦漿は散じて雲となり、毛髮は植ゑられて草木となれりといふが如き、嗚呼これ何等の豪放雄大なる構想ぞや。凡そ歷史を有する國民のある所、いづくにも斯くの如き一種の神話、一種の鬼神說なきはあらず。印度の如き、ヘブライの如き、若くば希臘の如きいづれか此の種の國民にあらざるべき。彼の赫灼たる光明を天然現象の間に認めて、其の普照涯りなき偉光に驚き、之れにデーヴの神格を與へて、これを崇拜し、これに隨喜し、デーヴは一切の暗黑と惡魔とを平げて、人類に福祉を賜ふものなりと信じたる吠陀の神話の如き、若くばエホバ神を迥か天外に妄想しては、エデンの園のむかしを忍び、人間の罪惡は一切毒蛇の誘惑にいづとなし、離れての姿、窮めての思ひも、唯だひたすらに其の罪の消えなむことを祈りて止まざりしヘブライの創世說の如き、或はオリンピヤ山上四時白雪の皚々たるを眺めつ、時に雲煙深く閉せるを見ては、其處にゾオス神の御座を忍び、雨に

も風にも、はた天氣にも、悉くゾオス神の御力なりと信じたる希臘最始の神話の如き、いづれかこれ高大優美の思想ならざるべき。いづれかこれ一種の詩的構想にあらざるべき。而もそが抜くべからざる彼等の間の信仰にして、彼等はこれに依つて活き、これに依つて安んじて天地の間に立てりしとせば、誰れかまた敬して聽かざらむや

想ふに迷信の第一要義は、自己を以て他に及ぼすにあり。換言すれば自己の心を以て他を忖度し、自己の考へを他に投射して、他を自己と同視するにあり。此の故に彼等が天然現象に對するや、其の美と大と壯とに感ずるのあまり、これに自己の如き活人の性を與へて、これを眞面目に、單純に、不可思議なる、若くば神聖なるものとやうに認むる也。恐るべき天然現象に對してはこれを惡鬼視すると共に、またその怒りにふれざらむことを欲して之れに犧牲を供し、これに慴伏してひたすらに其の災禍(わざはひ)の到らざらんことを祈り、慈仁なる天然現象に對しては、これを善神視して其の恩徳を感謝し、其の前に隨喜し、崇拜ひたすらに止まざる也。斯くの如く彼等が一切のものを人視するとに依りて、其の雄大なる若くば其の優美なる詩的構想は生みいださるゝ也。

されど、尙は他に彼等の構想をして自由ならしむるものあり。そは原始の狀態に於ては、天然現象に一定の約束なきことこれ也。當時はすべてのものに記號なく、名稱なく、裸々として表はれ、裸々として立てりしなり。記號なく、名稱なきが故に如何やうにも自由に構想せられし也。電光は雷神の手より揮はれたる大槌にして、また蜒々舌を吐くの蛇なりき、疾走したるの雲は、怒れる雷神の眉を垂れしものにて、また駈ける牝馬を追ふの小馬なりき、太陽は公正仁慈なる白神なると共に、金色爛熳たる武裝をなして夜を制伏するの勇者なりき。夫れ斯くの如く、當時は何人もおのが直覺のまゝ自由自在に構想し得たりし也。而も今日の如き理智の判斷に乏しかりしが故に、事實と想像とを混同することは、彼等の敢て拘する所にあらざりし也。これ實にまた構想と迷信とが殆んど同一視せらるゝ所以にあらずとせんや。（未完）

## 新刊紹介（自四月廿五日至五月廿四日）

### ▲人生の行路

吉川潤二郎譯述
内外出版協會發行

原著は『ウエルス、パイ、ゼ、ウエイサドイ』或は『シークレット、オブサクセス』にして其五分の一を翻譯したるものなりといふ、「人生とは何ぞ」「男子の本分」「幼年時代の行路」「女子の本分」「男女の戀愛」「死とは何ぞ」「不朽の生命」等章を分つこと十九、思想穩健なるに加へて文學的趣味あり、譯文亦流麗にして近來の好翻譯なりといふべし。（定價三十錢）

### ▲新式滑稽笑話

本郷書院發行

京都大學出の工學士渡邊清江、東京大學出の文學士蜷川石水兩氏が近衞師團にて落ち合ひ、習志野の勤務中互に語り合ひたる滑稽談を集めたるものなり、文章は今一息と思はるゝふしなきにあらざるも境遇の奇なるだけ又格別の面白味なきにあらず。（定價二十五錢）

### ▲世界大富豪立身傳

成功雜誌社發行

成功雜誌の發刊當時より全誌に載せられたる大富豪立身傳中より其粹を抜き集めて發行したるものなり、レセップ、ロックフエラー、セシルローヅ、カーネギー、モルガン等二十四家の事蹟を記載せり、此等の人の傳記を讀まば日本の了々たる拜金者の如き當に漸死すべきなり。（定價

三十錢）

### △やなぎたる

龍郷左衞門編
本郷書院發行

井上劔花坊の序あり、又中の作も劔花坊のもの最も多きを占む、中には面白きものなきにあらざるも概して羸弱なるに失す。今少し選擇嚴にせざりしは遺憾なり。（定價二十二錢）

### ▲武家時代女學叢書二

梅澤和軒校註
有樂社發行

本卷には大江資衡の女學範、作者不詳の女諸禮集、伴蒿蹊氏の門田の早苗三編を收めり、皆取て以て女學の參考とすべし。（定價三十五錢）

### ▲世界お伽噺第七十一編少年國

岩谷小波編
博物館發行

瑞典のお伽噺なり、殊に小波得意のものと覺しく二三度ばかり談話せられたることありといふ。（定價八錢）

▲日本園藝會雜誌（拾七年第四號）日本園藝會▲教育時論（第七百二十一號）開發社▲少年日露戰史沙河の卷（第十編第一）嚴谷小波編博文館▲歷史地理（第七卷第四號）日本歷史地理研究會▲東洋學藝雜誌（第二百八十三號）東京學士會院▲繪はがき大觀（第一卷第五號）日本葉書會▲教育實驗界（第十五卷第八號）東京育成會▲京華（第百四十號）京華發行所▲新小說（第十年第五卷）春陽堂▲女子之友（第百六十七號）文友社▲少年（第二十號）時事新報社▲實業之日本（第八卷第十號）實業之日本社▲東京遊學案內內外出版協會▲太陽（第十一卷第七號）博文館▲ハガキ文學（第二卷第六號）日本葉書會▲成功（第六卷第六號）成功雜誌社▲新人（第六卷第五號）新人社▲女鑑▲幽翠明全育英社▲商業界（第三卷第六號）同文館▲無盡燈（第十卷第五號）無盡燈社▲英學生（第二卷第一號）東西社▲早稻田學報（第百十七號）早稻田大學出版部▲國民評論（第三號）國民評論社▲體育（第百三十七號）日本體育會▲光風（第一號）光風發行所▲大日本（第三號）亞美通商雜誌大日本社▲卯杖（第三卷第五號）秋聲會出版部▲新聲（第四號）隆文館▲活動之日本（第五號）隆文館▲六條學報（第四十三號）壬寅會文藝部▲精神界（第五卷第四號）浩々洞▲六合雜誌（第二百九十三號）日本ゆにてりあん弘道會▲日本人（第四百十號）政教社▲時代思潮（第二卷第十六號）時代思潮社▲實驗教育指針（第四卷第九號）教授法研究會▲ホトトギス（第五卷第八號）俳書堂▲商家之友（第三十八號）時事新報社▲中學世界（第八卷第六號）博文館▲文藝倶樂部（第十一卷第七號）仝▲弘道（第百五十八號）日本弘道會▲白虹（第一卷第五號）血汐會▲明治農報（第六卷第三十二號）東京三田育種場▲求道（第二卷第四號）求道發行所▲文庫（第二十九卷第一號）內外出版協會▲教育學術界（第十一卷第二號）教育學術研究會▲教育時論（第七百二十二號）開發社▲實業之日本（第八卷第十一號）實業之日本社▲國學院雜誌（第十一卷第五號）國學院▲禪宗（第百二十二號）貝葉書院▲天鼓（第四號）北上屋書店▲音樂新報（第二卷第三號）音樂新報社▲新聲（第一號）隆文館▲東洋哲學（第十二編第五號）哲學館大學同窓會▲精神界（第五卷第五號）浩々洞▲教育實驗界（第五卷第九號）育成會▲慶應義塾學報（第九十號）慶應義塾▲商船學校校友會雜誌（第八十五號）仝校友會▲佛教青年（第二卷第五號）仝雜誌社▲哲學雜誌（第十二卷第二百十八號）▲歷史地理（第七卷第五號）郁文館▲新潮（第二卷第六號）新潮社▲日本園藝會雜誌（十七年第五號）同會▲職分論スマイル原著總編內外出版協會▲にひしほ（第一卷第四號）にひしほ社▲教育公報（第二百九十五號）帝國教育會▲少年日露戰史旅順の卷小波編博文館

# 俳諧叢書

●俳諧大要 子規著 定價貳拾五錢 郵税四錢
●俳人蕪村 子規著 定價貳拾錢 郵税貳錢
●俳諧三佳書 虛子編 定價參拾錢 郵税四錢
●太祇全集 虛子編 定價貳拾錢 郵税貳錢
●几董全集 虛子編 定價貳拾錢 郵税貳錢
●召波樗良句集 虛子編 定價貳拾錢 郵税四錢
●春夏秋冬 春之部 子規選 定價貳拾五錢 郵税貳錢
●同 夏之部 碧虛選 定價貳拾五錢 郵税貳錢
●同 秋之部 碧虛選 定價貳拾五錢 郵税貳錢
●同 冬之部 碧虛選 定價貳拾五錢 郵税貳錢
●俳句問答 上篇 子規著 定價貳拾五錢 郵税四錢
●同 下篇 子規著 定價貳拾五錢 郵税四錢
●俳句界四年間 子規著 定價參拾錢 郵税四錢
●元祿俳家々集 碧梧桐編 定價貳拾錢 郵税貳錢

以下續刊

以上十四冊取揃注文あれば此際特別を以て郵税共金參圓に割引すべし

# 蕪村句集講義

●春之部 定價參拾錢 郵税六錢
●夏之部 定價參拾五錢 郵税六錢
●秋之部 定價參拾五錢 郵税六錢
●冬之部 定價參拾五錢 郵税六錢

右以上四冊ニテ完結
四冊取揃注文あれば此際特別を以て郵税共金壹圓三十錢に割引すべし

●**寒玉集** 第一篇
子規、碧梧桐、虛子の寫生文集也。ホトヽギスに掲載したるものヽ第一輯とす
定價參拾五錢 郵税四錢

●**同** 第二篇（缺本）

●**寫生文集**
子規、嗽石、四方太、碧梧桐、紅綠、虛子、鼠骨、燕洋、傘谷の寫生文集也。ホトヽギスに掲載したる者の第三輯とす
定價參拾錢 郵税四錢

# ホトヽギス

## 八卷八號

故正岡子規の創刊する處にして俳句雜誌としての價値は天下定評あり尚獨り俳句を創作し論評するに止まらず廣く文學美術の作品を載す寫生文の如き漸く識者の認むる處となり本誌の寫生文を學ばざれば價値ある小說は作る可からずといふ者あるに至る普く學者の一讀を乞ふ

●ダンテの地獄めぐり（口繪、寫眞網版）ジュリアン大學の競技會に於て優等賞を得たる時の油畫なり……不折
●蕪村の手紙（寫眞石版）
●千本松原（寫生文）……左千夫
●麓茶屋（寫生文）……虛子
●黒茶碗（寫生文）……遼一
●田舍源氏に就て（續）……鳴雪
●葉水の句解釋（續）……鳴雪
●燕村遺稿講義、秋の句十八句を論講せり……鳴雪、碧梧桐、虛子
●嵯峨半日（紀行文）……碧梧桐
●新聞雜誌の本誌前號評……默語
●芳野より（畫葉書）……默語
●花見、端午（挿畫）……五葉
●泥棒は猫である（寫生文）法師
●秋窓來書及露兵肩章（寫眞版）
●俳體詩、連句
●酒保、喇叭手（挿畫）……朱冠
●各地俳句界、募集句三題
●花の山（裏畫）

定價壹部金十五錢郵税一錢、五部前金郵税共七十五錢、十部前金郵税共壹圓四十五錢、郵券代用壹錢切手に限る

# 日本美術

第七十六號——五月分






東京下谷初音町四

日本美術院編輯部

電話下谷四百一番

東京堂　東海堂　畫報社　京都芸草堂　其他

# 歐米流行高等出來合洋服

謹啓弊店儀從來御華客樣方の御便宜を計り高等出來合洋服を販賣致居候につき何卒御用仰付け被下度奉願上候尙左に高等出來合洋服の特長を御吹聽申上候

▲**廉價なる事** 何故に廉價なりやと申すに第一上等の品柄も一時に多く仕入れ、其裁縫も分業法により袖ズボン等を別々に多くの職工の手に縫はせ、春秋の如き職工の仕事のなき時を利用して手練の職工も賃銀を安く使ふ事を得る故に候、決して粗末なる故に廉價なるにては無之候

▲**御便利なる事** 洋服を御調製遊す時は從來假縫仕立等に非常の日數手間を要し至急の御間に合はぬ不便有之候ひしも高等出來合は百數御好みの流行物を數々取揃へ置候へば弊店まで御足勞を願へば其場にて御身に合ひたるを差上げ得らるゝ便利有之候

▲**特別御注文の品に異らぬ事** 先にも申上候通り地質の選擇職工の選擇を嚴重にいたし候へば特別の御注文被下候ものと決して異なる點は無之候、若し御買上げの洋服にて御身に合はぬ場合は直に縫ひ直し差上げ可申候從來の出來合洋服と申すものゝ如き下等のものには決して無之候

▲**歐米流行** 店主曩に洋服裁縫研究の爲め歐米に遊び候處彼の地にては上流の紳士も悉く此出來合洋服を着け居候を目撃仕り候注文仕立の如きは或る特別の場合の外無之候之を見ても如何に其出來合洋服の上品にして便利なるかを知るに足り可申候 **我日本**にても追々**此風潮**を示し居候も何分一般仕入品は下等の物より外上等物の御求めに應ずる處無之特に習慣上**出來合物**と一概に卑む觀念あり候は如何にも嘆はしき事に存候何卒前述の特長御承知被下御注文仕立の品と差異なく從來の所謂仕入物と其趣を異にせる上等品といふ事をよく〳〵御承知被下度奉願上候

尙ほ今般**業務擴張**の爲め左記へ**移轉**し一層斯業の發達を期し尙ほ**新着**の**珍柄**多數取揃へ置候得ば御好みに隨ひ出來合直段に準じ廉價に新調可仕候

## 定價表

| | | |
|---|---|---|
| フロックコート | 三ツ揃 | 二十圓方 三十圓迄 |
| モーニングコート | 三ツ揃 | 十七圓方 二十三圓迄 |
| 背廣 | 三ツ揃 | 九圓方 二十圓迄 |
| オーバコート | 一枚 | 六圓五十錢方 十五圓迄 |
| インバネス | 一枚 | 六圓五十錢方 十五圓迄 |
| トンビ | 一枚 | 九圓方 十六圓迄 |
| 吾妻コート | 一枚 | 六圓方 十三圓迄 |

但し現金にて一切掛引なし

**地方**より御注文の御方は洋服の種類及び大凡の價格等御通知被下候得ば完全なる寸法雛形並に地質見本送呈可仕候
（但し郵劵十錢封入の事）

東京市神田區小川町通雉子町卅三番地（電話本局一七九一）

嶄新 **洋服廉價裁縫店 米田屋支店**

第一卷第五號 六月十五日發行（定價十錢 郵税二錢）

文藝美術

# にひしほ

創作評論

第一卷第五號要目

●第一回創作研究結果發表

●創作談（其二） 廣津柳浪

●やたら縞（長篇小説） 社中合作

●短篇小説 變哲

●美文 ゆづる

●譯文 紫影

●韻文 菫月一露

●第二回創作研究懸賞募集

●美文 狂醉

●文學界諸子の今昔（月旦） 至文

●新進十詩人（月旦） 仝

●文藝時論 記者

●新作合評 社中

●小説 廣津柳浪

●諸大家愛讀小説（題目數百篇）

東京市麻布區霞町二十二 にひしほ社

第五號六月五日發行

誌友募集

# 白虹

投稿歡迎

地方文壇の巨擘

■『白虹』には前田林外、江見水蔭、田岡嶺雲、花房抑外、河井醉茗、岩野泡鳴、秋元蘆風等の諸先輩の應援せらるゝあり。

■『白虹』は地方文壇の巨擘として立てる唯一の文學雜誌新進作家の玉稿をもれなく網羅す、殊に文庫、白百合の半面を知らんこと欲せば白虹に來れ。

■『白虹』は四六二倍四十餘頁の雜誌敢て呼號するを要せず、吾徒は奮闘を強行する氣鋭の勇士如何に武者振せるかを見よ、

■『白虹』には相馬御風、片上天絃、野村薑雨、大石霧山、登坂北嶺、人見東村、齋藤紫軒、安倍村羊、内海信之、田中紫江、石井楚江等の新進作家の應援せらるゝあり

發行所 岡山市花畑町三十番地 血汐會

創業第十七年　會頭大隈伯爵

# 日本園藝會雜誌

Journal de la Société d' Horticulture du Japan.

第十七年第六號（通編百五十七號）六月十五日發行　定價廿錢郵稅壹錢五厘

或人曰く本誌は園藝會雜誌の名あれども實は一般公衆の機關雜誌なりと

或人曰く本誌は園藝の雜誌にして兼て文學美術の雜誌なりと

或人曰く科學と文學との稠和を危ぶむ者は未だ本誌を知らざるの人也と

或人曰く研究家の机上に置かれ兼て家庭團欒の爐邊に繙かるゝ者は獨り本誌あるのみと

或人曰く本誌には名士の寄稿多し從てその一頁だも輕々觀過する能はずと

或人曰く本誌に說林・園藝談叢・家庭園藝・園藝文壇・紀行・雜錄等の諸欄あり取材また多方面なりと

或人曰く本誌は全部色彩刷にして挿畫また數十葉あり絢爛眼を眩せんとすと

或人曰く本誌は本邦幾多の雜誌中よき意味に於いて最もハイカラなる者なりと

或人曰く本誌は僅に廿錢（會員の會費は尚廉にして一ヶ月拾五錢）天下これより至廉なるものなしと

或人曰く本誌には每號小品文・和歌・俳句の募集あり文藝新進の士がその手腕を揮ふべき好箇の舞臺なるべしと

或人曰く本會は一箇の社交俱樂部なり何となれば時々開催せらるゝ小集會・品評會・談話會・採收旅行會には社會のあらゆる方面の士女の參列を見ればなりと

見本入用者は郵券廿二錢會則入用者は郵券二錢を送れ

發行所　東京市下谷區上根岸六十三番地（電話一九四五）
日本園藝會

### 投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること
▲締切は毎月十八日最終便まで
▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

| 冊數 | 定價 | 郵税共 |
|---|---|---|
| 一冊 | 金拾貳錢 | 金拾參錢 |
| 六冊 | 金六拾五錢 | 金七拾壹錢 |
| 十二冊 | 金壹圓貳拾錢 | 金壹圓卅貳錢 |

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は郵税六錢を要す

中央公論廣告料

| | | |
|---|---|---|
| 一行（五號文字二十四字詰） | 一回 | 金貳拾錢 |
| 四分の一頁 | 一回 | 金貳圓五拾錢 |
| 半頁 | 一回 | 金四圓 |
| 一頁 | 一回 | 金八圓 |
| 表紙の二三四一頁 | 一回 | 金拾五圓 |



### 送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし
一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし
一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし
一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割
一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割



明治三十八年五月卅一日印刷
明治三十八年六月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地（電話下谷九一九）反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



# 中央公論

No 195


明治十九年創刊

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

明治三十八年六月一日發行（毎月一回）

東京本郷區駒込西片町十番地

發行所　反省社

（電話下谷九一九）

東京牛込區加賀町一丁目

印刷所　秀英舍第一工場

大賣捌所

神田表神保町　東京堂

神田裏神保町　上田屋

京橋銀坐四丁目　東海堂

本郷四丁目　文明堂

（定價一部金十二錢）


## 前號概目



▲注意　前號（第五號）は全部賣切れ